

三 木 帶 刀 殿

忠節之次第被聞食候尤神妙彌可守忠節者天氣如此悉之

右 辨 鼠

正平廿二年三月廿三日

三 木 太郎 左衛門尉 殿

就島山右衛門佐御對治永々在陣候條尤神妙候依官途之事不可有子細候也

寛政四年三月廿三日

刑 部 少 輔

三 木 帶 刀 丞 殿

文意ヲ不知而契約狀ヲ確證トシ山崎村ノ忌部ヲ本社ト僞リ唱ル事

忌 部 契 約 狀

正慶元年十一月阿波國御衣御殿人等十三人連署此上ハ一年二度よりあいをくわへてひうちやうあるべく候會合二月廿三日
やまさきのいちを可定者や

中 橋 西 信 地 野 宗 光 高 如 安 行

高河原藤三郎太夫 名 高 河 太 夫 今 鞍 近 士

藤 三 郎 治 野 法 橋 田 方 兵 衛 入 道

赤松藤三郎太夫 永 谷 吉 守 大 坂 半 六

三 木 氏 村

右三木貞太郎所持ト云契約狀ハ正慶元年山崎ノ市ニ會合ノ契約取結ブ以前ハ往古ヨリ忌部ノ本社ニテ一年ニ一度ノ會合

有シ成ル可シ十三人連署ト有レハ是則右本社ニテ會合ノ席ナル可シ又此上ハト云ハ會合ノ席ニテ新規ニ事ヲ取結ブ故此
上ハト云説ヲ置シナル可シ一年二度ヨリ合テ企テ評定有ル可ク候ト云ハ新規ニ契約スル所ノ會合ヲ加ハテ一年二度ノ
會合ナル可シ會合二月廿三日山崎ノ市ヲ可定者也トハ前顯兩度ノ會合ノ内一度ハ從前ノ所ニテ會合シ又此時新規ニ契約
セシ二月廿三日ハ山崎ニテ會合スルハ本文ノ通りナル可シ左スレハ二度山崎ニテスルナラハ二月廿三日ノ外ニ一會スル
其會合ノ月日ヲ十三人連署ノ契約狀ニ書載スルハ當然ノ事ナル可シ然ルニ二月廿三日山崎ノ市ヲ可定ト而已アル故山崎
ノ市ニテ會合ハ一年三度ナル可シ又從前ヨリ此時迄山崎ニテ會合ノ有リシナラハ別段新規ニ契約ヲ取結ブ謂レハナカル
可シ尤正慶元年新規ニ取結ブ一年ニ一度二月廿三日山崎ノ市ニテ會合ハ外山ニハ忌部郷吉良御所平ニ鎮座忌部神社ノ遙
拜所勸請所等モ有リ殊ニ麻殖氏系譜ニ川島ノ郷ニハ御坂氏人ヲ居エ末代不易ノ冥福ヲ祈リ吳島ノ郷ニハ信仰ノ他族ヲ住
セシメテ本社當守ノ幸徳ヲ感セシムト有リ因テ二月廿三日山崎ノ市ノ會合ハ渾テ外山ニ關係セシ事ヲ評定スルナラン左
ナクンハ忌部本社ノ地ヲ去テ新タニ外山ナル山崎村ニテ一年二度ノ會合二月廿三日ト契約スル旨趣ハナカル可シ又此會
合此時從前ヨリ山崎ニテ會合センナラハ山崎ノ市ヲ定ム可シト云山崎ノ地名ヲ書載ル謂レハナカル可シ因テ忌部郷ニテ
此時往古ヨリ例規ノ會合ニ漏レタル外山ノ事ヲ之レ完山崎ノ市ニテ新規ニ會合シ評議スルナラン又此御衣御殿人十三人
連署ノ契約狀ヲ見テモ此時迄一年ニ一度ノ會合セン忌部本社ハ山崎村ノ外ニ在リテ山崎村ノ忌部神社ハ則此神社ノ棟札
ノ如ク忌部郷本社ノ遙拜所勸請所等ノ類ナル可シ殊ニ御衣御殿人ハ渾テ忌部郷ノ人ナル可シ其證トス可キハ此御衣御殿
人ノ姓氏忌部郷ノ地名ニ残り有リ貞光山ニ赤松永谷アリ半田村ニ大坂ト云アリ穴吹山ニ千野日方等ノ地名總テ今以テ殘
リ有リ此外御衣御殿人ノ子孫搜索スレハ必此忌部郷ノ内ニ巨多有ル可シ阿波國鏡ニ曰東端山西端山一宇山穴吹山貞光ニ
社家神主樂人ノ子孫數多有阿陽風土記ニ曰四國ハ當社ノ神領ナリ日本神樂ノ始メハ當社也東端山西端山一宇山穴吹山貞
光ニ社家神主樂人ノ子孫巨多有リ三好長治代々忌部社破崩ニ及ヒ神主樂人モ皆百ト成ル如斯兩書ニ記載有リ因テ御衣御
殿人ハ忌部郷忌部大社ノ社人ニテ有リシ事明瞭ナリ左スレハ此ノ契約ノ會合山崎村ニテ一度而已ナラス二度共スル共此

十三人連署ノ契約狀ヲ以山崎村ノ忌部ヲ或社ノ本社トスル確證ニハナラサル可因テ前顯ノ御衣御殿人十三連署ノ契約狀ヲ以テ式内ノ忌部大社杯ト云テ虚實ヲ議論スルニ於テハ此契約狀ハ却テ山崎村ノ忌部ハ本社ニ在ラサル明瞭判然タル確證トナル可シ

如前顯古文書巨多之レ有リ候得共山崎村忌部ノ本社ニテ有リシト云古文書更ニ無シ併此古文書三木貞太郎ノ家ニ代々所持ノ所御一新ノ際忌部神社所在御搜索ノ折柄倭姦ノ者共相巧ミ三木貞太郎ヲ欺キ山崎村忌部ニ引入レ是レヲ社人ニ加エ貞太郎所持ノ古文書ヲ以右忌部神社ノ履歷ヲ贋作シ倭姦ノ者共種々ノ要計ヲ廻ラシ殊ニ山崎村忌部神社ノ祭禮ニハ三木貞太郎ノ住所ハ山崎村ヨリ距離五里ヲ(五拾町ヲ以テ壹里トス)隔ツト雖モ山崎村忌部神社祭禮ノ節ハ往古ヨリ今以テ貞太郎ニ於テハ年々無懈意來リ參詣スル杯ト實以テ跡形モ無キ虚誦ヲ唱エ奉欺ル府又衆人ヲ僞ルト雖モ總テ忌部郷吉良御所平ニ神代ヨリ鎮座忌部本社ノ履歷ハ此卷中ニ數ヶ條書載セ之レ有通故阿波國者ハ眞僞ヲ悉ク明瞭ニ皆承知ノ事ト雖忌部郷ノ地理ハ素ヨリ長宗我部泰元親ノ兵燹ニ罹リ候忌部大社ノ有リシ古跡等ヲ見サル遠國邊鄙ノ人ハ過テ欺カルニ事無キニモ有ラズ併從前大社ノ有リシト云所モ無ク又聊カ本社ノ由緒ナキ社ヲ奸計ヲ盡シ古文書杯ヲ借取本社ナリト唱エ要路ノ人ヲ欺カント欲スル共賢明ノ有司ヲ欺キ得ル事ハカタカル可シ

山崎村忌部山ノ事

山崎村ノ忌部山ト唱フル山ハ至テ小山ナリ殊ニ山嶺ニ大社ノ有ル可キ平地ナシ此所ニ行イテ地理ヲ一見スレハ忽チ虚實ハ知レル也又諸國ニ天神村天神山天神島天神原天神峠天神ノ森天神河原天神ノ辻天神橋天神町天神馬場等ノ地名數多有リト雖モ決シテ天滿宮ノ本社ノ有リシ所ト云ニ在ラス天滿宮ノ本社ハ筑紫大宰府ニ在リト雖モ大宰府ニ於テ天神ノ名ノ附シ山無シ又天神ノ名ヲ附シ村里モナシ此天神ノ名義ノ有ル村里山嶺ハ總テ往古天滿宮ヲ勸請セシ所ナリ因テ山崎村忌部山ヲ唱フル此天神ノ神號ヲ附シ山村ノ所々ニ在ルト同シ因テ忌部ノ本社ハ忌部郷ノ内ニ在ル故別段忌部山杯ト山號ヲ唱フル事ナ

シ大宰府ノ本社ノ有ル所ニ天神村ヲ唱エサルカ如シ又八幡宮天滿宮ノ社ハ大抵村々ニ在リ殊ニ忌部神社ハ四國ノ大氏神故四國ニテハ所々ニ勸請シ又遙拜所等數多有シ事ハ當然ノ事ナリ既ニ往古川田村西麻植村杯ニモ分社遙拜所ノ有リシ事ハ總テ皆世人ノ知ル所ナリ殊西麻植ノ遙拜所ハ往古聊ナカラモ地所ヲシキ奉リ齋祭リシ故舊來其古跡ヲ地名數地村ト云西麻植村内ニ在リ因テ山崎村ノ忌部モ忌部郷ノ本社ヨリ分社又遙拜所ノ類ナル事ハ前顯記載スル所ノ山崎村忌部神社ノ棟札ヲ見テ知ル可シ

明治十一年己卯一月

東京神田五軒町三番地

静岡縣士族

折目 榮

第
貳
附
錄

國幣中社

忌部神社御祭典興サセラル概略

式内忌部神社ト申處川田村山崎貞光等數ヶ所有之委詳取調左ノ如シ
川田村種穗社今ハ天日鷲命天太玉命拷機千々姫命長白羽神作喰見神ヲ祭り式社ト稱スト雖トモ天和三年社造營ノ時勸進帖
ノ表棚穗大權現ハ天照大神ノ御父母伊弉諾伊弉册二命ノ應仁ニシテ紀伊國熊野人權現ト同体異名ノ靈神ト書顯シ忌部式社
ノ稱ナキ也又式社略考ニモ大歲神ナランカト云リ然シテ世々神主麻穀ヲ朝廷ハ奉獻シテ式内忌部ノ社ト云式社合類ニ忌部
正流ハ應仁天正ノ頃亂ヲ避テ讚州多度津郡中村ヘ落去次男家越ノ忌部氏世々麻穀ヲ奉ルヤウニ成ス種穗忌部也トアリ此ニ
因テ按スルニ麻穀ヲ獻スルハ其神裔ナルヲ以テナランカ社ハ何分式内忌部トハ定メ難ク覺ユルナリ
一山崎村忌部社ハ今王子社ト稱ス本殿ニツテ天日鷲命ト王子權現ト並立セリ傳云昔ハ日鷲命ノ社山ノ上ニアリシカ應永
トカ寶永トカノ頃地震土砂崩レ今ノ所エ移セントソ四至立石御供田其他古器モアレト難信覺ユ神主ハ日鷲命ノ裔ナリト阿
府志ニ見ユサスレハ社ハ自家祖神ノ廟ニテ式社ニハアラサル様見ユルナリ
一貞光村忌部社ハ東端山村友落神社ノ奥山絶頂平地ニ三尺四方程ノ小社也傍近絹織岩屋居跡遙拜所等ノ古名アリ社ハ古
ク見ユレトモ睨ト可據ノ證モナシ神主ハ忌部ノ子孫ナルヨシ阿府志ニ見ユレハ是モ前ニ同シク覺ユルナリ
此外宮島村八幡宮西麻植村中内明神上浦村齊明神牛島村大宮等式社忌部ナランカト説モアレトモ確證ノ可據モアラス因テ
更ニ熟考スルニ現在社ハ無ケレトモ西麻植村ニ廣堂ト云所忌部社古跡ナラント式社略考ニモ見ユル故其他ヲ細檢スルニ廣
堂又ハ大原ト云岡山西麻植山下ニアリ古松數株其上ニ老繁リ里人モ堂ノ裏松ト申傳ヘテイト間曠幽靜ノ地ナリ邱ヲドリ西
手山腰ヲ見レハ荆榛ノ中蟹泉トテ汚池アリ里人カミ泉ヲ訛歟又年ヲ歷シ丸木ノ華表モアリ其他馬場の場御供田神本繪馬堂

古麻神社築地巫塚土器メン等ノ字島地ニ殘レリ又四至ノ立石トテ一基ハ山田村一基ハ川島町一基ハ敷地村一基ハ西麻植丑寅ノ方ニ立石ト云字島中ニ殘リテ石ハ不見ナリシカシ外石各凡九丁許隔リ寶龜年中諸國大中小社四至石丁數ニモ叶ヘルナリサレハ前書岡山間曠幽靜ノ地恐クハ舊社ノ跡ニモ有之歟ト相考候
右忌部神社今日迄取調ノ掛リ繪圖面相添差出候
辛未 八月 八日

西 出 張 所

忌部神社ノ所在不明ノコトハ既ニ先頃届出給ヒシ延喜式内外舊社取調帳ニモ書載セ置タレトモ考證ノ及ハシ限リハナナリヲ盡スヘキコトナルヲ西麻植村ノ廣堂ト云所ニ云々ノ古傳アリト云コトハ愚モ追々聞保テリ未タ其實ヲ踐サレトモ四至ノ立石ト云モノヨリ字ノ唱ヘナト最モ心寄りセラル、一區處ナカラ彼ノ山崎村ナル王子權現ト云地モ亦捨置難キ所ナレハ御届帳上ニモ考證ソレコレ探意抄寫セシテ西麻植村ノ區所ト共ニカキ連ネタルカ如シ此他高越山ニモ舊傳アリテ是モ亦一古蹟ナランカト覺ユ川田村ノ種穂ハ實ニ別紙上ノ如ク又貞光村宮ノ島其餘トモ里老ノ口碑ハアレトモ皆今探ルヘキ確證ヲホツカナシ抑天日驚命ハ此阿波國ニ於テ然ル著明ナル尊神ナレハ其神裔ノ此レ彼レニ散在セル所々ニ必崇敬祭祀センコト疑ナカル可シ況乎麻植ノ地名ノ興ル所以ヲ惟レハ本社ハ必此本郡内ニ認得スヘキヲ中古來陵遲シテ實跡ヲ失ヒタルハ眞ニ萬世ノ遺憾ト云ヘシ又考ルニ彼寶龜二年二月十三日ノ太政官符ト云モノハ類聚神祇本源ニ引用シタリ其文ニ正一位ヨリ正三位以上ヲ爲大社ト從三位ヨリ從四位以上ヲ爲中社ト正五位ヨリ從五位以上ヲ爲小社トアリテ大社四至限九町中社四至限八町小社四至限四町ナト見ユレトモ式内大小社ノ例ニ當レリヤ否ラスヤ愚未タ其意ヲ得ス然ルヲ輓近二三家ノ說ヲ以テ數所ニ唱ル處ノ淺深ヲ辨セス一地ニ決定セント欲スル時ハオノツカラ一已臆斷ノ弊ヲ免レサルヘシ只一已臆斷ノ弊ノミナラス萬古神靈ヲアヤマチ奉ランカ能ク思慮シ奉ルヘキ御事ナリ愚謹テ接スルニ前顯ノ舊跡イチシルシキハナホ存シテ尤モ崇敬シ奉ルコトハ申マテモアラサレトモ古例モアレハ

神祇官ニ申コヒテ新ニ本部内山野ノ不淨ニ觸レサル一清地ヲ擇ミト定ノ上官祭ノ本社ヲ造營シサテ
靈代ニハ神鏡神幣ノ類ヲ招請シ奉リ御祭典アラサセ給ハンニハカノ一已臆斷ノ弊ナキノミナラス後代ニ至リ疑似ノ恐モ無ク蓋嚴重至當ニ之レ有ン歟
辛未 八月

權少屬小杉楳邨建言

(朱 書)

右西民政所見込及小杉楳邨該廳へ獻言共ニ則辛未年神祇省へ進達指揮ヲ仰ク

臣 小杉楳邨誠恐誠惶頓首

謹言本縣下阿波國忌部神社所在ノ件辛未八月來屢上陳ヲ歷ル如ク小社ナリト雖トモ麻植郡中數所ニ御舊蹟口碑ノ傳ルアリテ各地村民尊崇ヲ盡シ全ク往昔而下祭祀中絶スルニアラズ然リトイヘトモ其數所ノ御舊蹟特リ地方ニ斷決センニ只北城四至ノ立石ト云形ハカリモノ或ハ本社ニ限ラサル田地ノ小字及ヒ即今三數家ノ臆說ニ據テ以テ一地トスル時ハ輕忽ノ弊ヲ免レス又以テ自餘ノ村民等敬神ノ眞情ヲ割カンノミナラス最モ容易ナラサル神社萬古尊靈ヲアヤマチ奉ラン恐レ少シトセサレハ確乎タル明徵ヲ得ルニ非ルヨリハ既ニ上表セシ如ク本郡中清潔山野ノ閑地ヲト定シ新ニ該社ヲ造營シテ其靈代ヲ招請奉ラハ彼ノ各所ノ村民其神ノ衷情ヲ割ク憂苦ナク加之國中士民其神祇省ヨリ下附ル所ノ靈代ヲ奉齋シ祇テ意ヲ該社ニ致サン必セリト敢テ持重センハ抑臣楳邨一朝赤心過慮ノ致ス處ナリ嗚呼忌部神社ハ神典正史ニ燦然所見アル如ク舊來 朝廷御尊敬ノ大社ニ在セハ既ニ國幣社列ニ官祭アラセラルルヲ前顯ノ顯末ヲ以テ荏苒月ヲ經レトモ爾後速ニ何等ノ御指令ナントイヘトモ祈年新嘗ノ兩官祭幣帛神饌科等御回シ有之ヲ以テナホ新地下定營造云々六年二月ニ至テ再應長官ヨリ何書ヲ進達ス同三月十九日御指令ニ云新地下定神社造建之儀ハ不被及 御沙汰ト於是愕然篤ク稟議スラク如此御尊崇ノ大社如何セシ嚴密御搜索モナク 朝議此ニ及フ只曖昧ニ湮滅センハ愚輩厚ク恐懼且縣官カラ盡スノ薄キニヨルト一層奮發晝夜焦思意

(朱書)
再應調
書本文
略之

(朱書)
何書本
文略之

ヲ此ニ注キ皇神ニ誓テ徵證ヲ得マク欲スルニ誠ナルカナ冥助有テ不可拔ノ證文ヲ感得セシハ實ニ明治六年八月三十日也於是山崎村ノ神社ヲ以テ本社トスルニ決定ス爾ク本社ニ決定シテ是ヲ按スルニ先年來考證スル所ノ口碑ノ傳説及ヒ田地ノ小字等悉ク以テ明トスルニ足ル直ニ長官ニ議シテ爲ニ同十月新造スルニ及ハス且祭中絶スルニ非レハ依然官祭ト相心得該神社官ノ如キハ地方ニ於テ選舉スヘキヤ御撰任ニ成ヘキヤノ旨伺出ツ豈圖ランヤ同月廿日御指令云忌部神社所在不明ニ付官祭未タ被仰出候儀無之但同社官祭被仰出無之ニ付テハ更ニ同國大麻比古神社ヲ以テ國幣社ニ被列候義ト可相心得然則此國ニシテ此大社ヲ官祭ニ建ラレシ盛舉一弛シテ此ニ至ル該社不明ノ所以ヲ以テナリ今ヤ上文本社分明セシヲ捨テシハ千載ノ御欠典何事カ之ニ如シ臣榎町荷クモ地方屬官ニ列シ兼ルニ神道教導ノ職ヲ辱シテ微力ヲ我國教ニ盡シ縣下士民ヲ誘掖セント欲シ口ニ敬神愛國朝旨遵守セシムル御主意ヲ説ントシテ心ニ之ヲ愉快トセス仰キ願クハ次下考證文書懇切御細檢ヲ加ヘラレ忌部神社ヲシテ依然官祭アラサシメ給ハントヲ意進テ言盡スヲ得ス頗ル尊嚴ヲ冒瀆スル罪其責ヲ甘ス猶實地ニ就テ詳細具狀ノ如キハ御下問ヲ待チ奉ル也臣榎町誠恐誠惶頓首謹言

名東縣權中屬兼大講義 小 杉 榎 郵

明治七年二月二日

教部大輔 穴 戸 環殿

(朱書)

別紙考證文書

正慶元年十一月氏人十三契約狀

右一紙縮臨ス(臨寫略之)

右三木氏村即チ三木貞太郎カ祖先也御衣御殿人ト云ハ此連署ノ人々ナルヘシ所謂古語拾遺阿波忌部ノ裔人ト見ユメルヲ今ハ三木ヲ始テ隣邑ニ二三家現存セルノミ惜ムヘシ

今一昏元弘三年十一月日トアル御衣御殿人けいやく狀ト云モノアリ紙尾ニ連署スル人々上文ノ餘ニ長者長村」長谷吉定」ナト云名見エタレトモ山崎云々ノ事ニ關セサレハコトニ臨セス(以上朱書)

上件古文書所藏スル者ハ麻植郡五小區三木山農三木貞太郎ナリ(元ヨリ農ニアラス藩制ノ時ハ浪人云モノニ取扱ヘリキ)醉乎タル忌部氏人ニシテ(本郡)

及ヒ他郡トモ氏人唱ノル者多シサ(ト居スル山ヲ三ツ木山トイヒ)眞ニ舊家タルヲハ云モ更ナレト中世失火ニ罹リテ其本系帳及ヒ上古傳來ノ調度類多ク

鳥有トナル今猶二三品ノ舊物又 龜山院天皇正元年間領所充行ノ所ノ文書ヨリ起リテ氏長者御殿人等ノ補狀大嘗祭荒妙御

衣織進セシムル官符辨官符(氏モ亦三木ト云蓋シ其調ノ意)ヨリ起レルコト論ヲ待ス又ハ下シ文繪旨ト云モノ或ハ三木名

番頭職下知狀及ヒ此氏人契約狀ノ類寛正永正間ニ及テ凡四十數篇現存ス上ニ掲クル所ノモノモ其一ナリ

サテ本郡山崎村ニ忌部市ト唱ヘテ毎年二月九月廿三日ニ市ヲチアリ今猶古事トシテ忌部社小祭モアリ此市ヲチノ日三木氏

代々三木山ヨリ凡ソ距離山コシノ嶮路四里程餘ナルヲ必參詣スト云是所謂御衣御殿人契約會合ノ餘風ナルコト疑フ可ラス

此事以テ本社ノ明徴トスルニ足ル

徳島藩治ノ際本社所在探索ノヲリ此文書實檢ニ及フヘカリシヲ村吏輩之只三木氏ノ祖先ニノミ關シテ忌部神社ニ係ラスト

時ノ官吏其言ヲ信シテ敢テ問サリシハ何ソ思ハサル甚シキ此寒郷ヤ徳島ヲ距ル十數里ノ山間ナレハ數十篇ノ古文書尋常人

ハ知ルコト稀ニシテ殊ニ三木家重寶無比トシテ平生錦囊ニシ嚴メシク 底ニ秘藏ス今此舉ナカリセハ本社將ニ湮没ヲ極

メントス六年八月月榎町長官ノ命ヲ以テ阿波麻植兩郡間僻民説諭ノ爲ニ巡回シ此山村ニ至リ聞保ツ所ノ古文書ナレハ微證

如何ヲ探ラント一日三木氏ニ請テ之ヲ親シク閱ス果シテ此明證ヲ此家ニ得タリ上言ニ云ハスヤ 皇神冥助有テ爲ニ此微證

ヲ感得スト

此餘舊藩人故野口年長カ此神社考證數種アリトイヘトモミナ此明徴ヲ得サル限りノモノナレハ的實ノ御舊蹟トサシ居ルニ

至ラサリシモ今此古文書ニ山崎トアルヲ以テ照會スレハ前ニモ説ク如ク口碑ノ傳説田地ノ小字皆以テ明徴トスルニ足レリ
其詳カナルコトハ實ニ一紙ノ盡スヘキニラサレハ猶實踐ノ檢査ヲ仰クントス

右書面該省へ持參社寺課長應接ノ上書面ハ直ニ郷輔付屬書記へ廻シ猶考證課ニ於テ其所在明徴等ノ議論大録小中村清矩
ニ委ス

此建言ヲ以テ屢考證課小中村又ハ九等出仕栗田寛ナトニ討論ス就テハ右三木氏古文書全篇ノ本書可指出應接有之兼テ縣廳
へ訂合置タルヲ以テ不日來着直チニ本書全篇大小輔大丞等モ目撃實ニ殊絶ノ明徴ト決定ス尤考證課社寺課等ノ見込モ確乎
タルヨシ議案アレトモ略之

明治七年三月廿三日

(朱書)

- 社
- 穴戸
- 黒田
- 三島
- 鈴木
- 足立
- 齋藤
- 尾越
- 磯村

(以上朱書)

正院伺

阿波國忌部神社之儀ニ付伺

阿波國麻植郡忌部神社之儀ハ辛未五月國幣社列御議定相成候へ共所在未決ヲ以今日迄別段社格 宣下無之然ルニ名東縣權
中屬兼大講義小杉楓邸其徵證ヲ得則同國麻植郡山崎村鎮座天日鷲神社ニ決セル旨ヲ以テ別紙ノ通建言致候仰同社ノ儀ニ付
テハ昨六年二月地方官具狀之趣有之新地下定鎮祭爲致度相伺候所々在不明ニ候ハ、更ニ新地ニ鎮祭ノ儀ハ不可然候條此
迄之通差置可申云々御垂示有之其後於當國別ニ大麻比古神社ヲ以國幣社ニ被列候處今般其所在ヲ得候上ハ一旦天下ニ公布

相成居且當國ニ於テ由緒著明之神社ニ有之旁速ニ社格 宣下相成至當之儀ト存候得共實地ニ涉リ確據ヲ不得候ハテハ僅一
篇之建疏ノミヲ以テ輕卒ニ難相定ニ付當省官員一兩名差向ケ吟味爲致候上更ニ上申可致哉此段相伺候也

太政大臣 三條實美殿

教部大輔 穴戸 璣

(朱書)

伺之通

明治七年四月三十日

太政大臣
臣三條
實美印

七年五月五日

(朱書)

- 鈴木
- 足立
- 中山

穴戸

黒田

三島

(コノ檢印ハ朱書)

社 寺 課

(朱書)

忌部神社所在之儀正院ヨリ御指令ニ付小杉楓邸へ左之口達可致歟
建言之趣尤ニ相聞候旁今般爲檢査當省官員出張候條此旨申聞置

(朱書)

七年五月九日小杉楓邸へ口達ス

中山

名 東 縣

其縣管内忌部神社所在之儀ニ付實地檢査之爲權大録大澤清臣權少録清水重華差向候條爲心得此旨相達候事

明治七年五月十日

教部大輔 宍 戸 璣

其御縣權中屬兼大講義小杉楳郵義忌部神社所在之儀及建言候ニ付今般當省官員差向實地検査爲致候就テハ同人在京中ニ候得共本務差支無之候ハ、歸縣立合致候様御申付石之度此段申入候也

明治七年五月十日

教 部 大 丞

名 東 縣 令 參 事 御 中

忌部神社之儀ニ付伺

阿波國麻植郡忌部神社所在實檢之儀本年四月中相伺候節何之通御指令有之ニ付當省官員出張實地ニ涉リ爲遂検査候處別紙檢注書之通同國同郡山崎村鎮座ニ相違無之徵證愈明確ニ相聞ニ就テハ去ル辛未年五月御議定之町速ニ國幣中社列 宣下相成度仍而此段更ニ相伺候也

明治七年九月廿八日

教部大輔 宍 戸 璣

太政大臣 三 條 實 美 殿

臣等嚮キニ忌部神社所在取調ノ命ヲ奉シテ西下シ以テ其所在ヲ探討スレトモ廢絶既ニ久シク考證ナリ難キカ如シ然レトモ舊藩古家ノ記録ニ因リ旁里俗ノ口碑ヲ參考シ以テ其所緣ヲ溫メレハ則確據明徵ノ掩フ可カラサル者アリ乃チ別紙檢註二册謹テ復命シ以テ進覽ニ備候也

明治七年七月七日

權少錄 清 水 重 華

權大錄 大 澤 清 臣

教部大輔 宍 戸 璣 殿

忌部神社所在檢註

阿波國麻植郡に鎮り座ます忌部神社は延喜神名式に名神大月次新嘗記されたる如く特に崇め祭り給ひていさ著明なりけんをこゝろ年月を経つまゝに其神社の世にも知られず成果給ひしはいとも慷慨くいとも恐懼き極になむ有ける然れば既に明治四年といふに社格は國幣中社に定められつれ其御座所のさたかならねは其國の事執行ふ人々の右に左に搜り索たりしかともいつくをはりとこもりか亭なりしを靈らはふ神のちはひか名東縣權中屬小杉楳郵といふ人の然りともと思ひおこして然るよしありけなる三木山(山云ふは山村の通稱なり)舊家三木貞太郎の藏てる文書を閲たりし中に正慶元年十一月阿波國御衣御殿人等十三人連署の契約狀に此上は一年二度寄り合ひをくわへて評定あるへくは會合二月廿三日やまさきのいちはこの山崎村なる忌部市の事にて毎年二月九月廿三日神祭のとき市たちありしをいひはた此三木貞太郎むかしより代々當日に五里餘の山路を経て今にいたるまで忘る事なく參詣つるは御衣御殿人契約會合の餘風にて山崎村なる玉子權現と列し列に鎮り坐る天日鷲命の神社も忌部神社にましますへきよしはしく註してとし明治七年の二月に奉れりしはいとまめしき所業になん有りけるかくて臣等に命せて其所在を視察しめ給ふまにく其處にいたりて神社のましまするわたり地理字などを檢するに阿波志(舊徳島藩庶臣佐野少進藤原士憲寛政二年に輯成せり)當郡の條に忌部山(下註に在山崎村即忌部町所在之處)と三えたる神社の上方なる山をいへるにて今も忌部山といひまた阿波志に日鷲谷(下註に在忌部祠東清臣按るに東は西の誤なり)古來蒼生と見えたる谷は社地の西なる谷をいへるにて今も然よへり(慶長九年檢地帳にひよし谷記せるは日鷲谷の轉訛なり)また神社より西北の方三四丁許にあたりて人家二十戸許ある地を市名

(名とよへるは一) 三よへり此は彼の檢知帳に市の西市の東と註せる地の事にてむかし忌部の市だちありし所なりといへる
(區の小名なり)

上にいへる正慶元年の文書に會合二月廿三日やまさきのいちなと見えたるに符合へり其餘日鷲谷日鷲名などよへる字も圖
面に記せる如く存せりまた舊社地と稱ふる所あり其東西八十間許南北三十五間許の廣さにて當時は畑になれり現今の社地
より百三十間許山上にあり神社はむかし此所にありしを應永年中の地震に山と共に崩れたりしかと本社は恙もましまして
今の社地の邊に止り給へりしまゝ其處に祭り來れりしを享保十二年の爭論(此事は附録に)より終に其宮殿を燒拂はれたり

しを文政元年に小社を營造てむかし他へ預け置りし御靈璽を遷し祭れるなりとそ伴友信の神名帳考證に引る當國神社帳に
忌部郷山崎村にありといひ阿波志に忌部祠下註に在山崎村忌部山上百歩許其趾嚴存土人嘗穿地得劍長二尺二寸許重三十六
錢及古鏡祭器と見えたる如くさすかに其所在の湮沒給はさるはいとむかしき事なりかし

此所山崎村鎮座所ノ委シキ模様及ヒ市名ノ場所又ハ忌部山舊社ト云地ノ模様ナリ縮圖ヲ添フ(今こゝに略す)

因にいふ忌部山の東麓より北方壹町許に天石戸神社といふ社ましませりこの社地の西南隅に大きな巖石二箇あり是は忌
部の山脈をはなれて山骨の此處に隆起露出たるなりいつれも大さ堅横ともに一丈五尺許に見えたるか西方なるは斷さらし
石といひて石面や、平らなり東方なるは麻笥石といひていさ高き低き石面に徑一尺餘りなるまた二尺餘りなる穴ともあり
て水溜れり深さ六尺許また七八尺許に及へるもあり此石の最高き所にも徑一尺許なる穴ありといと清らなる水溜まれり此
穴ともを麻笥といひて天日鷲命の麻穀を浸しさらひ給ひし所なりとそすへて此穴のさまあるは大きくあるは少さく其石の
高き低きまにくあるは豎にあるは斜にゑりたるなど人功のものとも見えすさなから神代の遺蹟といふへき奇觀なり此最
高き所なる穴に溜れる水は大旱にも涸れず大雨にも溢るゝことなしといへり山崎村神社之記(記者詳ならされと寛政三年
草稿に收めたり)と云ふものにある時里人に異なる病のものありけるか醫師の力にも及ひ難くて兎や角とまとひしにある夜
りし一篇なり)

日鷲命告てのたまはく巖の水を飲侍らは程なく平癒せんとつけ給ふと覺えて夢はさめけりさてはとてさそくに彼いはほの
水をもさめてあたへければ日ならずして病癒にけり近もかゝる事のためしそ多かりける云々また嶺の水を延命水とも
いひ傳へならはせ侍りける」と見えたる事の空しからす今も遠近の人々こゝに詣て、此水をいたゞくもの多しとかたれる
は阿波志に石門下註に在忌部山東麓大石亂生高低參差背竹林前水澤石穴中有聖水不涸盈土人取以療病と見えたるか如くな
りまた忌部神社より六町許西北に雲の宮とよふ神社ましませり此は延喜式神名式に天村雲神伊自波夜比賣神社二座と見え
たる神社おわしますへき其はこの神社の四方なる東方なる合せて二十戸許人家並立る地を雲の宮名とよへるはまた天村
雲神社の鎮まりせるか故也天村雲社考(國人野口長嘉)に一右社百姓六次郎と申者居屋敷戊亥の隅折廻り小藪御座候隣に
鎮守之如くに而御座候由然處六次郎先祖五郎作と申者より五代之間家族共の中に亂心又は異病の者御座候而六次郎妻も亂
心仕居申に付何の祟に候哉と存文化年中卜策者に占せ候處神の祟の由考出候故此神の祟と存社地寄進仕可祈願仕田地何
畝差上可申哉の旨圖入仕候處四畝と圖下り候に付文化十二亥年二月居宅を東へ移し社修仕候所六次郎亂心を快仕追々繁榮
仕候趣に御座候社地は四畝寄進仕其後試畝相増唯今之社地六畝に相成居申候一右社地字居屋敷に御座候得共此邊の小字を
雲宮と相唱申候伊勢御師より例年御被土產物等贈節書狀へ雲宮六次郎殿と當て苗字之如く認來候由に御座候左候得は古く
唱來候地名と相見へ申候六次郎居屋敷地四畝寄進仕候得者殘地は少しに可有御座候所左程狭くも無御座候様相見へ申候
に付類地並を承候所此田地程地廣く候者外に無御座候様相聞え申候仍而相考候者當村社地之儀者都而御檢地御竿外と相唱
申候然處此地六次郎居屋敷添に候故慶長御檢地後より漸々に少々宛墾込候而終には皆居屋敷の姿に相成居申候得共年古き
義故其儀を存候者も無御座候哉と奉存候左候得者六次郎田地を寄進仕候に而は無御座社地を暫く神より拜借仕居申候處今
度返進仕候當りに可有御座と一笑仕候義に御座候一と見えたり然るを寛保政神社帳に川田村支邑島と云ふ取の神社にやま
た宮島村にまします神社にやなと記しこれ川田村なるを天村雲神社と稱へるは後世の事にてもとは妙見宮と稱し宮島な

るもとは臍緒明神といへりし神社なればあたり難きなるへし以上二件は忌部神社にはあらねと古へより忌部神社の攝社なるよし明なればはらくこゝに註しぬ

忌部神社所在檢註附録

忌部神社は上件に陳述る如く山崎村なる忌部山に鎮座まして紛紜はしきこゝなりつるを天明年中より此處にまします彼處にましますりなと書籍にもくさ々々記載しはた土人の口碑にもいとく混はしき説の出來りたれば其錯ひ來れる由縁をあらましひあかさんとす其は元文中より西川田村なる多那保山に鎮りまします多那保權現の社を忌部神社なりなさいふ妄説の發端れるは阿波志に種穂祠下註に元文中山崎貞光兩村祠官相爭忌部祠遂命申川式部祭干此と見えたる如く享保十二年に多那保權現神職早雲民部と云ふもの忌部神社を推領せんとして忌部神社神職村雲勝太夫と云ふものと爭論しけるか其の爭論中元文五年に勝太夫は七御門家のものに誘はれ彼家にて呼名裝束等の免許を受しを民部越訴のよしにいひなしけるにより終に非議におちいり寛保元年二月に海部郡へ放逐せられ(但し當時本社攝社末社等九社の御靈代は美馬郡猪尻村八幡神社神主二宮出羽守へ舊縁なるを以て預けたまはしきなり)本社社務は民部望の如く司とる事とはなれりしなり(上件の事民部の申狀不條理なりは裁判の人々も知らざるにはあらねと東川田村へ國家老長谷川某の采邑なるか上に民部ほと)よく彼家にとりいらたれば道理の如く裁判あらざりしとなり(其後山崎村より勝太夫男竹次郎といふものへ幼少なからも神職相續を願ひたりしかは十五歳になりたれば願の如くなるへきとの事ゆゑ見合たりしを既に十五歳になりし年にねかひたりしかと兎角の沙汰もなかりしまゝに竹次郎はすへなくていとまを申こひ京都へ登れり其後民部男式部云ふもの此神社ありては乃ち爭論の再發せん事を恐れて神社に火をかけ焼き拂へり共時村方より訴出たりしかと一向にとりあけなく打過きたりしを其村に發狂人こゝら出來なとせしかは勝太夫を冤罪に陥ればた神社を燒拂ひたる祟りなりなと云ふもの出來て天明四年に神職さし替を願ひたりされとさまなかりしまゝに毎年祭禮期月前に十八ヶ年のほと願ひたりしかは終に中川式部(早雲民部の後民部家)號を中川と改めたり

當村の神職ははなたれたり(早雲民部當社職を兼務せしよりはひこ寛政十二年まで六十余年になれり)其後文化十三年までさし定まれる神職もなく雇ひ神主

にて有しを當年彼竹次郎の孫女一人ありけるを井尻村なる八幡社神職二宮出羽守の弟を配偶して麻生家(竹次郎上京して中院に勤任せる

時村雲を麻生に(を繼しめたりしを當時の祠掌麻生秀俊の兩親なりかくて上件に記載せる如く神社を燒拂ひし後に多那保改めたりとなり)

神社を忌部神社そと主張て云し事は白川家にとりいり雅當玉に種穂(多那保又は棚保とかきしを此時よ)忌部社といふ額を

申こひ終に麻木綿をも年々參らする事なれるによりてなりかくて伴蒿蹊云木綿は今世稀なるか阿波國麻植郡種穂忌部神社の神主より神祇伯の御家へ年々參らする例なりとそ云々此社所祭神天日鷲命天太玉命栲幡千千姫命長白羽神津咋見神等

也といふ古き川縁あるにや」といへるは傳聞のまゝを記せる誤なり(神祇伯へ木綿を參らする事は上に云へるか如くなり)其は天和三年三月多那保

權現社務早雲兵部が書たりし勸進帳に願言夫神靈云平國家安民之善功方便雖數百千萬惟以丹心正直爲先聖王平天下治民之教化雖千法萬言非誠信禮儀不立傳曰抑棚保一云多那保大權現者忝天照大神之御父母伊非諾伊非丹二命之應化而與紀伊國熊野大權現同躰異名之靈神也といへれば忌部神社にましますゝる事著明なるをや(川田村住人鹿兒島明天和八年に軋成せりし川田名跡志に多那保神社なるよしな

にくれと註せれと山崎村なる忌部神社を推領せる上を以て記載せるものなれば今論ふ限にあらず)

川田村なる高越山にまします神社は天日鷲神にして忌部神社にますなといへる説あれは熟檢するに縁起に當山權現は天日鷲命の孫也といひ神主早雲氏の説には 宣化天皇御宇大和國吉野藏王權現早雲松太夫に神託あり粟國衣笠山(清臣按るにへるは高越山の一名なる)は諸神集ノ地也吾彼峰ニ鎮座セン汝忌部ノ孫ナレハ早奉迎トノ神勅ニマカセ守護神達三十八神よし阿波志に見へたり

前後左右ニ隨奉テ八重ノ雲路ヲ別ケテ則當嶺ニ天降らせ給ひ祝ひ祭り給ふと也と川田名跡志に見えまた阿波志高越山の條下註に在川田西村一名衣笠山又稱摩尼珠山奇峻鬱茂覆壓群山上有伊弉諾藏王詞熊野祠といへり其は左もあれ右もあれ此いたりはいにしへの射立郷にして永仁年間（常村八幡神社所藏の置文に據る）には高越莊といへりしなるへくおもはるれば忌部神社にはありかたあるへし

松浦長年建白に川田名跡志を引て川田村に鎮座す八幡神社を忌部神社なるよしへる考説あれはもとよりつたなき心地せられるれま彼處にふりはへものして社傳等を閱るにた、八幡神社にましませり川田名跡志に八幡宮祭神比女大神應神天皇神功皇后外に一神と記載せるのことにて長年の抄録せる名跡志に如く外三神と記せる下註に神祕に拷幡千々姫命云とは記さるのみならず祠官に尋ねとへとも詳ならぬか眞實にてさる傳説なしといへり然れば此建白の考説はまたく拷幡千々姫命に據もとつきたる考説なるを其もととせざる神名の社傳にもあらずはた名跡志にも見えざる名を記載してくさ、説をなせるなれば甚しき僞妄といふへし

宮島村にまします八幡神社を阿府志（赤堀良亮といふ人天明二年に輯せる書なり）に忌部神社下註に宮ノ島村に有、按に當社地理を以て考るに忌部遠祖天日鷲命の垂跡し玉ふ地也今は即ち號八幡宮といへりゆきて見るにこれも八幡神社にましましてむかしよりかはれることならましてこの邊りはいにしへの川島郷の地なるへくおもはるれば阿府志の説には據りかたし

西麻植村に字檀ノ原といひて東西三十間許南北四十間許にて地勢西方なる山脚に連りていと平らなる芝原あり此處にある一本の古松を忌部松といひ其傍に平なる自然石ある處を山神の社跡といひ松樹十本余群り生くる所に五角の碑石（こは五十年はかり前に建たる）ありて天照大神大己貴命少彥名命倉稻魂命迦具土命とせりまた西宮山といふ小山の頂に天日鷲命の陵ありといへて行て見るに廻り十間許にて小石を疊み上たる圓墳なり其上に平なる自然石二ツ三ツ重疊せるか如くに積み

たるは正しく寶塔などの在し跡を見なれるならん處々の事を詳細しくとひきくに此山の東麓に西宮寺といふもいにしへありて此近傍より古き五輪など出る事ありといへれば此古墳も其類のものゝ存れるなるへしまた式社略考（大麻比古神社の神主永井精古文化十二年に記せるよ）に廣堂と云所あり愚俗は宮を堂といひ其西の方川島の東の果を神後といひ又其東に繪馬堂といふ地の字もあるを併せ思へは昔は右廣堂あたりに忌部神社ありけんに洪水に流失せられたれと兵亂打續きし頃ゆえ再び營み立つる人もなくて其まゝに成りけん今中内大明神と云か同村にあり是なとや古へ流れ失たりし頃假に祭りし跡ならんか此邊りか忌部郷などに當れば是非に此近村に在つべきなりといへれば其廣堂繪馬堂中の内明神などいへる處の事をよく尋ねきくにいつれも忌部の所在に由縁なきのみならず此邊忌部郷にあたるよしへれと此西麻植村の東南に隣れる敷地村の西なる山の谷をくれ谷など云へるにつきて和名類聚抄に見へたる麻植郡四郷の配置のやうを考ふるに西麻植村敷地村わたりより東方なる村にはいにしへの吳島の郷なるへしまた川島宮の島などよへる地は洪水の度々に土地變遷しはしありけれどまさすかむかしの地勢はみなからうせす某の島などよへる地のこと多かるは川島郷の跡所なるへしまた山崎村桁山種野山學村桑村東山などよへるわたりは忌部郷にして瀬詰村以西以南の地は射立郷なるへく思はるゝなり阿波志に麻植郡舊別爲四郷如左今廢吳島下註に按今別爲上下島宮ノ島兒島中島三島鴨島（清臣按るに如此事の戦は後の世よりはるかなるいにしへ島郷ならんとおもはるゝ地勢なりなをよく察ふへし）等忌部下註に今廢忌部山存射立下註に今廢瀬詰村有陽立里川島下註に今廢川島街存といへるはいにしへの四郷の配置の概略を徴せりといふへし

此所に阿波志に所載麻植郡略圖を引く今こゝに略す
牛島村にまします八幡神社を大宮八幡宮と稱へり元來は學の宮といひしをいつとなく學宮といひ終に大宮といへりまた村名の牛島は孿師の島といひたりけんを神代に麻を初め種々物作りはしめなとし給ひ神をはしめ其裔なる人々の住れし村な

る故に大人の島と美稱したるよりの名にてはあらぬにやと麻植郡回在記(舊徳島藩吉井直道天保年中の手録なり)に見えたれば其他に就て事實を檢るにこれもとより八幡神社にましくて何くれといへる字ともに根據とするにたるものなし抑阿波國には天日鷲命の古事をくさくいひ傳ふる物から殊にこの麻植郡には其氏人の裔らこゝかしこにわかれ住たりけにも村々にいひ傳ふる古事はみな麻穀を作りしことをいとほこりにいひはやすめれと元來天日鷲命は忌部郷に鎮りませはとて常郷にのみ麻穀を植しめ給ひしにはあらず一郡一國におよへる事もとよりなれば村々にいひ傳ふる古事にのみ拘泥むへき事にはあらずかし美馬郡貞光村なる友落神社の社地の上方に忌部神社鎮りますかして享保十二年に山崎村なる忌部神社神官の争論にあへるころ此貞光村なる友落神社の祠堂村雲義直の先代をも早雲民部より氏ひたりしとか然るにつきては貞光村なる忌部神社之神名式に載られたる神社ならんといひつる説もあれば村雲義直にたつねさふにいしへ三好郡を置く、時麻植郡を割て美馬郡としもこの美馬郡を三好郡とせられたるにて貞光村に鎮座する麻植郡忌部神社にはますなるといへれと三代實録に貞觀二年三月二日壬子割阿波兩美馬郡置三好郡としるされて然る紛紜はしき事ありけにも見えされは其地には行ても見すはた麻植郡界より貞光村までは行程六里ありといへるにはあまりつたなき心地せられてなん

(宋書)

伺之趣別紙達書之通可相心得事

明治七年十二月廿二日

太政大臣
三條實美
實美印

教 部 省

國幣中社阿波國忌部神社之儀所在不分明ニ付是迄祭典モ不被行候處麻植郡山崎村鎮座天日鷲神社ハ忌部神社タルヲ實檢候

ニ付自今該社ヲ忌部神社ト稱シ祭典被行候條此旨相達候事

明治七年十二月廿二日

太政大臣	三條實美
名東縣參事	西野友保

太 政 官

式部寮ヨリ御祭典式
祝 祠 ノ 草
神 饌 料

御 祭 文
幣 祭 料
到 着 但祭書左之通

忌部神社御祭典ニ付參向被仰付候事

第
參
附
錄

忌部神社所在異論處分概略
忌部神社營繕具狀一條
麻植美馬郡界有無往復

明治十一年六月廿七日

御用掛 小 中 村 清 矩 ㊦

忌部神社所在爭論事歴並ニ管見

(朱書)

小杉榎部云元文ノ忌部公事ノコトハ舊阿波藩治ノ失體少カラサレハ今サラニ其隱微ヲ吐露スルニ忍ビザレトモ其大略ハ麻植郡川田村神官早雲氏カ從來奉祀セル神社數多キ中ニ同村種穗神社ト云ヲハ國廳ノ許可ヲ仰キテ享保五年十月二男民部(後ニ式部ト改)ト云者ニ配當分家奉祀サセリキ其後同十三年幕命ヲ以テ國內神社調査ノ舉アリシ頃ホヒ山崎村忌部神社神官ト美馬郡貞光村等ノ各自奉仕ノ社ヲ以テ忌部本末ノ諍ヒヲ起シツルヲ尙ニ民部其間ニ立入り所謂鷸蚌ノ奸謀ヲ回ラシ、コト五六年終ニ山崎貞光共非議ニオトシ入レ放逐ノ落着アリシハ元文六年ノコトナリ是ヲ國人元文ノ忌部公事ト云テ其連坐セル者モ多ク處分サレテ恐ヲナスコト甚シ蓋シ其公事ヲ執リシ國老長谷川氏ノ依怙頗ル甚カリシトテ内外ヒソカニサ、ヤキ合ヘリシト云コト皆古老ノ口碑ニアリサテカノ民部ハ思フマ、ニ奸策成リテナホ山崎村ノ各社ヲモ不殘支配シ寛保元年八月種穗社ヲ忌部ノ本宮メカシテ種穗忌部神社ト復稱セリ榎部維新ノ際國廳ノ秘書記録等

ヲ取扱フ職ニ從事シ此公事ノ一卷ト云書册アリテ許多顛末イトヨク讀得テ其處決裁斷ノ不理ヲ慷慨シ今猶禁スルヲ得サルナリ

阿波國忌部神社ノ所在詳ナラサルニヨリ各社其真跡也ト爭論シ終ニ公廳ヲ煩スニ至ルコトハ古來モ有之徳川ノ世元文中山崎村ノ祠官村雲氏ト貞光村ノ祠官某ト爭訟ニ及ヒシ頃川田村種穂神社祠官中川某藩老長谷川某ノ恩顧ヲ受ケタリシ者ナルニヨリ鵜蚌ノ奸計ヲ回ラシ山崎貞光兩村ノ祠官共ニ非議ニ落テ放逐サレ終ニ川田村ノ社ヲ種穂忌部神社ト改稱シテ忌部ノ本宮ト定メ山崎村ノ社モ其管スル所トナリキ此事件ハ阿波志ニモ載タリ

(朱書)

徳島藩取調ニハ今如此數所ニ御舊跡ト唱フル者アリテ一定シ難キ有姿ヲ届出ララニ付テ榎村其頃藩ノ權少屬在勤ノヲ藩主ニ建言シテ本郡中山野ノ一清地ヲ擇ミト定メ工官祭ノ本社ヲ造營シサテ靈代ヲ神社官ヨリ招請シ奉リ御祭典アラセ給ハンニハ後代疑似ノ恐レモナク蓋シ至當ニ是レ有ン歟トイヘリシヲ其マ、ニ取調テ伺出ラレシ也

維新ノ後明治四年神社御改正ノ御該社ヲ以テ國幣中社ニ列セラレタシト其社ト稱スル所川田村山崎村西麻植村上浦村牛ノ島村貞光村等ニアリテ決定シ難キコトニヨリ本郡中清地ヲ擇ヒ官祭ノ本社新營致度旨同年九月徳島藩ヨリ神祇省ヘ伺出タルニ付同六年教部省ヨリ正院ヘ上申ニ相成候所新地ニ鎮祭不可然候條是迄之通可差置旨ヲ以書面返却ニ及ハレタリ然ルニ同七年二月名東縣權中屬小杉榎村三木文書ヲ證トシテ忌部本社ハ確乎山崎村ナルヨシ建言セシカトモ一片ノ文書ノミニテハ定メカタクニヨリ實地檢査ノ爲權大録大澤清臣權少録清水重華ノ兩名ヲ派遣ニ及ヒシニ同年七月歸京檢注二冊ヲ上進シ確據明徴ノ掩フ可ラサル旨ヲ述タリシニヨリ同十月正院ヘ上申十二月所在確定ノ公達アリテ山崎村ナルヲ全ク官社ト定メリタリ然ルニ八年一月田村神社權官司細矢庸雄忌部神社鎮座考及正蹟ト云書三冊ヲ上進シ該社ノ正蹟ハ美馬郡貞光村ナル事ヲ論シタルニヨリ小杉榎村(時ニ教部權中錄タリ)モ鎮座考辨妄一冊ヲ進シ之ヲ辨駁セリ爾後九年三月前論ノ旨意漏ナルニヨリ更ニ改正セシ趣ヲ以テ庸雄出京更ニ正蹟補考一冊ヲ上進シシカハ榎村モ再ヒ正蹟補考辨ヲ進シ猶庸雄ニ對面シテ

討論ニ及ヒシニ庸雄答辨スルコト不能退省セシ事アリキ然ルニ今般本縣添書ヲ以テ折目榮カ出願ニ及ヒタルハ其原因舊幕府ノ世ニ起リ本藩ノ壓制ヲ以テ裁判ニ及ヒタル共一所ハ維新ノ後國幣ノ光榮ヲ蒙リタルヲ羨憤ニ不堪其翌年ノ春忽然細矢庸雅謀首トシテ上申シタル辨駁ヲ受ケ素意不立ニヨリ今般更ニ村民ヨリ願出セル者ト覺ユ依テ虛氣平心願ノ書類ヲ檢シ更ニ細矢小杉二氏ノ書及ヒ地誌譜牒等ヲ參互考覈スレハ少シク得ル所アルカ如シ依テ管見ヲ縷述スル事左ノ如シ

第一章 貞光村神社ノ事

第壹條 永錄ノ棟札

棟札ノ文略云上棟天日齋命四國一宮四國領無永祿二年辛酉十一月廿四日忌部神主本願兵太夫惣彌宜大檀那北條助太郎同彌五郎大工丹治彌五郎惣檀那合力衆各鍛冶兩人平ケカ長瀬太郎次郎トアリ此棟札中頃貞光村ナル村田岡藏ト云者ノ所藏ナリシヲ今ハ同村内ノ他家ニ預カレリ

永祿ノ棟札先年來貞光村ニ在ルコトナシ徳島住某カ所藏ナリ榎村先年初テ目撃セシモ徳島ニテコト也又細矢庸雄カ忌部神社所在考ニ收載セシモ徳島ニテ見及テノコトナリ

現今此棟札貞光村ニ在ルヲ以テ該村内御所平ヲ以テ忌部神社舊趾トシ且貞光村近キ東端山ノ内ニ平ノ毛賀長瀬名アルヲ稱トシ(此村名阿波志ニ見エス今般上進ノ地圖ニ載タリ)毛賀ニ當今モ鍛冶太郎次郎ノ子孫アリトテ系圖メキタル片紙ノ寫ヲモ添ヘ(此本書來歷詳ナラス)且毛賀ナル兒宮(神社明細帳ニ兒五所神社トアル此レナラン)ノ明應五年ノ棟札ニ「□」タンチノ種「大工ナカセカナト有ルヲモ傍證トシテ(明應ヨリ永祿ニ至ルマテ距ルコト六十年許共ニ僧徒ノ作トミエテ文體ヨク似タリ外ニ壽永三年ノ棟札モアリ)願意ノ確證ノ最トスル者ナリ

細矢氏ノ書ニ此棟札ヲ證トシテ貞光村ノ社忌部舊社ナル由ヲ辨シ且此村田岡藏ト云者ハ大和ノ舊記ニ吉良ノ忌部社廢滅シ社家樂人等ハ百姓トナルトアル其子孫ニテ農ニ歸シタル時ヨリ持傳ヘシ物ナルヘント云ルヲ小杉ノ辨妄ニ岡藏ト云者ハ其本姓賴三難ヲ平生虛喝ノミヲ唱ヘ世ニ所謂山師ノ賴ミテ遊手ノ徒ナリ岡藏ノ父ヲ信藏ト云寶曆明和ノ頃專ラ世ニ在テ郡奉

行附屬ノ手附ニテ下方ノ非違ヲ探ル賤役ヲ勤メタリキ信藏ヨリ以前五六代續キテ貞光村ノ農ナリサテコノ岡藏カ家ニ傳ヘシトテ彼棟札ヲ所持アリキ彼ノ小祠ヲ忌部ノ本宮ノ裏額セシ跡ナリトテ種々説話アリシカトモ寶曆ノ文書(清矩云此文書ノコトハ下ニ云ヘシ)ノ次第ヲ以テ按ルニ父信藏ノ勤役中ナト其役威ヲ借テ何クテ賄賂受シ頃棟札モイツクヨリカ食リ出シテ宮内某ニ謀リ合セテ上ノ文書ノ體ヲラクニ及ビシナルベシサレバ父ノ意ヲ岡藏受繼テ云々物セシナルヘシト(以上其師タリシ野口年長ノ語レル旨トイヘリ)アリテ猶此棟札往昔ハ山崎村ノ社ニ在シ物ナランヲ中世事故アリテ他ニ散在シ終ニ貞光村ニ取傳ヘタルナラン其證ハ棟札ニケカトアルヲ能ク見レハケタト讀マル、ヲ以テ按スレハ麻植郡山崎村ニ遠カラス所ニ桁山アリ(三木文書ノ中嘉慶二年ノ文書ニ此地ヲ氣多トモアリ)又平ハ山村ノ字ニ多クアル内ニ同郡今ノ木屋平村ヲ古クハタゞ平ト云ヒシナレハ強テイハバ麻植郡ニコソ其縁ハ近カルベケレ但シ如此判然タラス小字ヲ以テ實蹟ハ認メ得難シト説ヘリ

棟札ニケカトアルヲ能ク見レハケタト讀マル、ヲ云々トカケルハ此議者ノ私説ナリ楳郵曾テ屢此棟札ヲ目撃セシニケタトアリシニマカヒカクルコトナシナホ五十年前ニ野口年長モ知然ケタトヨメリシコトナト細矢氏カ作ル在所考ノ辨及ヒ正蹟補考ノ辨ニモ駁シタルカ如シ既ニ已ニ細矢ハケタトヨメレハコソ所在考ニ其寫シヲ出シテケタトカキ其説ニモ貞光村不遠三好郡ニ毛田村有之旁由緒正敷コト云々ナトイヘレ然ルヲ東端山ノ内ニ毛賀ト云地名アルヲ以テ唐突ニケカトヨミカヘテ何クテケタトヨミシ人ヲ誹レトモ己レモケタトヨミシヲイカニセンイカニ老耄スレハトテ今サラ自語ノ反スル甚シキモノト云ヘシ若シ眞ニ其標面ニケカトアラハ奸計者ノ塗抹疑ヒナシナホ一目撃セハ判然タラントス

兒宮ノ棟札ハイカナリヤ要ナケレハ余ハイマタ見サリキ ㊦

按ルニ此棟札小杉細矢共ニ極メテ右色ノ物也ト云ヘハ贋物ニハアラサルヘシ(未タ現品ヲ見サレトモ)其ケツトケタトノ論ハ如何ナラム兒宮ノ棟札ニ(コレモ寫シヲ見タルノミナレト同シク青色ト思ハル)長瀬鍛冶ノ文アルニ據レハ小杉ノ説未タ信ス可カラス然レハ此棟札アルニヨリテ貞光村ナルハ確乎タル忌部本社ナルカ如シトイヘトモ猶然ニハアラサル歟其

故ハ第十二條ニ述フ可シ

第貳條 麻植郡ノ沿革

今般證據トシテ差出セル國鏡及無名書ニ(二書共徳川家治ノ名ヲ記シタレハ明和ヨリ天明マテノ間ノ著名ナリ)往時美馬郡ヲ三好郡ト改麻植郡半分ヲ美馬郡ト改二郡三郡ニ改ルトアルニヨリ美馬郡貞光村ハ往昔麻植郡ナリ依テ延喜式ニ忌部神社ヲ麻植郡ニ係タル也ト論セリ

按ルニ昔時麻植郡ヲ分チテ美馬郡トセシト云説ハ右二書ノ外ニ阿陽記郡村記其他ニモ見エタレトモ其書悉ク寶曆以還大明以前ノ著述ニシテ第三條ニ述タル寶曆ノ文書ヲ基トシ記錄セシ者ト覺エテ(細矢ハ此等ヲ文祿或ハ天和ノ舊記ト稱セシヲ小杉ノ辨シタル事其書ニ詳ナリ)古書ニ更ニ所見セサル也尤郡境ノ沿革ハ中古以來各國共ニ在ルコトナレト此美馬郡ハ古今轉變セサル事延喜式神名帳美馬郡ノ部ニ收タル建神社ハ現今モ美馬郡半田村ニ在テ其地麻植ノ郡境ヨリ數里ヲ隔テ彼ノ貞光村ヲ打越シテ極西ナル三好郡ニ近キ地ニ鎮座アルニテ其一端ヲ知ルヘシ小杉氏ノ説ニ今麻植郡ト美馬トノ郡境ノ地勢ヲ觀ルニ大方深山ノ峽境ヨリ大谷有テ麓ノ村里マテノ區域自ラ分レタリ現今美馬郡ノ蠅村又拜村トモ書ナリハ麻植郡ノ山續キニシテ谷筋ノコナタナリ往昔麻植郡ナリシヲ後ニ美馬郡ニ屬タリ是ハ正ニ記錄アリ彼ノ貞光村ノ吉良名ナト云區域ハ峨々タル山峽ニシテ遙ニ谷筋ヲ隔タレハ郡界ヲ經タルコト實檢シテ知ルヘシ此蠅村ナトノコトヲ土俗傳ヘ訛テ郡中悉ク變セシ如ク云ヘル也ト辨妄ニ記セルニ從テ蠅生モ郡ノ變轉セシ説ハ探ラサルナリ

第三條 寶曆ノ事件

願面ニ云寶曆四年忌部神社主村雲左近重テ忌部神社本宮タル確證ト可相成神寶ヲ以テ再建及出願候所竊ニ信仰可致旨蜂須賀家ヨリ被申渡候依テ定光ノ庄へ本社ヲ造營シ鳥居ニ大同年中空海執筆ノ額ヲ掛ケ候所近國ハ素ヨリ遠國迄モ尊敬一方ナラス參詣人夥數入込候ニ付蜂須賀家ヨリ村雲並ニ伴伊織忽チ捕縛シ兼テ竊ニ可致信仰旨申聞置候所神寶ヲ飾リ云々判然ト忌部ノ名義ヲ顯シ候義不屈ノ段被申渡人獄ノ上阿波淡路兩國構父子共追放被申渡其節忌部ノ神寶並ニ確證ト可相成品々引揚

ケニ相成又鳥居ニ掛候額面等吉野川へ持出シ鳥居共ニ打碎キ焚捨候義ニ御座候其後吉良貞光兩所ハ素ヨリ忌部郷ノ里正等へ京都又ハ江戸ナトノ者人込忌部ノ義相尋候共判然ト明白ニ相答候テハ其方共ノ爲筋ニ不相成旨被申渡候云々

(朱書)

本文寶曆再願云々ハ跡カタモナキ虚説ナリ其故ハ寛保元年八月種穂神社ヲ以テ忌部本宮ト取ナシ社寺ヲ進退セル郡奉行所ノ記録及ヒ寛保三年神社改帳ニモ忌部社ハ判然種穂ナリトヤラニ決定セル上ナレハ國廳ノ命ヲ以テカノ貞光村ノ社ヲ竊ニ信仰スヘキナト被申渡ヘキ情勢サラニアアルヘキコトナシ此ハ其頃ノ國政ノカタハシヲモ知ラヌ者等カ現今ノ凡眼ヲ以テ無稽ニ造意シマコトシヤカニ掲出スレトモ既ニ七年五月教部省官員實地檢覈ノ時今般ノ願人村雲義直方書上ケニ此再願云々ノコトハ何ノ事モ書載セスタ、「寶曆年中ニ山崎村川田村貞光村三ヶ村何レモ忌部御鎮座所々儀ニ付出入相成云々」トアリテ必竟カノ元文度ノアリカタニ混淆シテ此公事ノ顛末ヲ心得カテノ云ヒサマナルヲモ思フヘシノモノ、コノ寶曆ノ文書及ヒ寶物出現ナトイヘルコトハカノ元文ノ處分ニアヒテ痛恨ノアマリ連年何クレト奸計ヲ旋ラシテ同四年云々モノシツル其事情既ク所在考ノ辨妄マタハ正蹟補考ノ辨等ニクハシク説ヘルガ如ケレバ再願云々ハ跡カタナキ作爲ノ事ハ明亮ナルヘシ前ニモ其書面ノ文ヲ摘要シテ述ルカ如ク七年書上ケノ時ハ寶曆ノ再願何ノコトモモノセサリシヲキノフケフニ至リテソノ自語ノ矛盾スルニモ心付テヤ如此掲出セルイカニ其事實ヲ知ラヌ本省ノ官員ニ上告スレハトテ神明ノ照鑒之ヲ如何 卍

(朱書)

里正等へ京都又ハ江戸ナドノ者人込忌部ノ儀相尋候共云々」トアル甚シキ虚喝ナリ既ニ前ニモ述ルコトク忌部ハ公然川田村種穂社ト定メ白川家ニモ取ナシテ 朝廷大嘗會ノ荒妙モコノ種穂社ヨリ白川家マテ進獻セル例ナリシヲ思フヘシ何ノ憚有リテ如秘物セント思ヘルカスヘテ藩政ノ勢ヒヲ知ラヌ虚偽信スベカラス 卍
按ルニ貞光村忌部神社ノ神宮宮内氏ノ記セル寶曆ノ文書ト云者アリ本文願面ト參考スレハ粗事情ノ知ラル、ニヨリ先此

ニ抄出シ次ニ小杉氏ノ説ヲ舉クヘシ

忌部神社主宮内

伊

織

廣

重 謹曰

抑當社忌部大明神の由來を奉尋は天照大神の尊の理を以て天日鷲命天か下に穀麻のたねをおふるし及ふに肥饒地たるにより御國へ來臨有則當社に御ちんごましましてこくまを植始め及ふ延喜式以來郡御割替間、あるにより今は美馬なりといへとも上代の麻植社と申は是なり於當社命かんざりたまひ境内に御魂を納忌部大明神とあがめ奉る御正社なり天正頃土佐のもう將泰元親ぎやく意にまかせ社頭不殘炎上す亂世の軍役に四民の力つきて再興の事絶たり

御當家様御入國被遊候而は郡違之間違を以斷絶同所に過たりといへも四方に道有る君か代の惠茂厚き時至公儀御崇敬あるにより神代よりの重財出現有之事誠に

上々様方御武運長榮五穀豊饒にして四民安全のもといか御神託は則神前書記者也

忌部大明神 御 神 躰

御 鏡

御神號裏ニ有

御 棟 札 壹 枚

元享元年辛酉十一月廿三日大檀那北條相摸守平朝臣高時公

今年曆數四百拾餘年に成る

右は社頭炎上之砌我先祖宮内少輔廣重といふ者身命をなけ打炎中より取除け末社東山權現の社に隠れ置此度還御す

御 長 刀 壹 振

中具も長五尺五寸

天の目一箇命の御作也

日鷲尊御國へ御來臨之節御持せ被遊御打物也

社頭炎上之時より百八十餘年を歴て石塚中より出現す

日鷲御神万物守護神別而武家崇敬之御神に候へは武門に志しあらん人々は格別御信心有之度候

御鏡貳面 此度奉出現候
日鷲尊御子 榑岩間戸命
豐岩間戸命

御神休也
鬼面 壹面

榑岩間戸命御作也

其外小財餘多あるといへとも不記一二

寶曆四年戊閏十一月

小杉氏云右原書當今其所在ヲ不知トイヘトモ往年長谷川貞彦カ國內巡回ノ時寫セルヲ字體ナト原書ノマ、轉寫シタル也
按ルニ此宮内某貞光村ニ住シテ則元文ノ忌部公事ノ一人也此文中ニ於當社尊かんさりたまい境内に御魂を納め忌部大明
神と崇め奉る御正社也」トアルハ即阿陽記等近世ノ書ニ忌部古社又ハ御魂處トアル同シ所ヲ指ス也又元享元年十一月廿
三日トアル棟札モ其實ハ永祿ノ棟札ト同物ナラン然ルハ當時ト定カニ讀兼タルニヨリ少シニテモ古メカサントテ元享ニ
定メ又元年ノ元ハ實物ニ江トアルハノ字ヲ元續辭メタル也又大檀那北條云々トアルモ實物ナル北條助太郎彌五郎磨滅ニ
屬セシニヨリ高時ニ作レルナラン又先祖廣重ノ炎ノ中ヨリ取除ケ末社東山權現(東山十二社權現ヲ指ス)ノ社ニ隱シ置
此度遷御ストアルヲ考ルニ此百曆度何レノ山村ヨリカ取出シツル物ニシテ再ヒ遷リタルニハアラス御鏡以下ノ物ヲ出現
トアルニ心ヲ注タヘシ舊來ノ物ナラハ何テカカクイハン當時突出ニ神寶ト云ニハ其土人トイヘトモ受ヒカサルヲ以テ
如此様ニ物シツルコト論ヲ俟タサル也サテ此文書ヲ作り神寶出現ト云做シタル原意ヲ尋レハ先年追放セラレシハ全ク一
時官府ノ矢錯也ト人ニ思ハセン奸謀ニテ此頃ヨリシテ頻リニ吉良名ノ御舊蹟ト云ヲ主張シタリキ(清矩云寶曆ノ末ニ成
シ異本阿波志貞光村ノ條ニ吉良名ノ稱モ忌部社ノ舊趾モ見エス只永祿ノ棟札ノ略ヲノミ記ミタリ)サテ阿陽記細見錄國

鑑錄郡村記ナトミナ近世陋拙ノ末書ナルコトハ云マテモナケレト然ハイヘト各一編ノ例則體裁ハ備ヘタル物ナルヲ其例
則ニ違ヒテ西端山條下ノ文忌部舊蹟ヲ記セル邊最モ精シキニ過タルハ疑フヘキノ甚シキ也蓋左近黨ノ故造ナラント見做
サスハ何トカ云ハン此ヲ以テ之ヲ推セハ大藏後家所持舊記(細矢氏ノ主トシテ引證セル書ニテ專ラ御所平ノ靈跡ヲ述タ
ル書ナリ)ト云物モ彼ノ寶曆ノ文書ヲ種子トシタル妄書ナリサテ此吉良名ノ御舊蹟ト云モノ寶曆以前ハ未タ世ニ唱ヘサ
リシ事上件ニ述タル如クナルニ其後三十四五年ヲ經テ寛政ノ頃ハ漸々其地方ニモ唱ヘシコトト見ヘテ寛政五年蜂須賀家
ヨリ阿波志編輯ノ料ヲ各郡ニ求メシヨリ美馬郡西端山ヨリ書上ニ

蜂須賀五社大明神 此社忌部御社之由申傳御座候

古社 跡 忌部大神宮社床ト申傳此場所近來御檢地之節百姓共名負請ニ相成候へ共地方作付難相成荒地ニ相

成小社御座候

天日鷲命御神鏡之由申傳ニテ唯今俗家ニ古鏡所持御座候且鈴形之梅ト申御神木廿五六年以前迄御座候所枯失申候由白花
咲實成不申藤ノ枯木モ御座候由

中谷ト申處ニモ右御神御鎮座之由申傳之儀御座候旨立石之社と唱候所御座候忌部御社之趣申傳御座候
ト見エタル其奸策ヲ施シ得タル片ハシニシテ蓋シ此文ニ忌部大神宮社床ト申傳云々トアルハ彼元文度取扱ニ逢ヒシ所ナル
ヲ往古兵亂ニ燒失セシ蹟也ト云紛ラスル一區域ナリ是ヲ以テモ其新舊正邪ヲアラハシ思ヒ辨フヘシ(以ト小杉氏ノ鎮座考
辨妄正蹟補考辨ノ二書ヲ參考シ其要トアル所ヲ節抄セルナリ)

サテ願面ニ寶曆四年神主村雲左近重而忌部神社本宮タル確證ト可相成神寶ヲ以再建及出願候トアルハ元文ノ公事非分ニ
落タリシカハ更ニ前文ニ錄セル如クノ神寶ヲ作爲シ出現ト云做シテ本社再建ヲ願出タルニ忌部ノ本宮タル由ハ定カナラ
ネト此モ其分社ノ一ナラント思ハル、由モアラハ(第十二條參照)竊ニ信仰可致旨蜂須賀家ヨリ申渡シタルナラン然ル
ヲ公然本社ヲ營造シ諸人ノ參詣ヲ招キシニヨリ神主ハ捕縛追放セラレ偽造ノ神寶ハ藩へ引上ゲンコト願面ニ述タル事狀

ノ如クニシテ當今ニ至リシナリ空海ノ額ノコトハ更ニ諸書ニ見ヘス又元享ト稱セシ永祿ノ棟札ハ此比ヨリ村民ノ家ニ移シニヤ(額面ニ添タル書ニ蜂須賀家ヘ引上ケニ成タル由記シタルハ誤リナルヘシ)然ルハ異本阿波志ニ此棟札ノ略文ヲ舉テ傍ニ眞光郷鐵炮村田信藏預リ東山十二社ノ棟札ナリトアルヲモ思ヒ合サル、也此條殊ニ今般出願ノ眼目トスル所ナレハ長冗ヲ厭ハス上文ヲ録出シ愚見ヲ加フ

(朱書)

寶曆再願ノコト上ニ説ヘルカ如ク作爲ナルコト明亮ナレハ今ココノ評語ハ無用ニ屬スヘシコハマニ元文ノ公事以前ノ狀勢ナリカノ細矢カ書シ取在考ニ辨妄シタル説又正蹟補考辨ナトヲ照會セハ判然タルヘシコマカニ盡スヘキニアラス

四

第四條 麻 殖 氏

願書ニ添タル忌部社由緒略説云大文廿一年八月美馬郡岩倉城主三好山城守康長板野郡勝瑞ニテ三好豊前守義賢ニ同意シ叛逆ヲ企勝瑞屋刑細川持隆公ヲ弑奉リ悉ク細川家ノ家臣ヲ亡シ猛威ヲ震フノ時麻殖郡毛賀山ノ城主宇恵田回幡守持光ハ忌部神社ノ長官大祭主トシテ兼テハ武家ノ祈願師タル故持隆公ヨリ持ノ一字ヲ賜リ持光ト云程ノコトノ眞義ヲ受シコトナレハ三好ヲ亡サスト企ル戸却テ三好ノ大軍内山毛賀ノ城ニ迫リ終ニ友内山要城ニ籠リ防戰數日ヲ送ルトイヘトモ終ニ不協落城ス此時忌部神社爲兵火悉ク焼亡云々別冊ニ麻殖景光ニ至ルマテ七十八世ノ歴名及所々ニ小傳ヲ載ス

(朱書)

榎郎阿波國ノ名族誰甲某乙大カタハ其傳カ書乘ニ徵シテ記憶モシ又ウツシモシテ心得カホナレトモ未タ宇恵田回幡守持光ト云人ノ忌部神社ノ大祭主タリシコトヲ聞ス又麻殖氏ノ系圖ト云モノモ未タ知ラス凡ソ忌部神社ニ關係セル古文書家乘ノコトキモタタ榎郎一人カ探索ノミニアラス五十年來野口年長ヲ始メ數十輩心ヲヒソメテ之ヲサクレトモ誰カシ人ノ筆記ニモイマタイハサルコトナリ其系圖ノ寫ト云モノ一目撃セマホシキモノナリ近時アヤシキモノコトモノス

ル族モアレハ最モ心ヲ注クヘキヲ其用意ナクシテハウマクハカラレヌヘキモノソニクムヘシノ

麻殖氏ノ遠裔ト云モノ現ニ徳島ニモ數家アリテ余モ知巳ニ兩三家アリミナ三好黨ニテ小笠原源氏ナリ

四

按ルニ麻殖又字惠ニ作ル諸軍記系譜等ニ於テ管見セスト雖トモ國民ノ口碑ニ其名族タル由ヲ傳ヘタリ其系譜ト稱スルモノハ元和二年麻殖景光筆スル所タリトイヘトモ其本書ニアラス百年前轉寫ノ物ト覺ヘタレハ敢テ證トスルニ足ラス然レトモ本國ニ忌部氏ノ人多キハ勿論ナレハ麻殖氏モ其類ニテ古クヨリ美馬郡ニ土着シ其祖神ノ祭祀セルモノナルヘシ

(朱書)

其系圖ト云モノハ未タ見サレトモ元龜三年年月ト奥書アル本國ノ古城主名家ノ記載セル無類(古城記ト云者ノ類ナリ)(麻殖郡分

ニ(麻殖遠江守殿小笠原源氏)二松皮南方宮井村城主ト見エマタ元龜四年二月十八日記之ト奥書アル大田文ト云モノニ

モ(麻殖郡ノ分(麻殖殿源氏二松皮)ト見エマタ古城諸將記ト云モノニ(西ノ庄金丸城麻殖紀伊守小笠原氏紋二ツ松皮

菱百五十貫)ト見エ城跡記ト云モノニ(宮井城天正年中落城主將麻殖遠江守)ナトミヘ三好記ノ類ニモ數々見エ皆小笠原

源氏也

第五條 三好康長ノ願文

願書ニ添タル麻殖系圖ノ尾ニ録スル者ニシテ永祿四年十二月トアリ本社再興ノ時祝禱ノ爲神前ニ奉シタルヨシニテ深憂神社之廢典議宮殿ノ再建今茲辛酉ノ季冬行新宮遷坐之式於是參拜之群集悅復古之大典揚歡喜之聲云々ノ文アリ

(朱書)

三好庸長ノ願文ト云者未タアルコトヲ聞カス前ニ述ヘル所ノ麻殖氏系圖等ノモノナル可シ其ウツシト云モノ見マホシ

キコトナリ一目セハ眞偽判然タラントス 〔印〕
按ニ此願文第一條ニ舉タル棟札ト同年ニシテ彼ハ十一月此レハ十二月ナレハ相離ル可ラサル者也此レモ第四條麻殖系
圖ト同ク綴込ノ轉寫ニシテ原品ニアラス恐ラクハ系圖願文共彼棟札ニ依テ偽作セシ者歟（阿陽記國鏡等ノ書及細矢氏
ノ書ニ此兩品ノ事ヲ載セサルハ見聞ニ及ハサリシキ）然レトモ系圖中ノ小傳ニ記セルコトヲ考レハ全ク無根妄誕ノミ
ニモ有ラスト覺ユレハ土人ノ口碑ニ據リタル件モアルヘシ

（朱書）

楓部亦美馬郡忌部ノ舊跡ト云モノ先年來度々其實地ニモ到リ又古老ニモ何カク口碑ヲトキ申シコト今ヲ距ルコト十年
前ナリキ其頃迄ハ仔細ラシク傳ヘサル所ナト近時ノ願書又細矢カ考書等ニモ數ケ所申出タルハ尤アヤシキコトナリ既
ニ七年五月教部省實檢ノ時ヨリ増加シタル古跡ト云モノ八九所ニ及ヘリ憫笑ス可キコトナラスヤ 〔印〕
往日檢査ノタメ此願文ノ原タル彼ノ百年前ノ轉寫ノ覺ユル書ヲ出サシメ閱見セシニ願文ノ前ニ村民ヨリ麻殖氏ニ送リ
タル書簡ノ寫アリ（今般上進中ニ添サル者ナル）眞偽ハ計リ難ケレト參考ノタメ此ニ録ス

（朱書）

一昨年細矢ト討論セシナリ細矢曰忌部神ニ緣故アルコト讃岐國ニモ多シト察スルニ今迄貞光村ニ唱ヘサリシ麻植氏ノ
祭王ノコト又笑岩ノ願文ナト是細矢カ手ニ出シモノニハアラサルカ今ニシハ〱讃岐ヨリモノシテ何クレ聲援セリト
或人ノ報スルコトシハ〱ナリ 〔印〕
以愚札令呈進候向寒之砌先以御機嫌克奉隨喜候然ニ忌部神社再興之段切ニ歎願相及候所漸免許ヲ以六月廿四日神殿
上ニ相成如形普請成就仕候間御喜可被成候明早春暖氣ニ相成候節必御登山可被下候諸事古來祭式之事萬端御指圖被仰
付候ヘハ皆々大慶之儀ニ奉存候間何卒此〱〱委細ハ彌宜兵太夫ヲ以奉申上候御聞取可被下候猶期拜顔之時萬緒可
申述候恐々謹言

十二月廿三日

宮 各 德 太 郎
同 彌 五 郎
織 目 金 太 夫
免 地 源 三 郎
田 井 幸 四 郎

麻植因幡守 様 御 中
人々 御 中

系譜ヲ按ルニ麻殖因幡守ハ氣賀没落ノ後讚州丹生ノ山中ニ潛ミシ由ナレハ此書中ニ明早春暖氣ニ相成候節必御登山ト
アルハ其故ナルヘシ書中ニ見ヘタル織目田井ナト云家今モ村内ニ在トソ此書モ亦棟札ト離ル可ラサルモノト云ヘシ
三好康長ハ山城守ト稱ス（法名笑岩）筑前守之長（法名喜雲）ノ三男ニシテ長慶實休等ノ叔父ナリ永祿ノ比ハ阿波在
住ニシテ長慶實休等没後ハ旅中ノ首領タリ天正中織田信長ニ歸ス野史ニ傳アリ

第六條 古 文 書 寫

願書ニ添タル麻殖系圖ノ末梶原景時源賴朝其他ヨリ麻殖大宮司ニ充タル文書數通餘ノ寫ヲ舉タリ
此文書ノ本書今所在知可カラス且其末ナル文書ハ麻殖郡三木氏所藏文書（第八條併見ルヘシ）ノ寫ナルコト明ナレハ今
煩ハシク當否ヲ贅セス

第七條 穴 料

願書ニ添テ上進セル寛政元年一宇山ノ地方諸大物割符帳ノ中ニ穴料ト云コトアリ
一六拾貳匁五分

右ハ極月宍料御年貢御取立御用ニ付御手代様御納屋御越之節御迎ヒ下夫代
一七拾五匁

右ハ宍料御年貢銀ヲ取立株立帳五人組宅ニ而仕立申ニ付筆者雇ちん壹組拾五匁宛

附箋朱書ニ往昔奈良ノ都ノ節御軍用トシテ宍皮年々可貢旨麻植宮司へ有命然所忌部郷一圓ハ往古ヨリ殺生禁制ノ地役宍皮
ハ代價ヲ以可納旨申立夫より忌部郷ノ例トナリ既ニ近年迄モ納來候所明治七年ノ比右宍料御年貢御廢止ニ相成候併四年中
何レノ所ニモ宍料御年貢ト申ハ一切無之此帳面ニテモ阿波國麻植郡内山ハ忌部神社ノ境内判然タル確證ニ有之候也トアリ
(朱書)

宍料ハ祖谷一字其他ニモアリテ足利氏以來鬪戰ノ代甲冑其他軍用ノ料ニ猪鹿皮ノ類ヲ收メシヲ料金ノ如クナリユキタ
ルカ流例ニテ云々ト小中村氏ノカケル如何ナル誤聞ニヤ元寬見聞スル所舊領主へ收納ノ節單ニ宍料トノミハ文書類ニ
ナク必檜宍料ト記載セル例ナリ宍トハ獸肉ノ意ニ非ス木材ノアラコナシセサルモノヲ云方言ノヨシ然ルハ米何升何合
ノ代リニ檜ノ材一挺ヲ收メシヲ後ニ山林ノ檜伐盡セシヲ以テ料銀ニテ收納トハナレリトソ現今□等ヨリ指出セシ文中
ニ御納屋トアルハ其山々ヨリ收メ來ル檜材ヲ入置ケル納屋ナリサレハ宍料ハ掛物ニテハナク年稅ナリ故ニ村方ニ於テ
年貢ヲ取立致セシ者へ銀何貫何百目檜宍料同何百何十目夫役宍料ト記シタル受取證ヲ渡ス慣習ナリ此ノ夫役宍料トハ
檜材ヲ料ニテ收ムレハ持出ス人夫省ケルニヨリテ人夫賃ヲ收メサセシソレ即チ夫役宍料トイヘルニテモ宍ハ猪鹿皮ニ
アラサルコト顯然タラスヤ其實地ニアラサレハコレヲ事實ヲ知ラヌ人ノ惑ヘルハ尤ナリ余昔年郡吏タリシ時見聞セ
シマ、ヲコ、ニ挿着シ後人ノ惑ヒヲ解ト云フ但シ宍料取ト唱シハ阿波國美馬郡祖谷山一字山西端山三ヶ山並貞光村ナ
リ貞光村ハ宍料ノミニテハナク米モ收メシナリ隣邑東端山モ宍料收メシヨシナレト藩士長坂三郎左衛門宰地ナレハ收
納ノ仕末委シク知ラスチナシニ此事ヲ書加フ

竹 内 元 寬

按ルニ異本阿波志祖谷(安德天皇御舊趾ト稱スル深山ナリ)ノ條ニ年貢金銀ヲ以テ收ム是ヲ宍料トミエタルニヨリ更ニ國
人ニ問ヒ質スニ附箋ノ說ノ如キ此内山ノ地ニ限ルコトニアラス祖谷一字其他ニモ有テ足利氏以來鬪戰ノ代甲冑其地軍用ノ
料ニ猪鹿皮ノ類ヲ收メシヲ流々料金ノ如クナリユキタルカ流例ニテ近ク領主へ招納セル名稱トナレリサレハ山方ニハ幾個
モアリテ維新前ニ及ヘルヨシナリ

第貳章 山崎村神社ノ事

此社ノ事實ハ先年既ニ實檢使ノ檢注アレハ今無益ノ辨ヲ費ス可カラサルカ如シ然レトモ彼此對較ノ間自ラ照考ノ便ナキニ
アラサレハ其大要ヲ撮ミ併テ拙考ヲ陳ス

第八條 正慶ノ古文書

正慶元年十一月阿波國御衣御殿人等十三人連署ノ契約狀ニ此上ハ一年二度寄り合いをくりへてひやうちやうあるへく候會
合二月廿三日やまさきの市九月廿三日いちをか宅しやトアリ此文書ハ麻植郡三木山ノ舊家三木貞太郎ノ所藏四十五篇ノ中
ノ一紙ナリ右小杉氏ノ掲出建議シテ忌部神社所在地ノ確證トスル者ニテ忌部ノ氏人タル御衣御殿人ノ會合セル山崎ノ地ナ
レハ即其地ニ鎮座ノ社コソ本宮ナレト云旨趣ニ落ルナリ且當今モ毎年二月九月廿三日ノ神祭ノ時市立アリ其所ヲ市名ト云
又此三木貞太郎昔ヨリ代々當日ニ五里有餘ノ山路ヲ經テ今ニ參詣スルハ古昔ノ契約會合ノ餘風ナルコトヲ考合セタルナリ
小杉氏ノ說ニ往古大嘗祭ノ時龜服神衣ヲ織進スル所ノ忌部氏ノ御衣人ト云上番スル忌部ヲ御殿人ト云マトテ今ニ其稱呼ヲ
存セリ古語拾遺ニ所謂本國忌部氏人ノ一家ニシテ其所在地ヲミツギ山ト云ヒ氏ヲ三木ト云モ皆貢調ノ義ヨリ起レルナリト
云リ本國ニ忌部ノ氏人(ミナ天日鷲命ヲ以テ祖神トス)多カルカ後世其緣故ヲ所失ヒシ者十二八九ナル中ニ此三木氏ノミ
古文書ヲ保存シテ正シク舊家ノ驗トセルハ美事ト云ヘシ

古語拾遺云天日鷲命之孫造木綿及麻並ニ織布仍令天富命率天日鷲命之孫求肥饒地遺阿波國殖穀麻種其裔今在彼國當大嘗
之年貢木綿麻布及種々物所以郡名爲麻殖之緣也ト見ユ

第九條 諸書ニ山崎村ヲ忌部社所在地トセル文

伴信友ノ神名帳考證頭書忌部神社ノ條ニ當國神社ヲ引テ云麻殖郡山崎村ニアリ

鈴鹿連胤ノ神社叢錄云忌部神社忌部郷山崎村ニ在ス(神社帳)阿波志(文化中徳島藩儒員藤原之憲撰)麻殖郡條ニ云ク忌部

祠在山崎村忌部山上百歩許其趾殿存土人嘗穿地得劍長二尺二寸許重三十六錢及古鏡祭器(略節)日鷲谷在忌部祠東古木叢

生。忌部山在山崎村即忌部祠所在地。山崎里在山崎村忌部山北麓地呼城圓蓋上世忌部氏所居也其下有池周廻九十歩許闔

村概田

按ニ信友連胤ノ書ニ引ケル當國神社帳ト云モノハ小杉氏ノ説ニ享保度ノ取調帳ナラント云ヘリ然レハ元文己前ノモノナ
リ又同氏ノ説ニ寶曆五年ニ書ケル美作國津山人立石定準カ匠家必用記ト云モノニ忌部の人々山崎村に社を建立してうや
まひ奉る也トアルハ元文己後ノ物ナレト從來ノ説ニ據タル也ト説ヘリ元文裁判ノ後彼種穂社ヲ以テ忌部本宮ト定メラ
レタルカ如クナレト阿波志ニハ上文ノ如クナルヲ見レハ野口年長説ナトニ據テ裁判己前ノ輿論ヲ考テカク記セル者ナル
ヘシ

(宋書)

阿波國儒員佐野之憲カ阿波志編輯時ハ野口年長未ダ若輩ニシテカノ山崎ノ社ノ事ヲ主張スヘキ時代ニアラスコハ議者
ノフト心得タカハレタル説ナリ既ニ己ニ年長モ此阿波志ニ之憲カ山崎村ニ定斷セシヲウレシクアヤシミシコト其カ
クハシ所在考辨妄ノ結末ニ説ヘルカ如シ之憲カ阿波志ニ編述セシハカノ元斌ノ公事裁斷ノ前後ノ時勢又古老ノ傳説ナ
トニ據リテ決地セシコト疑ヒナシ(印)

第十條 忌部郷並忌部山

小杉氏が正蹟補考辨に忌部郷(和名抄麻植郡内郷名)と云はかの忌部神の鎮座はいふまでもなく猶其裔孫も住いたりその

かみ朝廷の神用物品など調進する忌里なるの謂なるへしかくて本郷の區域の事もこゝよりそこといふなどなまは今にして
判然なる證文こそなけ其おほよそはよく知られて故人吉井直道も既く論し我徒生島繁高も説へる如くまづ南西の山奥は遠
く木野平山より川井山。別枝山。三木山。中村山。桁山。種野山あたり東北は山崎村瀬詰村三島村などの各所なるべしさ
れば山崎瀬詰に忌部山今に在てしか唱ふるは年序ふるまゝに神社も其地名も里近くうつり來て此邊に其一端の遺りしもの
なりまた木屋平山に松家氏といふ舊家ありて猶三木氏と同じく忌部の族なるが久しく此山に住わたり忌部神の御ゆかり何
くれと傳へ云々又三木山には上古わきて此氏人の多く住て彼三木氏なとしかも其氏の上也自餘上の件各村山に忌部氏人の
住し事はいふまでもなく彼十三人契約連署の家こそかしこに遺れるを以ても知るへし云々されは種野は大名大浦三木など
は小名也そもく此種野といふ大名よ古語拾遺の文に求肥饒地遺阿波國種麻種其裔今在彼國當大嘗之年貢木綿麻及種々
物とあるもの種をものし給へる故地なるへし今も三木山の内に麻絹またかし原(穀原の義なるべし)なきいふ地名ありこ
れら必此邊にて麻穀を作り荒妙和妙を織出して奉りし所也其證は云々かくて上古は本宮天日鷲命神社といふも必このあた
りに鎮り坐けむを漸くに遷轉して既く正慶の頃は今の山崎の山上所謂忌部山に鎮座し事氏人十三人の契約狀の文をもてう
かゝひ奉りぬ然るを其後亂離を経て種々ゆゑしきまが事にかゝらせ給ひしなりけり云々

又云其忌部山は今猶麻殖郡山崎瀬詰兩村へつゝきの山にして現今の友道の南にあたりて郷里人はみなよく知る所也然るを
庸確は云々自ら補考第一の柱礎と憑援める阿陽記麻植郡瀬詰村の條下にも當村南の山を忌部山といふ云々とあるにあらず
や云々そもく此瀬詰村は山崎村と接近にして上にいへる如く山崎より瀬詰にいたれる一山の尾續き(忌部本宮の舊跡此
山中にあり)忌部山といへる事阿波志をはしめ本國地志に記載せる二三にあらず云々

右ノ文ハ細矢氏ノ正蹟補考辨ノ説ニシテ彼レカ主張シテ引出タル中川清曉カ集録セル忌部神社舊記ト云モノニ忌部郷ハ
今ノ美馬郡ノ地トシ穴吹山左右奥深ク宮内榛原木屋平マテ一圓也今穴吹山ト貞光山トノ境ニ忌部山ト云高山アリ云々
ト云ヒ又清曉カ忌部神社愚考ニ和名抄ニ據レリトテ新圖ヲ製シ麻殖郡西部ノ舊記ハ今ノ美馬郡也ト云説ヲ主張シテ「忌

部郷ハ東小島山ヨリ南方劍山ニ至ル又此郷ノ西境ハ毛田山ヨリ南ハ祖谷山ニ至ル其中央ハ皆忌部郷ナリ此内ノ高山ヲ今友内山ト云(清矩云此支内山ハ貞光邊ノ山ニシテ所謂吉良名ノ内也)是レ古(忌部山ト云地名ナラン其證ハ此山上ニ忌部古社ト云舊祠アリ(清矩云此レ今般上進ノ地圖ニモ記セル社也)ト述タルヲ是ヲ所謂吉良名ヲ忌部本宮ノ舊地トスル説ニ左祖シ惣ヲ加エタル奸策也)トテ精シク小杉氏ノ辨論セル要文ヲ節録セルモノ也第二條ニ記セル如ク吉良名貞光村ノ地今美馬郡ニシテ沿革無シト斷スル時ハ細矢氏ノ主張シタル説ハ立難ク忌部郷忌部山ノ實跡モ從テ小杉氏ノ説ニ從フ可ク思ハル、ナリ

第十一條 攝

社

野口年長ノ忌部神社私考(嘉永中蜂須賀家ノ目附某マテ上進セシ書ニシテ專ラ山崎村忌部社ノ事ヲ考論セシモノ也)此度奉入御覽候御兩國郷名神名等ヲ書候卷物寫之儀ハ御追放被仰付候先神主村雲莊太夫(清矩云山崎村忌部社ノ神主ニシテ元文ノ公事ニ追放トナリシ者)倅竹次郎御國ヲ罷出候節先莊屋茂兵衛方へ預ケ置候所文政年中神主居リ候ニ付當神主茂兵衛方ヨリ受取候趣ニ御座候右書寫質物ニ可有之候哉扨ト疑候者モ御座候へ共私共ハ眞物之様ニ存候眞偽ノ考ハ別ニ書可申候此書九條殿ニ原書御座候由又ハ押小路殿ニ御座候共申傳へ趣ニ御座候先達而京都御聞合被仰付御座候へハ其内ニハ相分り可申候云々)又云右之書中忌部神社之所ニ文字闕失之殘候所所攝ト相見申候ニ右攝社ハ社之内ニ志良夜末比賣社稚稚宮牟羅久毛社岩戸社以上四社ハ今顯然ト村中ニ御座候イカ、志社ハ桑村ニ御座候建美社渡騰夜末社玖奴師社此三社モ村内ニ御座候小社ヲ其レト申居候へ共是等ハ如何可有御座哉未是非之處考得不申候トアリ

此卷物ノ影寫ト云モノヲ年長ノ藏本ヨリ轉寫シテ小杉氏ノ徵古雜抄ニ收載セルヲ見ルニイカニモ古色見ユルモノナレハ質品ニハアラサルヘシ本文ニ述タル社ノ中牟良久毛社(式内)イカ、志社(式内)岩戸社稚稚宮等ハ何レモ祭神等本社ニ緣故アルニヨリ昨明治十年官社攝社改定ノ節モ忌部神社攝社ニ收メラレタリ

第三章 總

論

第十二條 攝

議

貞光山崎兩村ナル忌部神社甲乙爭ノ義各其主旨トスル所ヲ條錄論說スル事已ニ訖リ又因テ兩社ノ實蹟ト陳狀トヲ比考スルニ先ツ定光村ニ於テ最モ徵證トスルモノハ永祿モノ棟札也此ハ質物ニアラサル可キコト(第一條)ニ述タルカ如シ然レトモ貞光村ノ地ヲ以古今美馬郡ノ沿革セサル者ト決セハ(第二條)此社ハ忌部本宮ノ分社ナルコト論ヲ俟タス抑本國ハ日鷲命忌部ヲ率テ麻殿ヲ植エ紡織ノ業ヲ修メタル舊蹟ナルニヨリ上古ヨリ忌部ノ氏人タル者ハ鷲命ヲ鎮祭シタル各社多カリケン此内御所平ノ邊モ其一類ニシテ古クヨリ本宮ノ分社有ケンヲ古典廢止シ本末倒錯セル後世ニ及ヒ漸ク社境盛榮ニ及ヒ永祿ノ頃ハ四國一宮ノ稱ヲ襲ヒ再建ノ棟札ヲ上ル程ノ狀勢ナリシニヨリ徳川ニ至リ元文中山崎村ノ祠官ト藩廳ノ訟庭ニ争ヒケンモ然ルコトニテ訟庭非分ニ落テ後モ猶神寶出現ノ拙策ヲ運ラシ漫ニ神祠ヲ建テ毛ヲ吹キ疵ヲ求タルハ(第三條)其祠官ノミナラス村民等モ多年慷慨スル所ナルニヨリ寶曆以後ノ俗書ニ往々其舊蹟タルヲ記シテケン一種々妄誕ノ説ヲ加ヘタレントモ)依テ今般ノ歎訴モ其餘習止ミ難ク殊ニ永祿ノ棟札ヲ無上ノ證品ト思ヒ染タル頑民ノ情意愍ム可シト雖モ郡ニ沿革無ク忌部郷並忌部山ノ地麻植郡ニ屬スルコト明亮ナル上ハ(第十條)山崎村ノ社ヲ本社ト定ムヘキ事必シモ三本文書ノ證ノミニ限ルヘカラサル也

(朱書)

此讀者ノ説ハ永祿ノ棟札ハ決シテ貞光村ノ分社ノモノナリトセルヨリコトナレトモ楳郵カ説トハ反セリサレハ貞光村ノ社用物ナリトハ何ヲ證據ニカイハンカノケタ平長瀬ナトノ地名ニ近シトテノコトオレト是ハ麻植郡中ニモアル地名ナルコト冗長テ既ニ説ベレバ今論スル限ニアラズ(印)山崎村ノ社モ元文ニ燒却サレ祠官モ放逐サレタレトモ其以前ヨリ此ヲ式内ノ忌部神社ト云倣シ文化度濶撰ノ阿波志ニハ此ヲ麻植郡ノ條ニ登錄シタルハ(第九條)元文ノ裁判ニ拘ラス更ニ此社ヲ以テ式社ト斷決シタルカ如シ大澤氏ノ檢注ニ文政

元年ニ小社ヲ造リテ昔他(預ケ置シ御靈璽ヲ遷シ祭レル也)トソト有ルモ藩ノ默許ニ據レルナル可シ同書貞光村ノ條蜂窠祠ノ事ヲ載タル分注ニ又有吉良祠在吉良名祠前在石石面有蹄蹟四山上磐石平數又有大石圍之又有窟廓然内闕有古藤及梅今枯トミエタルハ彼御所平ノ事蹟ト覺エタレト毫モ忌部社ノ事ニ論及セサレハ此方ノ上申ハ浮説トシテ探ラレサリシ也(第三條阿波志編輯料西端山書上ケノ條參考)

往昔忌部ノ本宮ハ小杉氏モ論セシ如ク(第十條)麻殖郡忌部郷ナル木屋平三木種野ノ邊ナリケムヲ漸ク人家多キ所ニ遷轉シ終ニ正慶ノ頃ニハ今ノ山崎ノ山上所謂忌部山ニ鎮座有シ者ナラン(總テ山ニヨリタル有名ノ舊社ニカ、ル狀多シ)カク思ヒ定メテ更ニ双方ノ狀ヲ比較スレハ

山崎村ノ方徵證

延喜式ニミエタル如ク麻植郡ニ鎮座

式内ニシテ本社祭神ニ所縁アル舊攝社近境ニ在

正慶ノ文書

貞光村ノ方

只永祿ノ棟札ニ四國一宮ノ號アルノミ

麻植系圖三好康長ノ願文其他ノ古文書ノ寫等證トスルニ足ラサルコト前條ニ述タルカ如シ其地ノ字點跡ヲ表シ及ヒ忌部市等ノ義ハ山崎村ニモ有レハ論スル限ニアラス

(朱 書)

永祿ノ棟札貞光村ニ決テ雖キコト前ニ述ルカ如シ一時貞光村岡藏所有シテソコカシコニ披露シテ後ハ貞光ノ社ノモノ也トイヒテセルナリ徳島人ハミナ其明亮タル事ヲ知レリ 印

依テ折目榮等カ願意ハ立難シト存候但シ此ハ御賢考ノ便ニモト申試候迄之義ニ付猶諸君ノ高議ニヨリテ是非明亮ナラン事

ヲ仰望候也

(朱 書)

地誌課エ照會答辭寫

阿波國ニ據リ麻植郡古郷名ヲ考ルニ忌部郷ハ山崎村學村種野山村以南ノ地ニシテ射立郷(今射立山アリ)其西ニアリ瀬詰村川田村等皆是ナリ美馬郡四郷ニシテ素原大島二郷吉野川ノ北ニアルト分明ナレハ川南ノ地ハ必三次大村ノ二郷也友内山ハ美馬郡川南ノ地中央ヨリ西ニアリ若シ古麻植郡ニ屬セシトセハ美馬郡ハ只川北ノ地ノミニテ四郷ヲ置ヘキノ理ナシ且忌部郷ハ射立一郷ヲ隔タレハ此友内山忌部郷ニ屬スヘキコトナシ因テ今斷シテ二郡ノ界ハ大概古ヨリ變セサルモノトナス

十一年七月

地誌課

(朱 書)

右麻植郡界沿革ノ有無云々局長ノ命ヲ以地誌課長塚本氏へ質問セル答辭書ナリ七月廿五日同課小島尙綱持參セシヲ以テ本紙ハ直ニ局長へ指出ス 印

(朱 書)

榎頓付箋及ヒ演説ノ旨趣アリシ故ヲ以テ前稿ヲ節略改正ナトシテコノ伺書出來ス (以上朱書)

明治十一年九月十八日

御用掛 小 中 村 清 矩 印

大書記官

社寺局長

屬

忌部神社之義ニ付阿波國美馬郡貞光村人民惣代折目榮外貳名出願之件

高

知

縣

忌部神社之義ハ明治四年神社御改正之御國幣中社ニ被列タレトモ中古以來其所在ヲ失シ該社ト稱スルモノ六七ヶ村ニ有之
 容易ニ決定シ難キニヨリ數年奉幣ヲ立ラレサリシニ七年二月名東縣權中屬小杉楳郵古文書ヲ證トシテ確乎山崎村ノ鎮座天
 日齋神社ヲ以テ該社ト決ス可キ旨別紙甲印ノ如ク舊教部省ヘ建言セシニヨリ乙印ノ如ク正院ヘ伺ノト實地檢査トシテ權大
 錄大澤清臣權少錄清水重美ノ兩名ヲ派遣ニ及ヒシニ同年七月歸京丙印ノ如ク檢注二冊ヲ上進シ確據明徴ニメ掩フ可カラサ
 ル旨ヲ述タリシニ付同十月丁印ノ如ク正院ヘ上申十二月戊印ノ如ク所在確定ノ公達アリテ山崎村ナル國幣社ト定マリタリ
 然ルニ八年一月田村神社權宮司細矢庸雄忌部神社鎮座考及正蹟ト云書三冊ヲ上進シ該社ノ正蹟ハ美馬郡貞光村ナルコトヲ
 論シタルニヨリ小杉楳郵(時ニ教部權中錄タリ)モ鎮座考辨安一冊ヲ進呈シテ之ヲ辨駁セリ爾後九年三月前編ノ旨龜漏ナ
 ルニヨリ更ニ改正セシ趣ヲ以テ庸雄出京更ニ正蹟補考一冊ヲ上進セシカハ楳郵亦再ヒ正蹟補考辨一冊ヲ進呈ナホ庸雄ニ對
 面シテ討論ニ及ヒシニ庸雄答辨スルコト能ハス退省セシコトアリキ然ルニ今般本縣添書ヲ以テ折目榮等カ出願ニ及ヒタル
 ハ舊德島藩以來貞光村吉良名ノ地ヲ以テ忌部本宮ノ舊跡ト定メントテ山崎村ノ神官ト爭論ニ及ヒタリシ該村神官及ヒ人民
 等ノ素志ヲ遂ケントスルモノナリ依テ願書ト添書類トヲ檢閱シ前年教部省官員ノ檢注及ヒ小杉細矢兩氏ノ書ヲ考ヘ地形ト
 事情トヲ斟量シテ鼎案ヲ陳スルコト左ノ如シ
 此爭論ノ起リハ一朝ノコトニアラス徳川ノ世元文年中貞光村ノ祠官村雲氏ト山崎村ノ祠官村雲氏ト互ニ忌部本宮ナリト爭

ヒ訟庭ヲ煩ハスニ至リシニ當時蜂須賀家ノ國老執權家長谷川某ノ私斷ヲ以テ意外ナル種穗神社ヲシテ忌部本宮ト定メシム
 依テ貞光山崎兩村ノ祠官共ニ非議ニ落テ放逐セラレキ此ヲ元文ノ忌部公事ト唱ヘテ彼國ニテハ聞傳ヘテ人ノ云コトナリト
 ノ(阿波志ニモ粗此事見エ小杉楳郵モコマカニ説語セリ)然ルニ維新ノ後山崎村ノ社ハ國幣ノ光榮ヲ赫シタルヨリ貞光村ノ人民憤羨ニ不堪カノ八年

以來細矢及ヒ今ナホ三名ナトカハルノ首謀トナリテ官衙ニ出願セリト覺エタリ蓋シ其徵證ノ最トスル所ハ專ラ郡界ノ沿
 革ト永祿ノ棟札トニアレハ先ツ此二件ヲ辨ス可シ願人等ノ説ニ昔時麻植郡ノ半ヲ割テ美馬郡ノ部内トス(此コト三代實錄
 貞觀二年美馬郡

ヲ割テ三好郡ヲ置シ云々)故ニ貞光村ハ當今美馬郡ナレト古ヘハ麻植郡ノ部屬地タリ其徵證ノ爲ナリトテ其由ヲ記シタル
 ヲ如此言傳ヘタルナリ)國鑑及ヒ無名雜書ヲ差出ス此ハ延喜式ニ麻植郡忌部神社トアルニヨリ郡違ヒノ鎮座ニテハ不都合無論ナルカ故ニ頻々該社
 ヲ主張スルモノナルヘシ按スルニ往昔麻植郡ノ部内ヲ分チテ美馬郡ニ増置セント云コトハ國史ハ勿論古書中所見アルコト
 ナシ尤前ノ國鑑無名雜書ノ外近世ノ雜地誌ノ如キ彼是見ヘタルモノモアレトモ何レモ實曆以遠ノ物ナレハ正シキ證トス可
 ラス但シ郡境沿革ノ事ハ中古來各國共ニアルコトナレト此美馬郡ハ古今轉變セサルカ如シ願人又貞光村ノ地ヲ以テ忌部郷
 (和名抄麻植郡ニ屬ス)ト稱セルトモ然レトモ此忌部郷ハ今ナホ麻植郡南西ニ屬セル木屋半三木山ヨリ東北瀬詰村山崎村
 三ツ島村邊ニ係リテ更ニ美馬郡貞光村地方ニ關セサルコト地志類ヲ考ヘテモ明亮タレトモナホ公論ニ就ンカタメ地誌課ヘ
 照會ニ及ヒタリシニ該課ノ意見モ別紙庚印ノ如シ依テ麻植美馬ノ郡界ハ古今沿革ナク忌部郷ハ今モ麻植郡ナルコト無論ナ
 レハ願人等ノ説ニ貞光村往昔麻植郡ナリ故ニ其地ニ忌部本宮ハ鎮座セリト云コトヲ主張セルハ立難キナリ
 貞光村ノ農某ノ家ニ上棟天日鷲命四國一宮四國領無爲永祿年辛酉十一月廿四日云々トアル棟札ヲ藏セリ其文中ニ鍛冶兩人
 ○平○ケカ。長瀬太郎次郎トアル平毛賀長瀬等何レノ地字モ貞光村ノ近村ナルニヨリ此棟札ヲ以テ往昔貞光村忌部本宮ノ
 物トシ徵證最一トスレト假令コノ棟札眞物ニモセヨ郡界ノ沿革無キ上ハ貞光村ハ分社ニシテ式内本宮ナラサルコト論ヲ俟

タサルモノトス抑本國ハ天日鷲命ノ舊蹟ナレハ古來其神ヲ鎮祭セル社祠多カルベケレバナホ此ノ貞光村ナルモ其一類ト見
做スコシ

現今國幣社タル山崎村ノ社ト今般願出タル貞光村ノ社トノ實蹟ヲ考ヘ双方ノ徵證ヲ比較スレハ

山崎村ノ徵證

○延喜式ニミエタル如ク麻植郡ニ鎮座

○式内社ニシテ本社祭神ニ所縁アル舊接社該村中近隣ニ數々アリ

○正慶中忌部氏人契約古文書

貞光村ノ徵證

○只水祿ノ棟札ヲ其社ノ物也ト云ノミ

此他今般上進セル麻殖氏系圖三好康長願文其外ノ古文書類ミナ確證トスルニ足ラス其他ノ字ニ靈跡ヲ表シ及ヒ忌部

市ナト云コト山崎村ニモ所々ニアレハ論スル限ニアラス

依テ折目榮等ガ願意難立ト存候條願書ハ建白ト見做シ左右ノ御指令無之方可然哉ト相考候也

別紙

(印ハ以下
朱書)

甲 印 明治七年二月名東縣權中屬小杉楳郡舊教部省へ建言

乙 印 舊教部省ヨリ明治七年三月實地檢査伺書御指令添

丙 印 舊教部省權大錄大澤清臣權少錄清水重華實地檢注二册

丁 印 舊教部省ヨリ七年十月實地檢注ヲ以愈徵誤明確ニ付麻植郡山崎村ニ決地伺定正院へ進達書

戊 印 明治七年十二月廿二日山崎村天日鷲神社ヲ以テ自今忌部神社ト稱シ祭典被行御達書

己 印 十一年七月地誌課ヨリ麻殖美馬二郡ノ界ハ古ヨリ變セサルモノトスト云答辭書

忌部神社取調願之儀ニ付上申

管下阿波國美馬郡西端山人民總代谷幾三郎外貳名ヨリ同國麻殖郡忌部神社所在地再御調査之儀別紙之通直ニ御省へ出願仕
度旨中立候然ルニ該社所在ハ去ル明治七年十二月廿二日同郡山崎村ニ確定被仰出爾來御祭典執行之所即今彼是申立○段不
都合之儀ニ候へ共情願抑制モ致兼候ニ付即チ出頭爲仕候條此段上申候也

明治十年五月廿二日

高知縣令 小 池 國 武

内務卿大久保利通殿代理

内務少輔 前 島 密 殿

忌部神社本宮再建御願

式内忌部神社之儀往古ヨリ阿波國舊麻殖郡定光之庄内山御鎮座ノ所天正年間長曾我部元親ノ爲兵變ニ罹リ程ナク蜂須賀入
國ニ相成候ニ付舊神官ヨリ再建願出候所若シ再建爲致候而ハ忌部郷一圓神領ニ復スヘキニヨリ終ニ許可無之其後舊幕府ヨ
リモ忌部ノ處在取調可申旨屢蜂須賀家へ達シ有之候得共唯曖昧ノ答ノミニテ打過候折柄實曆四年忌部神社村雲左近重テ忌
部神社本宮タル確證ト可相成神寶ヲ以テ再建及出願候所竊ニ信仰可致旨雖須賀家ヨリ被申渡候依テ定光ノ庄へ本社ヲ營造
シ島井ニ入同年中沙門空海執筆ノ額ヲ掛ケ候所近國ハ素ヨリ夥數人込候ニ付蜂須賀家ヨリ村雲並ニ伴伊織忽チ捕縛シ兼テ
竊ニ可致信仰旨申聞候所神寶ヲ飾リ又ハ空海執筆ノ額ヲ島井ニ掛ケ判然ト忌部ノ名義ヲ顯シ候條不屈之段被申渡入獄之上
阿淡兩國父子共追放被申渡其節忌部之神寶並ニ確證ト可相成品之引揚ケニ相成又島井ニ掛額而等吉野川へ持出シ島居共ニ
打碎キ極捨候儀ニ御座候其後吉良名貞光庄兩所ハ素ヨリ忌部郷ノ里正等へ京都又ハ江戸等ノ者入込ミ忌部ノ義相尋候共判

然ト明白ニ相答候テハ其方共之爲筋ニ不相成旨被申渡候斯封建ノ砌神社係ノ役所モ無之自然疎漏之至リ實以言語ニ絶シ候事ニ御座候爾米空ク相過候所明治七年中教部省官員大澤清臣殿小杉楳邸殿川田村へ御出張ニテ忌部神社舊記等可指出旨御達ニ付舊神官村雲義直西端山村長谷庄内兩人ヨリ忌部舊蹟書綴リ指上候へ共何等之御取糺モ無之如何之故ニ哉其後山崎村へ御再建之義御宣下相成忌部郷ノ人民舉テ疑惑ヲ生シ遺憾難堪憤歎罷在候就而ハ忌部郷有志中總代トシテ私共上京仕御省へ奉歎願候間何卒持參仕候確證夫々ト覽被下且又繪圖面ニ記載有之候舊跡之儀ハ實地明細ニ御糺之上内山定光ノ庄吉良御所平如從前忌部本宮再建被仰付候様奉願上候以上

明治十年

高知縣下阿波國第六大區五小區
貞光郷忌部郷人民總代同村
村 雲 義 直 ①

右 西 端 山
谷 幾 三 郎 ①

右同東京府下第五大區四小區外
神田五軒町三番地居住靜岡縣士族

折 目 榮 ①

内務卿 大 久 保 利 通 殿

前書之通上願ニ付與書仕候也

明治十年

高知縣阿波國第六大區五小區

一等戸長	折 目 義 太 郎 ①
同區二等戸長	谷 庄 内 ①
同區一等副戸長	谷 仲 太 郎 ①
同區右	和 田 仲 藏 ①
同區右	武 田 浦 三 郎 ①
同區右	南 長 芳 ①
同區右	大 西 與 市 ①

(朱 書)

貞光村ナル小社ヲ忌部神社本宮ナリトシテ神官村雲氏ノ山崎村ノ神宣某ト爭訟ニ及ヒ藩主蜂須賀家ノ判決ヲ以テ双方神官入獄追放ナトサレシ落着ハ元文五年ノ事ナリト云々爾後村雲氏憤懣ニ不堪神鏡棟札出現ナト稱シ文書ニシルシテ人民ニ示シタリシカ寶曆四年ノコトニシテ當時別ニ再建出願ナトセシコトハアラス然ルヲ願面ニ寶曆四年云々トアルハカノ元文ノ事蹟ヲ混淆セル誤ナリ又空海執筆ノ額云々ノ事件並ニ竊ニ信仰可致旨蛸須賀家ヨリ申渡シ又舊幕府ヨリ

厚忌部所在取調ノ達シ有シナト云コト藩治ノ諸記録及ヒ諸役場手許ノ書留ニスヘテ見ヘサル所ナレハ跡カタナキ謬傳ナリ且藩ノ壓制メキタルコトヲ誌シタルハ國老長谷川氏其頃ノ執權家ニシテ麻植郡川田村ニ知行所アル由縁ヲ以テ同村種穂神社ノ神官中川某自ラ奉祀スル種穂ヲ忌部本宮ニセントスル奸謀ニ左祖シ結局貞光山崎共ニ非分ニヲトシ入レ終ニ兩村ノ神官ヲ罰シ種穂ヲ忌部本社ノ如ク取ナシタリ此權勢ニ畏縮シテ爾後忌部社ノ舊蹟云々ノコトハ維新前迄村民ワザト云フレサリシコトナリシヲカク謬記セシナリ

右小杉楡郵ノ言ニ據テ記ス同氏ハ原ト徳島藩士ニシテ藩ノ記録類ヲ取扱ヒ尋テ地誌編輯ニ預リシ頃古キ書留類ヲ閱覽ンスルニヨク右ノ顛末ヲ細詳考得タルナリ右忌部公事一件ノ書類當今セ地方廳ニ現存セリトソ

九月十一日受
九月七日上達

昌道

閱

九十一

阿部

明治十一年九月三日

七等屬 中

山 宗

禮

輔

書 記 官

田松

伊集院

屬

井上

長谷

間

望月

忌部神社改造之儀伺

高 知 縣

社第九
寺十六
局號

十年分

圖局長
印之

九月九日
受判

高知縣
九月十一日

該件ハ昨年十一月進達其節見込取調相伺候處社所在之義ニ付テハ客歲五月以來屢々獻言等有之ニ付着手方見合ハキ旨局長ヨリ被命其儘打高候所右獻言之儀即今尙別主任ニ於テ取調ニ付追而可相伺候へ共現今ノ社地ハ既定之モノニ付一先如左御

指揮可相成哉相伺候也

御 指 令 案

書面之趣ハ一應經費減縮之見込ヲ以仕様目論見帳取調尙境内在來建物之繪圖面ヲ相添更ニ可伺出事

十一年九月十一日

郷

一ノ第三一九號

忌部神社御造營之儀伺

管下阿波國國幣中社麻植郡山崎村忌部神社御造營之儀ハ國費御多端之際ニ付當分難能御詮儀旨明治九年十月十七日社地擴充御許可ノ節御達之次第ニ候所兼テ舊名東縣ヨリモ情實上申ニ及候通社殿矮陋ニテ御祭典ヲ始平常神務等務兼御社格ニ對シ候而モ不躰裁ニ有之且年久シク修繕ヲ不加ヲ以漸次破毀ニ及ヒ既ニ本殿幣殿ノ屋根朽腐シ降雨之際殆ト神跡ヲ汚浴スル場合ニ立至リ本年七月至急營繕之義神官ヨリ申立直ニ官員出張實査爲致不取敢本殿へ假ニ雨覆ヒ取設至急營繕之積リニ候處根源假建之社殿ニ付用木等渾テ輕易之品ナルヲ以テ手厚キ修繕ハ却テ難耐去リ連假ノ修繕相加ヘ置候テハ又々不日破損シ徒ニ冗費ヲ嵩ムノミニ有之將社務處ハ該村ノ民家ヲ代用シ月々之謝金若干且社殿ト拾町餘モ懸隔不取締ニ付豫テ假社務所建設之儀神官屢申立候へ共社殿以下御造營可相成ニ付假ノ建物ハ是亦冗費ニ候旁彼是參考即今先ツ本殿拜殿等御制限御造營相成社務所並ニ神處等ハ現今ノ拜殿ヲ修理シ相用ヒ候ハ、社殿ノ體裁ハ勿論御祭典ヲ始取締モ相整隨テ冗費御省減ノ基ト被存此見据ヲ以右御造營概入費取調情實開申ノ必得ニ候所豈圖シヤ客月十一日暴風雨ノ爲社殿大破殆ト顛覆ニ可及ノ景況ニテ別紙第一號ノ如ク臨時營繕ノ儀申出尙又實檢爲致候所事實相違無之忽テ顛覆之勢ニ付候村等ヲ以テ臨時取締置候次第實ニ目下難關至急御造營不相成ヲ得サルノ場合ニ有之候最モ國費御多端幾重ニモ恐察候へ共抑國幣中社ノ社格ニシテ

其社殿村社ニモ相劣リ殊ニ大破ニ及ヒ神體汚浴ノ場合ニモ立至リヘキ實況地方ニ於テ親視候テハ不可忍而已ナラス一般敬神教導ノ事業ニ關シ彼是不都合ニモ有之候條上文見据之通御造營相成候様致度前顯陳述ノ情態篤ク御證儀ノ上速ニ御許容相成度別紙第二號御造營費概略積書相添此段特ニ相伺候也
追而別紙第一號神官申立ノ如ク大破ノ社殿ニテハ忽チ神務差支且新嘗祭執行之際ニ有之候旁目下難關ケ所ハ修繕之儀取計追而入費明細書進達可致候間此段併而上申候也

權令小池國武代理
高知縣大書記官 伊集院 兼 善

明治十年十一月三十日
內務卿 大 久 保 利 通 殿
第一 號

本殿拜殿大破ニ付臨時御營繕願
該社本殿拜殿共兼而御造營奉願有之候通近ク大破ニ相及候所先月十一日暴風雨之節處々破壊ニ相及既ニ其段御届ニ相及候掛差當リ左書様ニ臨時御營繕ニ相成不申候而ハ正殿始雨漏相増奉祀ニ差支候庶ニ不少候ニ付何卒御營繕費ヲ以至急御燥繕ニ相成度此段奉伺候也
明治十年十一月

國幣中社
忌部神社權宮司 加 茂 百 十
同 宮司 蜂 須 賀 隆 芳

高知縣權令 小 池 國 武 殿

別 紙

- 一金八圓三拾六錢 正殿雨覆板圍出來諸費
- 此株兼而出來之假雨覆大破雨漏ニ相成候ニ臨時御營繕竹木釘其他費用
- 一同五圓八十錢 幣 殿 繕
- 此殊屋根廻リ大破ニ付瓦下取繕ヲ始前同所
- 一同四圓十錢 假 神 筋 處 繕
- 此株大破雨漏ニ相成前同所
- 一同九圓七十七錢壹厘 拜殿新廻リ庇共繕
- 此株瓦下取繕軒廻庇出來前同斷
- 一同九圓三拾貳錢 拜殿屋根葺替共
- 此株處々雨漏出來候ニ付葺替諸費
- 一同八圓貳拾六錢 拜殿壁出來
- 此株地摺ノ板葺大破追々寒風ニ相向神勤差支候ニ付壁出來ニ相成候諸費
- 六株
- 合計四拾五圓六拾壹錢壹厘

阿波國々々幣社
忌部神社本殿
神筋處社務所共紙

新築修繕大綱見積帳

忌部神社本殿拜殿新築及在來幣殿拜殿共神饌所社務所等修繕費大綱見積帳

上等建物 社 壹棟

但御制限通ニ新築

此費金貳千七百五拾圓程 ㊦

中等建物 壹棟

但御制限通新築

此費金貳千七百八十圓程 ㊦

中等建物 壹棟

一假神饌處社務處共

但在來之幣殿拜殿共修繕

此費金三百五十圓程 ㊦

合計金五千八百八拾圓程

右之通大綱見積ニ候也

明治十年十月

高知縣權令小池國武代理

高知縣大書記官 伊集院兼善

付 屬

(以下催促書)

前號記入

〔社第一八二號〕

忌部神社御造營之儀ニ付再應上申

管下阿波國忌部神社本殿以下御造營並修繕等之儀客年十一月三十日付ヲ以上申ニ及候所未タ何等之御指令無之右ハ上文上申之節實際之景况縷々具陳候通從來破壞ニ及候社殿客年兩度之暴風雨ニ遭シ殆ト顛覆之勢ニ立至一時爲取凌修理相加置候へ共爾來風雨ノ爲毀損彌増且該社神官ヨリ別紙ノ通追願有之實ニ國費御兩端ハ萬々恐察候へ共抑國幣中社ニシテ御體裁整肅不致候而ハ一般ノ敬神ニ關シ不得止具申候間特別之御詮儀ヲ以速ニ御許容相成度此段再應上申候也

明治十一年四月十二日

權令小池國武代理

高知縣大書記官 伊集院兼善

內務卿 大久保利通殿

本殿御造營追願

該社本殿文化年間火災後極々矮陋之小祠出來成居候所軒口雨漏相繼追々内陣へモ押及神體ヲ汚穢損壞相連事哉之旨ヲ以御造營昨年奉願候處検査被下其後何之御指令モ無之先達而モ奉願候通り御社格ニ被對御不都合之儀ニ付本庶敬神之道ニ至兼苦慮焦心致候旁何分ニモ至急御造營ニ相成度經費御兩端之際ヲモ不憚敢而奉願候間右之衷情御漏察其筋へ御進達被下度伏而懇願仕候也

明治十一年三月廿六日

國幣中社 主典 森 權三郎 印

忌部神社 主典 浦上 利延 印

三四
主典 早雲 眞澄
禰宜 竹内 元寬
宮司 蜂須賀 隆芳
同 同 同
同 同 同
高知縣權令 小池國武殿

御造營之儀ニ付願
本社本殿始御造營之儀上願ニ及候處御配慮之上度々其筋へ御進達被下候段重々難有奉存候然ルニ今以而御指令無之候處今般該社禰宜竹内元寬儀教議筋之義ニ付東京之件上願ニ相成候右願之通許可相成候ニ於テハ早々出京之上其筋へ該社實地之景況上申仕度候間右情實御洞察御應ヨリ其筋へ御添翰被成下度奉懇願候也

明治十一年六月廿四日
高知縣權令 小池國武殿
國幣中社
忌部神社宮司 蜂須賀隆芳

忌部神社禰宜出頭之儀ニ付上申
管下阿波國忌部神社禰宜竹内元寬教議筋之儀ニ付神道事務局へ出頭伺濟ニ候處出京之上ハ該社御造營之儀實地景況上申トシテ御省へ出頭仕度旨別紙之通申立候條出頭之上上申之次第御聞取ニ相成度此段上申候也
明治十一年七月廿四日
高知縣權令 小池國武殿
右二通書面合封ニシテ竹内元寬出頭之節進達ニ相成其ノ後左之通大綱之王意書事務局長へ熟談御造營至急ヲ要スル云々申

立候

(朱書)

八月六日局長ヨリ下付

忌部神社數年御造營無之不堪恐愕實地景況上申之大意

本社之儀明治七年十二月官祭御確定同八年一月神官夫々拜命其以來御造營且境内擴充奉願候所同九年十月擴充御許可ニ相成難有奉存候抑本社本殿ハ矮陋ノ小祠僅三尺四方許拜殿ハ二間ニ四間許其間ニ壹間半ニ貳間許ノ幣殿有之イツレモ年久敷極麗假造ノ建物ニテ普通ノ村社ニ相劣候實景先年教部省檢使等モ能ク視察被致居候處昨年風雨ノ爲顛倒破損現場其儘ニ難指置一時假成ノ修繕指加有之而已ニテ右御確定後于今御造營無之ヨリ國中衆庶ノ疑惑不少神官ニ於テ目下之御體裁默止スルニ忍ヒス第一御敬神ノ御國典ト憂慮仕先年來本縣廳へ度々照會御造營一條願出候ニ付該廳ヨリ其程度上申ニ相成候趣ニ候へ共數年何分之御指令無之不堪恐愕候元寬儀今般教承筋ニ付東京仕候條以該廳縣ヨリ右御造營云々上申之儀添翰持參本月一日進呈仕置候仰冀クハ右情實御洞察至急御造營御着手ニ相成度實以神官元寬等曠日御許可ノ到ルヲ待罷在候テハ素餐之責彌重ク面目ノ世間ニ對スル無之候間別而奉恐入候得共此節御許可御指令相同度出頭仕候事

明治十一年八月五日

忌部神社
禰宜 竹内 元寬 團

阿波國麻植美馬三好三郡之内和名抄所載郷名地不分明ニテ疑團之廉不少候ニ付別紙考按並ニ圖略相添及御問合候間詳細御調査有之度此段及御依頼候也

明治十一年十月十日

地理局地誌課
三五

本文之儀差掛リ取調度義有之候ニ付御手操ヲ以至急御回答有之度其節圖而御返却相成度候也
但當課奏坂ニ番地測量課構中江移轉候ニ付御回答直ニ同所へ御指越有之度差急ニ候儀ニ付此段併テ申進候也

考按

和名抄所載

美馬郡

秦原郷 今ノ吉野川北拜原村北ノ庄村岩倉村ノ邊ヲ云

三次郷 秦原ノ西今ノ重清村郡里村ノ邊ヲ云シ歟重清村倭大國玉社神體三次郷大國玉命ト記シコレアリ又重清村三

頭山ヲ往古三次山ト稱シ且舊家古記ニ見透村ト書セシアリトノ説有之候得共信偽如何

大島郷 阿波志ニ曰重清郡里等其地也ト然ルニ一説云吉野川ノ南今三好郡中莊村及ヒ美馬郡祖谷ノ邊ヲ云故ニ祖谷

ノ内大島峠ノ名アリト孰レノ方是ナリヤ

大村郷 吉野川北今三好郡清水村加茂宮村ヨリ足代村邊ニ至ル地ヲ云シ歟加茂宮社(即式内)棟札大村ノ神社加茂大

明神トアリ又清水村ノ奥瀧村ト云地アリ式社田村神社存ス別當ヲ萬年山田寸寺ト云説アリ是亦如何

(朱書)

秦原郷 ハ拜原村即郷名ノ殘レルモノニシテ疑ナシ

三次郷 重清村大國玉神社神體ノ銘又同村三頭山ヲ三次山ト云シコト又舊家古記ニ見透村ト書タリトノコト實地

探索有之度コト

大島郷 阿波志云々其證ヲ見サレハ信シカタシ又大島峠ハ一字山ヨリ祖谷へ越ル山ナリ三好郡中莊村トハ土地大

ニ懸隔ヒリ一郷ト云ベカラス又大島峠ノ名ニヨリテ祖谷ヲ大島郷ナリト決センコトイカ、アラン

三好郡

三繩郷 今豫川ノ北伊豫讃岐ニ界シ白地村ヨリ佐野村ノ邊ヲ云フト説アリ

三津郷 三繩郷ノ東今書間村洲津村ノ邊落合川三津ノ渡シノ名アリト云如何

三野郷 阿波志曰三野田庄見東鑑今足代村有三野田ト此説ニ據レハ即前ノ三津郷ノ地ヲ云ヒシニ似タリ然ルニ池田

庄ヨリ吉野川西南山城谷ノ地ヲ稱ストノ説アリ且池田ノ内及祖谷ノ内共ニ田井莊ノ名アリ舊一郷ニ屬セシ

歟可疑是非如何

(朱書)

大村郷 賀茂宮村棟札檢査有度事且式幡神社ヲ此賀茂宮ト定ル事イカ、此ハ山城國賀茂神社壽永ノ文書ニモ阿波

國福田庄トアリテ即本郡加茂神社是ナリ天文ノ棟札ニモ加茂福田庄トアリト云リ今モ毛田中庄西庄東加

茂中賀茂西賀茂アリ此諸村ニ賀茂ノ末社歴然タリ又瀧村田寸神社田寸寺ノ事予未タ知ラス往テ聞マホシ

三繩郷 白地村ヨリ佐野村ノ邊ヲ云トノ説アリヤ

三津郷 落合川三津渡ノコト先一説ニ備フヘキヤ

三野郷 東鑑ノ三野田保ヲ此三野郷トヒンコト尙ヨク考フヘシ且池田村ニ三野田ノ石アリテ三野郷是ナリトセン

トキハ三津郷ト同地トナルコト本書ニ云フカ如シ又池田村山城谷地隔絶一郷トセンコトイカ、アラム忌

部郷美馬郡貞光村邊ヲ云トノコトイフカシ又國鏡トアルハ書名ニヤ此書全部ヲ見サレハ眞偽決シ

射立郷 ハ川田邊ナラムト古人モ既ニイヘリ

麻植郡

忌部郷 吉野川ノ南今美馬郡貞光村小島村ノ邊ヲ云ヒシ歟國鏡云貞光村忌部古社絹織岩屋ノ地アリ廣々タル岩屋ア

リ高機ヲ織タモフ處ナリ當村ヨリ三里四方ヲ曲輪トシテ夫ヨリ三里内曲輪ノ跡アリ其後忌部大神宮ト崇稱

シ奉ル云々ト載セタリ之ニ據レハ忌部郷是地ナリシニ似タリ此説取ルヘキヤ如何
射立郷 忌部郷ノ東高越山以東ノ地ヲ云

前ノ數説ヲ錯考スレハ三代實錄貞觀二年美馬郡ヲ割キテ三好郡ヲ置キ其時惟吉野川西北ノ地ヲ割キ三好郡ヲ設ケ三郷ヲ置
ソノ後ニ至リ美馬郡大島大村二郷ノ地三好郡ニ屬シ麻植郡一郷ノ地美馬郡ニ屬セシナラム歟審考ヲ乞フ

國鏡云昔時美馬郡ヲ三好郡ト改メ麻植郡半分ヲ美馬郡ト改ム
麻植氏系譜云寛元四年丙午三月大西小笠原家ヨリ阿波國甲乙ノ名ヲ改メ云々美馬ノ里ハ郡里トシ三津ノ大村ハ重清宗繁ニ
村トス忌部神社敷地ノ山里ハ定光ノ莊トアラタムトアリ

因云麻植氏系譜一本アリ阿波志等曾テ麻植氏ノ事ヲ載セス然ルニ此書天日鷲命ヨリ七拾八代景光ニ至ル系譜ヲ載セ併セ
テ古文書ヲ附ス家領記ハ即チ元和二年景光書スル所ニシテ其書往々取ルヘキ者アルニ似タリ右書其頃ヨリ傳ハリシモノ
ニヤ御搜索有之度事

(朱書)

麻植ヲ割テ美馬郡ニ隸入セント云コト考ル所ナシ國鏡ト云書ハ何レノ年曆ノ物ニヤ此書ノ傳來聞マホシ又全部見マホ
シ其上ニテトモ角モ申ベシ編輯課ニハ定メテ此書有ラム歟

麻植氏系圖ト云モノ何カ古人ノ説ニ聞シヤウニ覺エレトモイマタ其書ヲ見ス何レノ家ニ傳フル書ニヤ此又全篇ヲ一見
セサレハイカニモト云ヒガタシ因云今麻植郡中ニハ麻植氏ノ人多カルヘシ本郡飯尾村城主麻植志摩守ナト云人アレト
モ小笠原氏ニテ出自別ナリ

右答書十一年十二月廿一日

美馬郡

美馬郡 今ノ拜原北ノ庄猪尻脇町舞中島ノ五ヶ村ヲ云

三次郷

所屬ノ村名詳ナラス重清村倭大國玉社神體調査スルニ倭大國魂命トハ判然セリ今一二字ヲ書スル有餘アリ
ト雖彩色ヲナシテ塗抹スルニヨリ不明ナリ又重清村三頭山ヲ往古三次山ト稱セシ傳リナシ且見透村ト書セ
シ舊家古記ノ所在シレス

大島郷

今ノ小島大田村邊ヲ云シナラン歟引證トナスヘキハ北ニ吉野川アリ西ニ貞光村ノ溪流アリ東ニ穴吹山ノ谷
小川アリ故ニ地勢島ノ形況ヲナセリ地脈南ヘ連リ貞光東端山西端山半田山西口山ノ數村ヲ經テ一字ヨリ祖
谷山ヘ越ル所ヲ大島峠ト云テ往時ヨリ大島郷ニ屬セシ所傳アリ

大村郷

所屬ノ村名未詳式内鴨神社ハ三好郡加茂村ニアリテ加茂野宮村ニアラス且加茂野宮村加茂神社棟札ヲ調査
スルニ加茂大明神ト書スルノミ又古時奥瀧村ハ今ノ加茂宮村ニ屬シテ瀧奥名ト稱シテ田寸神社アリ則チ別
當ノ萬年山瀧寺(田寸寺ヲ即今瀧ト改ム)ト稱ス故ニ清水村ノ奥瀧トハ誤ナラン歟

三好郡

三好郷 所屬ノ村名未詳

三津郷

今ノ晝間洲津村邊ヨリ川上ヲ云フ並ニ落合川三津渡シノ名詳ナラス

三野郷

今ノ足代村大刀野村以東ヲ云シナラン歟且池田庄ハ所傳ナシ及祖谷山ノ内田井庄ハ遺説アリト雖トモ池田
邊ト祖谷トハ地理隔絶スルニヨリ舊一郷ニ屬セシモノト見做シカタン

麻植郡

忌部郷

古老專ニ傳フル所ニヨレハ山崎村學村邊ヲ云尤國鏡ニ云貞光村忌部古社絹織岩屋ノ地アリ云々ト書載アリ
然レトモ美馬郡貞光村小島邊ヲ忌部郷ノ所屬トハ故人モ曾テ云ハサル所ナリ

射立郷

今ノ川田村瀬詰村邊ナラントハ故人モ既ニ云ヘリ

三代實錄貞觀二年美馬郡ヲ割テ三好郡ヲ置ク云々ト書載アリ又麻植郡忌部郷一郷ノ地ヲ割テ美馬郡ニ屬セリトハ古人モ云ハス亦史誌ニモ曾テ見サル所ナリ國鏡ニハ昔時美馬郡ヲ三好郡ニ改メ麻植郡半分ヲ美馬郡ニ隸入セリトアリ然レトモ此國鏡ノ書タルヤ全部ヲ熟讀スレハ已ニ妄説巨多故ニ引證シテ論シカタク麻植郡ハ往時ヨリ獨立ノ郡ナラン麻植氏系譜所在シレス因テ所傳スル年歴等搜索スルニ由ナシ

○美馬郡猪尻村八幡社祠官二宮正胤考ニ秦原(波都)ト和名抄ニアルハ誤ニテ遠江國秦原郷アレハ證トスヘシ今拜原北庄猪尻脇町舞中島ノ五ヶ村元一郷ニテ猪尻村一郷ノ元村ニシテ上野ト云地ニ五ヶ村ノ惣社ト唱ヘ八幡神社アリテ五ヶ村ノ氏神ナリ且又郡中ニ此外各郷ニ古代ヨリ惣社ト云テ一郷三社宛アリ猪尻村ハ元上野村ト云シヲ寛永年中上野村ヲ分テ北庄猪尻二村トセリ

三次郷 和名抄にミスキとあるは誤にてミヨシなるへし

同書備後國三次郡ありて今に三次と書てミヨシと讀むなり扱此郷は現今岩倉山なるへし此岩倉山に老年居城せし三好山城守の系圖元小笠原長經嘉吉年中甲州より阿波國三好來て三好氏ニ改むとあり此人の城跡今岩倉村にあり或人云三好氏三次の次字を改めて好字になせるはツキとよみてそれをいみ万人の上に立ん事を願する故に三次を三好ニ改めしといへり云々

大島郷 此郷今の小島村大田村なるへし北方に吉野川あり西に貞光山の谷川あり東にも穴吹谷の小川あり故に其地勢島の形なれば大島郷といひしなるへしそれより貞光西端山一字半平山口東山西口山も皆大島郷に屬せる山村なり且又一字山より祖谷山へ越る所を大島峠といへは故大島郷に屬せる故に古今云傳なるべし

大村郷 此郷は重清郡里に當るへし此郷は甚廣き郷にして三次郷よりは餘程廣き故に大村郷と云もよく當れり

○阿波國麻植美馬三好三郡郷名之儀先般當局地誌課より及御問合候所未詳之廉も多く有之當諸國を考據致し遂審按候處

夫々證左も有之に付別紙考按之通可相定と存候仍而地圖相添一應及御照會候也

十二年二月一日

地理局長

櫻

井

勉

高知縣令 渡邊國武殿

考按

阿波美馬郡古へ吉野川北拜原村より西に連り今の三好郡の堺に入清水村より足代村畫間村の邊に至り(注)美馬郡郡里重清を三好郡清水村加茂宮村等村里相連り一郡に屬せし也「吉野川南今の三好郡毛田村より加茂村に至り(注)既に加茂神社ありといへは貞觀二年三月美馬郡を割て三好郡を置きしより殆五十年の後延喜の時に及び猶美馬郡たる事判然たりし南は祖谷山に及ぶ

秦原郷 今の吉野川北拜原北庄猪尻脇町岩倉の邊(朱)御回答案の舞中島は川南の地にして古の麻植郡也

三次郷 今の郡里重村清水の地を云

大村郷 今の三好郡清水村より足代村の邊を云

大島郷 即吉野川を隔て、今の三好郡毛田村より加茂村の邊より祖谷一圓に及ぶを云(注)蓋し祖谷は古へは深僻の地也しを後漸く墾闢せし地にして今の大島峠は即麻植より大島郷に越るにより名を得る所也(朱)

(朱)答按に小島大田村の邊をいひならんかと有しされは加茂村の邊郷名なし且前村の地古へ麻植忌部郷に屬せしは後に詳にす

麻殖郡古人夫日鷲命穀麻を此に植られしより後漸次國土を墾闢せしなれば今の如く小郡にはあらざるへし蓋古へは即今の郡地より西吉野川にそひ美馬郡の拜村穴吹村等より半田村に至り半田奥山一字山と祖谷山の間を以て郡堺となせしなり(注)一字村より流出る水は南流し祖谷の水は西流す其間の一山脈を以て分ちし也

吳島郷 上下島の邊にし上浦半島村より西麻植敷地村にいたる十三村を云

川島郷 今川島村存す同村より山崎村に至る八村を云

射立郷 瀬詰村川田村等より以南十村及び今の美馬郡拜村を云

忌部郷 今の美馬郡穴吹村より以西半田に至り南は一字村の邊を云貞光村東西端山麻殖氏故城忌部古社の地所々に存在し證左となすへきあり(注)長元物語曰重清城主佐より元親出馬され責落し其邊小侍麻植青野杯降參す云々

○土佐軍記曰岩倉の城落たり此邊の城主青野麻植杯人質を出し降參す云々「されは忌部の子孫麻殖氏此處にある事明らか也」且一字山中野定光寺舊は貞光村にあり今其址を存す(注)貞光は麻殖氏累世城下の地なれば麻殖太郎太夫定光の名を取り地名になす後に訛して貞光となりし也寺も定光菩提のため建立し寺號に冒らせし也」山號に印部山と稱す印部は即ち忌部にして地名をさり山號となすは枚舉に違あらす是又一證となすへし

(朱書)

天保十年ノ頃取調トシテ麻植郡川島町中川和泉美馬郡巡在手録ノ中一字山ノ條ニ

中野名

加茂ノ宮瀧寺末

眞言宗

寶珠山定光寺

普

門

院

本尊不動明王長二尺五寸立像此寺四十年前以前火災ニカ、リ縁起ナシトモ燒失シハレハ開基シレスト云リ

右ハ山號寺號ノ縁脩レリ印部山トハ何コトソ只貞光ト定光トノ語合ルヲ以テ僞作セシナラム

同録中ニ

一字村開發分りがたし祖谷山なる西山倉の邊能持類古文書に大島山の内赤松三野口三間穴吹庄内葛籠三間爲料所可令知行し旨依仰執達如件正平廿四年七月四日右馬之助西山兵庫之助殿とありまた一字奥分より祖谷山へ越る峠を大島峠と云ふな

んと思へは和名抄なり大島の口ならんか今も一字名は大名となりて大名なりし大島の名は廢せしならん其例所々にあり

右兩條御參考ノタメ抄出セシナリ(朱書コ)

一説山崎村を忌部郷に充つといへとも地勢を熟考するに川島村より山崎村の間僅に八村皆山川間の小村也狹隘にして二郷を置くの地なし貞光村邊を以て之に充れば忌部は創關の地なれば最廣く外三郷も廣狹相適す因て其地を以て之を定む

(朱書)

答按云貞光村邊を忌部郷の所屬とか故人も曾ていはさる所也とあれとも天正の頃迄は未だ麻殖郡に屬せし様なれば其以前紛紜を生すへき謂れなく元文寶曆の頃に至り既に貞光村と山崎村と忌部の紛擾を生したれば故人曾ていはさるるはいひ難し

三好郡貞觀中美馬郡の西北隅を割き之を置き吉野川以北洲津村川南井野川村より以西今の郡地を云

三津郷 洲津東山西山の地

三繩郷 三津の西白地馬路佐野諸村を云讃岐伊豫へ通する岐路に係る

三野郷 吉野川の南井野川村池田村より又南五村の地及び川西山城谷の地を云(注)山城谷も又往古は必僻陋の地にして後漸く開けしならん

○阿波麻植三好美馬三郡郡名之義ニ付考按地圖添去月中及御照會候處別ニ調査之御所見モ無之候ニ付當局見込ヲ以決定可致旨御申越ニ候へ共右ハ將來御縣地誌編輯之節例別第二號郡諸郷庄條並十一年五月及御通達候通到底御取調可相成儀ニ付後之紛紜無之様此際ニ於テ判然致置度就而ハ今一應考按地圖ニ據ラレ實地ニ就キ御調査之上可否共考按條之下へ記載ニ而御細答有之度此段重テ及御照會候也

十一年三月十五日

地理局長

櫻

井

勉

高知縣令 渡邊國武殿

追而書略ス

十二年二月一日地誌課考按ヲ答辨ス

美馬郡古へ吉野川北拜村ヨリ西ニ連リ今ノ三好郡ノ境ニ入り清水村ヨリ足代畫間村ノ邊ニ至リ云々吉野川南今ノ三好郡毛田村ヨリ加茂村ニ至リ云々(注)既ニ至リ云々(注)既ニ鴨神社アリト云へハ貞觀二年三月美馬郡ヲ割テ三好郡ヲ置シヨリ殆五十年ノ後延喜ノ時ニ及ヒ猶美馬郡タルコト判然タリ

按ニ此説ハ延喜式神名帳ニ美馬郡十二座云々鴨神社トアル社ノ現今三好郡加茂村ニ在ニ據テイハルヘケレトモ此延喜式ハ古人モ既ニイハレタル如ク弘仁貞觀ノ二式ヲ増損シ尙其後ノコトヲモ加ヘテ作フレシモノニテ殊ニ神名式ハ多分貞觀ノ舊ニ據ラレタモノトミエテ貞觀以來分割ノ諸郡飛驒遠江出羽三河陸奥等ノ諸國ニ在テ民部式ニハ之ヲ載ラルト雖トモ神名式ニ載ラレヌハ分割ノ郡ニ式社ノナキ故ニハアラスサルハ本國名西郡ノ如キ寛平八年九月五日名方郡ヲ割テ置レタルニ神名式名方郡九座トアル内ノ多初御奈刀彌神社ノ現ニ名西郡ノ極西ナル諏訪村ニアルニテ知ルヘシサレハ此鴨神社ノ現今加茂村ニアルニ據テカノ分割後モ猶美馬郡ナリトセムコトハイカ、アラン

麻植郡古へ天日鷲命穀麻ヲ此ニ殖ラレシヨリ後漸次國土ヲ開墾セシナレハ今ノ如ク小郡ニハアラサルヘシ云々

按ニ必ス大郡ナラテハ不叶トハイカテカイハムソハ國名ノ元由タル阿波郡モ四箇郷ニテ下郡ナリ搜又郡ノ大上中下小ノ等差ヲ定ムルコトハ古事來歴ニヨラス山川阻險事務ノ濟否ニヨル其事ハ令條並ニ歴史ニ昭然タレハ今更辨ヲマタス

忌部郷云々(注)長元物語土佐軍記並云麻植氏云々サレハ忌部ノ子孫麻植氏此邊ニアルコト明カナリ

按ニ麻植氏ト雖一概忌部ノ子孫トハ決定シカタシサルハ元龜三年阿波國諸將記ニ麻植郡麻殖遠江守殿小笠原源氏ニツ松皮トミエ又一本諸將記ニ金丸城麻殖紀伊守小笠原氏紋ニツ松皮菱也百五十宮井城麻殖遠江守小笠原氏紋松皮菱千四ノ

ナトミヘタレハナリ扱又一字山定光寺號ヲ印部山ト云コト尋決スヘシ

一説山崎村ヲ忌部郷ニ充ツトイヘトモ地勢ヲ熟考スルニ川島村ヨリ山崎村ノ間僅ニ八村皆山川間ノ小村ナリ狹隘ニシテ二

郷ヲ置クノ地ナシ云々

按ニ古昔ノ郷ヲ定ムルコト土地ノ廣狹ニヨラス民戸ノ秘密ニヨル其證戸令ニ詳ナリ故ニ贅セス

因云スヘテ諸郡トモ郷割ノコトハ令條ニ原キ實地ニ就テ論スヘシ推按ヲ以テ定ムヘカラス仍テ逐次辨正セス

答按ニ云貞光村邊ヲ云々天正ノ頃迄ハ未麻植ニ屬セシ様ナレハ云々

按ニ天正ノ頃マテハ貞光邊ノ麻植郡ニ屬セシコト何ノ證アリテイハル、ニヤ聞マホシ

三好郡貞觀中云々

按ニ此郡疆域ノコト美馬郡ノ條下ニ述タルニテ互考スヘシ

右貴命ニヨツテ考證スト雖トモ倉卒ノ所爲ナレハ尙篤ク御勸考之上取捨セラレ至當ノ御答相成度此段上申候也

明治十二年四月十三日

史誌編輯係付屬
新 居 正 道

史誌編輯御用係

殿

麻殖郡忌部郷を割て美馬郡に隸入せられしといふは非なる考證

三代實錄に貞觀二年三月二十日壬申割阿波國美馬郡置三好郡とありて幾郷を割くとも何々郷を割くとも見されとも割くとあるからは國鏡と云ふ書にいへるやうに美馬郡を三好郡と改めたるにはあらぬ事は明白なり扱又國鏡に麻植郡半分を美馬郡に改むとは何によりていへる歟すへて此國鏡といふ書は近來のものにて甚いふかしき證とするに足らず萬一論者の説の如く貞觀に美馬郡を改て三好郡とせられ麻植郡忌部郷を割て美馬郡とせられたらんには和名抄麻植郡の下に忌部郷は載られましく必美馬郡の下に載らるへき理也其證は稍聚三代格に大政官符應省名東郡主帳一員置名西郡右得阿波國解兩名西郡

司解兩名東名西二箇郡元爲一郡之時置件職二員而依大政官去寛平八年九月五日符旨分爲兩郡七箇郷爲名東郡四箇爲名西郡而未置此職已違令條望請官裁省彼一人爲此郡員者加覆覈所中有道謹官載者大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣時平宣奉勅依請昌泰元年七月十七日と見へて和名抄に名東郡に名方新井加茂井上八萬殖粟名西郡に埴土高足士師櫻間と見たり此例を以て比考するにいふことと和名抄麻植郡の下に忌部郷を載られたるは全く貞觀に美馬郡に隸入せられざる事判然たらずや

因云和名抄は源順か勤子内親王のために著す所にて順は延喜十一年に生れて永觀元年に卒す勤子親王は醍醐天皇の皇女にして天慶元年に薨し給ふされは此抄は承平年間に作られしものなることは推て知らる殊に糺聚三代格又延喜民部式頭書等に見へたる貞觀より延喜までの間に分割せられたる諸郡又増益せし諸郷悉皆此抄に記載されたるを見れば其時の實記にして尤證左に足る

大麻比古神社等外常履史誌編輯係付屬

新 居 正 道

明治十二年四月十五日

宮 司 川 田 秀 顯 殿

小 杉 楳 邨 謹 テ

一書ヲ裁シ高知縣令渡邊君陛下ニ敢テ此蕪言ヲ獻ス吾阿波國々幣中社忌部神社ハ乘セテ國典正史ニ燦スルコト久シ尋テ延喜ノ神名式ニ麻植郡ノ部内ニ收載シ名神大月次新嘗式號麻植神式號天日鷲神ト分注セル舊社ナルカ故ニ維新ノ時復古ノ大典ヲ皇張サセラレ明治四年ニ至テ國幣中社官祭ニ御崇敬アリキ然レトモ其本社タルヤ中葉而下數回ノ亂離ヲ經テ頗ル衰頽ヲ極メ加之舊藩主蜂須賀氏國事ヲ執リシ享保元文ノ度事故アリテ殆瀕滅ニ屬セシコト國人皆能ク知ル所也楳邨誤テ之ヲ德島藩廳官ニ承ケシヨリ彼ノ享保元文ノ忌部公事裁斷一卷ノ秘書ヲ竊ニ披閱シ曾テ苦慮スル所ノ事件ナレハ藩知

事君及ヒ名東縣權令故久保君ニ建言シ神祇省及ヒ教部省ニ伺書ヲ進達スト雖トモ其御指令ノ如キ未タ以テ本意ヲ達スルニ足ラサレハ尙一層精細ニ搜索ヲ加ヘ古老ノ口碑及ヒ田島ノ小字又三木氏傳襲スル所ノ古文書數十篇等先輩ノ考案セシ一二説ニ參考シ偶マ不可拔ノ確證ヲ得更ニ教部省ニ上言シ爲ニ其實蹟調査ノ兩使ヲ來タシ此麻植郡山崎村忌部山鎮座ノ一小祠即チ延喜式收載スル所ノ本社舊地ナルヲ認得テ朝議コ、ニ一決シ愈御再興ノ官祭儀式ヲ執行ハルヘシ云々公達アリシハ實ニ明治七年十二月廿二日也爾後三五年間新築造營ノ一舉ニ際シ美馬郡端山ノ一小祠亦往昔ノ本社ナリト云テ再建ノ事ヲ情願シ頃者既ニ己ニ内務省地理局主任タルヲ以テ地誌課ニ於テ麻植美馬三好各郡ノ區域郡界沿革ニ涉ル新圖ヲ製シ御廳照會中ナリト聞ク、遙ニ之ヲ恐察スルニ陛下トヨリ國典正史ニ通暢スル者ヲシテ其得失ヲ精覆討議セシメ千古公平ノ說ヲ探リ以テ之ヲ輕忽ニ措置シ給ハサルコトハ信據スルニ足ルトイヘトモ夫レ之ヲ處分スルニ容易ナラサル顛末アリ聊カ記念スル所ノモノヲ舉テ之ヲイハシ幸ニ公議ノ照亮ヲ請フ是ヨリ先キ細矢庸雄ト云者アリカノ端山ノ一小祠ヲ本社ナラントシ加フルニ永祿四年ノ上梁牌一枚該社ニ傳フル所ノ物トシ而シテ山崎村ハ別社ナリトノ意味猥雜ノ稿本三冊ヲ考作シ之ヲ名東縣廳ニ送呈シ教部省ヘ上達アランコトヲ請フ權令故古賀君其儘ニ難捨置云々添書ヲ附シ八年一月同省ニ傳達ス是ヨリサキ——教部職是是ヲ以テ該省長官令ヲ——ニ下シテ之ヲ質ス——一讀其實地ノ由蹟傳説ノ得失何物タルヲ辨知セス只村等ノ無稽ノ俗言ヲ其儘ニ記載セルモノナルコトヲ明解シテ辨妄一冊ヲ稿シ其下間ニ復答ス尋テ庸雄前説遺漏少カラストテ正蹟補考ト題スル者ト麻植美馬郡域沿革及ヒ郷里位置等造意セル新地圖ヲ携ヘテ上京シ九年二月直ニ教部省ニ進呈ス長官又命シテ——ラシテ能ク檢付辨論其意ヲ盡サシム其補考ノ要旨タルヤ貞觀二年ニ美馬郡ヲ割キ三好郡ヲ置レシトキ一郡ヲ分劃セシニハ其兩郡共ニ狹少ナランコト差當ル理ナレハ疑ナク麻植郡西部ヲ美馬郡ニ歸綴シサテ美馬三好ヲ適宜ニ美馬ニ併シナルヘシ其證阿波記國鑑(合シ大)記等ニ明文アリトテ主張セレトモ彼ノ麻植ノ部内ノ美馬ニ併シ、ト云コト抑何ノ古典上ニ其徵證アリヤ第一ノ明文トスル所ノ阿陽記國鑑ノ類ハ寶曆度神寶出現ト披露セシ彼ノ宮内カ奸計ヲ施シツル後寛政ノ頃ニ雜錄セン偽書其證文中ニ數々見ユナリ苟シクモ故實ヲ精覆スル

我輩ハ探ルニ足ラサル杜撰ナルコトヲ該社ノ固有物ナラサルモノナレハ又補考辨一冊ヲ牽曳シナホ地圖ノ辨モユノ一冊ニ加筆シ長官ニ復命ス且其庸雄ハ出羽國人ニシテ阿波國々幣中社大麻比古神社禰宜ニ赴任シ未タニ二三ヶ月間ノ起草ナリ加フルニ無幾程讀岐國々幣中社田村神社權宮司ニ轉セシ事ナレハ實ニ其地方傳説ノ得失ノ可否ヲト聊辨知スルニ暇アラス妄リニ端山ノ奸氏等カ訴フル説ヲ記載セルカ故ニ訛謬誤認ノ條々一日省中ニ召テ直活數時間細密ニ付非スルニ及ンテ庸雄只唯々ト云テ一章半句ノ再陳モナク黙々然トシテ退出ス此ノ實際省中ノ官員ミナ能ク知ル所然ルニ同八月ニ至リ貞光村近隣ノ者二人同國人協谷一郎ト云者ノ紹介ヲ得テ突然……カ偶居ニ尋訪シ密ニ説話シテ云ヘラク端山ノ一小祠ヲ以テ國幣社タランコトハ先生胸裏ニアルコト必セリ願ハクハ山崎々々ト云我意ヲ折キ端山ニ一步ヲ讓ラレテハ如何若シ純然タル官社ニナレ難クハ山崎ノ奥宮トカ攝社ノ類ナランニテモ可ナリト加フルニ事不潔ニ渉ル卑言モ交レハ……大ニ憤激シテ其應接ノ如キ斷乎謝絶ニ及ヒキ一郎傍ニ默座シテ此事ヲ知レリ又同九年ニ至リ豈計ンヤ教部大輔宍戶君……別席ニ招引シテ示談スラク此程宮内大丞山岡氏ノ認書ヲ以テ元阿國人折目榮ト云者屢謁見ヲ請フ一々閑話他ナシ忌部社再調査ヲ欲ス其論説タルヤ彼ノ端山ノ一小祠ノ主張セリ然シテ理ニ山崎村明徴判然御決地ノ後ナレトモ折目カ云所亦一理アルニ似タリ加フルニ携ル所ノ地圖郡界郷里ノ位置サモアリケント覺ユ蓋シ……カ意見之ヲ如何ト……襟ヲ正シテ云料ラサリキ此御下問アラントハ凡ソ阿國ノ地形兩郡ノ景治夢ニタモ存知セサル人ニハ彼レ巧言造意イカハカリカ虚喝ヲ吐露セルナルヘシ實ニ山崎村ノ本社タルコト嘗テ細矢ニ答辨セルカ如ク豈ニ只苟且ノ地ナラン其明徴確乎不拔證據歴々亡滅セサリ限リハヨシヤ何レノ權貴ノ示談タリトモ……自ラ任シテ他ニ一步タモ讓ルベキ覺悟無シ本省熟視檢覈朝議コ、ニ一決シテ公達アリシ今日ニ於テヲヤ蓋シ朝命ヲ以テ再調査アランニ何ノ憚力之有ン彼ノ榮ハ……未タ一面讖無レトモ其の際ノ得失可否ヲ熟々論辨シ毫モ山崎村動カスヘカラサル明徴ヲ徐々ト和解シ彼レカ陋見ヲ破ルヘシ……カ意見如此ト答フ是ニ依テ日アラス榮ヲ省中ニ召シ彼レカ述ル所ノ説ヲ聞キ其考證ノ一書ヲ見ルニ前日庸雄カ上呈スル所ノモノニシテ猶棟札ノ寫新地圖等ヲモ副ヘタリ且其容體敖然頗ル失言怒氣ヲ帶ヒ談話ミナ敵視ナラサルナシ固ヨリ……其實地

ヲ熟知セレハ事一々討論徵證ト云モノ、得失ヲ算ヘテ辨明ニ及フトイヘトモ彼カ喋々イハユル喧嘩腰ノ暴言ナレハ凡ソ二時間許終ニ平和ノ談ニ至ラス常御省ニテ御取上御ざらねは本式高知縣へ出頭いたす阿波の名東縣ミ違ひ土佐の高知縣の人はみな正直でござる」ト怨言ヲ吐テ退出ス是亦省中ノ官員能ク知ル所ナリ蓋シ彼レカ意タルヤ昔年徳島藩治ノ時不正ノ舉動アリシヲ譴責シ除族放逐ノ罪則ニ該ル此處分至激ニ出ツト徳島政府ヲ痛恨シ延テ其頃ノ役員彼ノ一條ニ關係有無ヲ問ハス之ヲ罵詈スト聞ク況ンヤ山崎村ニ決地ノ終始……主トシテ之ヲ周旋セルニ於テヲヤ今果シテ如此失敬アリ蓋シ小人ノ所爲敢テ論スルニアラサル者乎然シテ後發端ニ粗速ル所ノ榮等三人連署ノ願書閣下亦不都合之儀ニハ候ヘ共情願抑制モ致兼候トノ添翰十年五月ニ附與セラル、ヲ以テ内務省へ出頭其願書及考證書類三種又兩郡區域沿革新圖永祿四年棟札寫等ヲ進達ス社寺局主任タル旨ヲ以テ同局之ヲ送附セリ……其願書ヲ一閱大略去年九月ニ教部省へ携ヘ出シ所ノモノナレトモ願面ノ文意彼ノ一小祠ノ傳説ハ大ニ前日ノモノニ虚飾ヲ加フ其甚キニ至リテハ既ニ七年村雲義直カ指出ス所戸長折目義太郎奥書ヲ以テ調印注進スル所モ由緒ニ増補セル數倍ナリ又其實實ニ背馳スル條々少シトセス今是ヲ以テ之ヲ察スルニ蓋シ一時ノ客氣ニ出テ彼ノ美馬郡ニ勝蹟多カルヲ捨テ山崎村ニ決地セシハ特リ偏頗ノ處置ナラント云コト答ントスル俗意ナレハ隨テ七年ノ取調ニ關係セン役員ヲ訪議シ無根ノ私説ヲ書雜ヘ端山ヲマコトシヤカニ主張セルハ實ニ荒唐不經ト云ヘシ然ニ七年教部省ニ於テ主務關係セシ大澤清水栗田寛等即今社寺局ニ奉職セス……ノ如キイハユル被告ニ等シキ願意ナルヲ以テ辭シテ之ニ意見ヲ加ヘス小中村清矩其掛リトシテ之ヲ擔當スト雖トモ該願ノ得失ヲ辨明センニハナホ彼ノ七年決定前後ノ調書數十冊ニ涉リ更ニ查展セサルヲ得ス之ヲ查展スルニ就テハ到底……ナシテ討議精覆セシメサルヲ得サルニ至ル其討議スル所ノ大略アラ……上段ニ説ヘルカ如ク結局麻植美馬兩郡ノ區界沿革ハ古典ニ徵スヘキモノサラニアラサレハ無稽ノ臆測ト云ハサル可ラス彼ノ忌部郷ノ所在ノ如キモ今ナホ麻植郡中ナルコト既ニ忌部山モアリテ古來連綿動カスヘカラサル者ナリ(忌部社ニ關係スル考證別ニアリコ、)之ヲ要スルニ只郡境ノ沿革有無ノコト此調査ノ一大機勢ナレトモ蓋シ此沿革古典ニ徵證ナシト見認ルトキハ別ニ多端ヲ須ツニ及ハス一言ニシテ彼ノ端山往

昔麻植郡ナラサルコト明ナリ故二十一年九月社寺地理兩局照會シテコノ調取コ、ニ結果ス其決議ノ如キ聊其一端ノ要領ヲ摘ムコト左ノ如シ

現今國幣中社タル山崎村ノ社ト今般願立タル貞光村ノ社ト實蹟ヲ考ヘ双方ノ徵證ヲ比較スレハ

山崎村ノ徵證

延喜式ニ見エタル如ク麻植郡ニ鎮座

式内社ニシテ本社祭神ニ所縁アル舊攝社該村中近隣所々ニアリ

正慶年中忌部氏人契約古文書三木氏ニ傳來數十篇ノ中

貞光村ノ徵證

只永祿ノト梁牌ヲ其社ノ物也ト云ノミ

此他今般上進セル麻植氏系圖三好康永願文其外ノ古文書類ミナ確證トスルニ足ラス其他ノ字ニ靈蹟ヲ表シ忌部市ナ

ト云コト山崎村ニモアレハ論スル限ニアラス

依テ折目榮等カ願意難立ト存候條願書ハ建白ト見做シ左右ノ御指令無之方可然上相考候也

主務 小 中 村 清 矩

別紙 參考書類

- 甲 印 明治七年二月名東縣權中屬小杉榎郡教部省へ建言考證添
- 乙 教部省ヨリ明治七年三月實地檢査之儀正院へ伺書御指令添
- 丙 教部省權大錄大澤清臣清水重華實地檢注二冊
- 丁 名東縣下麻植郡數村美馬郡端山等所々ノ忌部社舊蹟申立書類壹綴
- 丁 教部省ヨリ七年十月實地檢注ヲ以愈徵確ニ付山崎村ニ決地伺定正院へ進達書

戊 正院ヨリ七年十二月廿二日山崎村天日靈神社ヲ以自今忌部神社ト稱シ祭典被行候御達書

己 八年一月當村神社權宮司細矢庸雄忌部神社鎮座考三冊教部權中錄小杉榎郡鎮座考辨妄一冊

庚 九年三月細矢庸雄忌部神社正蹟補考一冊小杉榎郡補考辨一冊

辛 十一年七月地理局地誌課ヨリ麻植郡美馬郡ノ界上古ヨリ變セサルモノトナスト言フ答辨書

又九年來履御造營ノ一條請願云々舊令君及ヒ閣下之ヲ伺出給フ共十年十一月伺書指令ヲ案ニ云

主務 中 山 宗 禮

該件ハ昨年十一月進達之節見込取調相伺候處本社所在ノ儀ニ就而ハ客歲五月以來屢々献言等有之ニ付着手方見合ス

ヘキ旨局長ヨリ被命其儘打過候所現今ノ社地ハ既定ノモノニ付如左御指揮可相成哉相伺候也

書面之趣ハ一層經費減縮ノ見込ヲ以仕様目論見帳取調尙境内在來建物ノ繪圖而ヲモ相添更ニ可伺出事

是ニ於テ九月十一日イヨク御指令ヲ以テ御廳へ送付ス然ルニ榮此事ヲ聞キナホ奸徒輩荷擔シテ再議亦此ニ及フト大ニ暴言ヲ吐キ社寺局長及ヒ其掛リノ官員ヲ誹謗止マズ地誌課塚本氏ニ強談シ終ニ十二月ニ至リ更ニ地理局ニ引取テ再ヒ之ヲ調査スヘキ者ノ如クナレリモトヨリ前顯ノ指令ニ依テ御廳ヨリ其仕様目論見帳不日ニ進達セラレトモコノ紛々ニ遮ラレテ再應ノ指令ニ至ラス荏苒今日ニ及フ一一日地誌課ニ出テ塚本氏ニ議論シ干時榎郡本官ヲ以テ修史錄ニ奉仕ス其郡域ノ位置郷里ノ所在ヲ掲ケシ新製ノ地圖ヲ見テ其製作ノ考證果シテ何ノ書ニアルヤヲ問フ現今備用ノ阿波國圖二三張ト榮力注進スル所ノ書類ニアル如ク實ニ此三郡今ノ地圖ヲ以テ考ルニ麻植郡尤モ狭少ナルハ必美馬郡ニ補入セシト云コト信スルニ足レハ其意ヲ以テ豫シメ之ヲ造リ加フル阿波志ノ說ヲ探ルト恬トシテ是ニ答フ嗚呼今日如キ重大事件ヲ所置スルニ毫モ本邦上中世ノ制度ノ沿革ヲ問ハス所謂郡ニ大上中下小ノ差アリ郷ニ課口ノ増減租稻ノ多寡アリ只眼前ノ廣狹ニ俟スヘキニアラサル故實ヲ意トセス況ンヤ阿波國古今ノ典籍ニ涉ラサルノミカ山川ノ淺深景況兩郡地形新舊ヲ實踐セス何ソ其所爲ノ容易ナルヤ只席上一舖ノ粗圖ニアル所ノ郡域ノ廣狹ヲ見テ特リ狭ニ意アル所ノ說ニ委シ斷然之ヲ決セン

トスルカ抑七年ノ朝議ヲ何ニカ置ク之ヲ按スレハ還テ我輩考證ノ精細ニ涉ルヲ愧ツト云ハン乎其歎シテ餘リアリ只恐愕
戰慄ニ禁ヘス伏惟ルニ我忌部ノ神靈中一タビ應永ノ震災ニ陵途セシヨリ或時ハ兵燹ニ罹リ又或時ハ奸謀ノ爲ニ社殿破壊
シ今又彼ノ暴徒輩ニ此社域ヲ誣ハレテ新築造營遷延スルコトコ、ニ三九年何ソ如此浮沈移リナクワタラセ給フ楳榔仰キ
願クハ閣下神靈ノ爲ニカチ盡サル彼ノ靈植美馬兩郡ノ郷民村老ノ口碑ニ參看其得失ヲ精覈討議セシノ千古公平ノ説ヲ探
リ以テ之ヲ措置シ必シモ恥辱ヲ百世ニ求メ給フコト勿レ——未タ閣下ニ馨數ヲモ交ヘ奉ラサレトモ其之ヲ傍觀默止スル
ニ忍ヒス今ナホ固陋ヲ忘レテ敢テ此無言ヲ獻ス幸ニ公議ノ照亮ヲ請フ多罪々々誠恐誠惶敬々謹テ書ス

明治十二年五月一日

高知縣士族

阿波國名東郡住吉島百四十八番地居住

大政官七等掌記

東京府下野區富士見町

二丁目三十七番地寄留

高知縣令 渡邊 武殿

五月廿一日御認宮司連名之貴翰宮司ヨリ達來今日拜閱益御奉職之狀欣喜々々當地先月廿八日ヨリ連日ノ雨熱麥刈
入大困却藍ノ虫掃取候事モ不出來虫喰葉盡ント大ニ歎息致居候事ニ御座候

一高知縣令ヘノ御建白書拜見昨年迄之御手續明了宮司ヨリ申上候事ト存候岩本郡長ヘ貸有之右御建白ヲ本トイタシ岩本
ヨリモ令公ヘ上申可致模樣ニ御座候一新居正道地誌課寫取ハ漸先月廿日頃見及候事故先御文通ノ簡隔靴ノ次第モ有之候
此度宮司ヨリ右寫御遞達可致候間右様御承知被下度此度郡境郷名ヨリ當社ヲ動シ可申トノ趣尙實ニ慥可次第ニ御座候右
寫ニ付箋ノ如ク印部山定光寺ハ中川和泉ノ調ニハ寶珠山ト有之ヲ貞光ニ附會セント印部山トマテ牽強スルハ却テ尾ヲ顯

シタル所業可笑ノ至ト存候

一貞觀二年三月美馬郡ヲ割テ三好郡ヲ置キシヨリ殆五十年ノ後延喜ノトキニ猶美馬郡タル事判然タリトハ新居モコハ延
喜式ノ事ヲ知サル人ナリトカ、ル人ノ考證可怕後ニ至リ天正ノ頃マテハ未タ麻植郡ニ屬セシ様ナレ云々永祿三年姓氏錄
元龜四年ノ大田文ニ美馬郡分脇殿定光殿トアリ右研究トヤ申サレ只々人多臆大ノ語アレハ社中一同滿シト罷在候
一郡界ノ建石ハ種穂山ノ禁ツ、ノ山拜村トノ境小谷ノ傍東手ニ北向ナリ

寛永十二甲戌年

美馬郡 堺目トアリ
麻植郡

八月十七日

近日ノコトニテ證據トモ成不申哉サレトモ無證ヨリマシナラン

一阿波業語湯淺兼造撰伊射奈美神社ノ條ニ中略湯立ハ川田瀬詰二村ノ間ニアリ湯ト射ト普通ス郷名ヨリ考レハ伊射奈美
神社高越山ニ決セリ射ノ字ニ心ヲ付ヘシ且此神社ニ土地美馬郡ノ事ヲ考ルニ此地兩郡訴訟ノコトアリ寸界ワカレ難
ク美馬ト麻植トノ界ノ石ヲ掘出シ見ルニ圖ノ如シ

北 向 ニ 立 西美馬郡 東麻植郡
クナボゴケンシマタクヲカケヤマハ兩郡八合
是ヨリ下ハ地ニウマル

此建石ノコト郡役所ヨリ段々取調候ヘトモ相分リ不申候

一長元物語土佐軍記未タ手ニ入ラス南海治亂記ノ如キモノナラン南海治亂記ハ御承知ノ如ク金丸ノ城ニハ麻植氏——三
谷ノ城ニハ鹽田氏穴吹ノ城ニハ細川族トアリテ郡名ハ無之候
塩田ハ大安寺塩田長方ノ祖ナリト故ニ長方ニ古文書無キヤト尋タレトモ何モ無之旨

一南海治亂記ニハ麻植青野ノ姓ナシ麻植遠江守宮井城主阿州土佐諸將記川島城條連署ノ中ニ麻植志摩守朱書ニ岩倉ニテ討死トアリ金丸城ノ麻植紀伊守ハ朱書ニモ三好記ニ阿佐ト出ルトアリ阿佐麻ノ誤ヨリ出タルナラン

一忌部ノ子孫麻植氏此邊ニアル明々也續日本記ニ稱徳天皇神護景雲二年秋七月乙酉阿波國麻植郡ノ人外從七位ノ下忌部連方磨從五位上忌部連須美等十一人賜姓宿禰大初位下忌部越磨等十四人賜姓連トアリ麻植郡ハ勿論諸郡ニ忌部ノ子孫族立セシナラン既穴喰ノ元木ハ日鷲命ノ子孫ト式社考合類ニアリ

一前段陳述ノ往復ニヨリテノ考等混淆ノ段ハ御海惣御推讀是祈上郡境取調地誌係西村氏ハ先月廿日頃山崎村へ入込候筈ニ付迂生十八日ヨリ出頭今ニ參リ不中美馬郡貞光日友山白人宮調査迄ハ相分り候得共其餘一切相分り不申ニ付派出先探索爲致居申事ニ御座候西村氏參り候ハ、郡境郷名之分出合吳候様郡役所ヨリ之申聞モ有之候義西村へ局外者トナリテ申シテモケ様ト別紙ノ趣意ヲ申述候方ト申談居申候

一社中ヨリ上願トシテ出京ノ次第ハ宮司ヨリ可申上ニ付相略候

是迄ノ手續如此猶西郵應接相濟候上ハ至急御報知可仕ト宮司申談居候今般宮司ヨリ御文音可仕上ノ事ニ付草々頓首百拜

六月二日

松園先生 研

竹内元寛

美馬郡境郷名取調概略

一貞觀二年三月二日美馬郡ヲ割テ三好郡ヲ置クト三代實錄ニ記載シテ判然タリ阿陽記ナトノ如ク美馬郡ヲ三好郡ト改麻植郡半分ヲ美馬郡ト改ムトハ何レノ書ニアルヤ未ダ見聞セサル也

一麻植郡半分ヲ美馬郡ト改ムトシテモ貞觀年度ヲ改制ノ際トセシ和名鈔ハ百年モ後著述ナル故郷名モ改制ナラン然トモ貞觀年間麻植郡ト唱ルトモ和名鈔ハ郡名郷名トモ美馬郡ナルハ必然タリ

一和名鈔ニハ郡ノ首尾ノ郷ハ錯亂ナク中間ニハマ、アルト見ユルナリ射立ヲ越エテ忌部アル如キノ錯亂ハ決テナシ

一麻植阿波兩郡トモ和名鈔ニハ四郷ニテ對岸ノ地東西ノ里數廣狹粗同シク美馬ト郡堺モ瞭然タリ

一應仁武鑑ニ細川右馬頭持賢所領阿波忌部庄三百町居城阿波麻植郡城山トアリ城山即種野山ナラハ忌部郷美馬郡ニアラサルコト顯然タリ

一永祿三年初秋下旬細川讚岐守改舊土姓氏錄並ニ元龜四癸酉年二月十八日記之トアル大田文姓氏錄ト大同小異等ニ美馬郡脇殿武田源氏紋菱貞光殿同紋松皮トアレハ貞光村右年間美馬郡タルコト顯然タリ

(朱書)

姓氏錄ニ貞光殿トマテ氏名不分南海治亂記ニハ貞光ハ無之候

阿波國城跡記美馬郡城跡六ヶ所穴吹三谷上野脇岩倉重清トアリ右城主ノ名ハ永祿天正年間ノ軍記ニ見エ右城跡記寛文中ノ後ト記セシ説アレトモ事ハ舊問ヲ書シタレハ證トモ申ヘシ

一寛永十二甲戌年八月美馬麻植兩郡堺目ノ石麻植郡川田村ツ、ノ山小谷ノ傍東手ニアリ小谷ヲ越レハ美馬郡拜村ナリ

一美馬麻植阿波三郡ニ即今ノ景況南ハ川田村種野山金筋ヨリ水流堺則建石通式ノ阿波郡西林村長峯ニテ南北畫一ノ如ク判然タリカ、ル郡堺ハ稀ナリ

一前段ノ通り古今ノ例證ニヨレハ美馬麻植ノ郡界古ヨリ沿革ナキモノト視察スルナリ

郷名

一吳島 上下島飯尾邊ヨリ手ノ島邊ナラン

一川島 川島桑村ヨリ東山邊ナラン

一忌部 學山崎ヨリ種野木屋平邊ナラン山崎村ニ忌部郷アレハナリ

(朱書)

宮島ヲ忌部郷内ト云フ人アレトモ宮島ハ慶長年間檢地帳ニ川島保内トアレハ川島郷タルコト明ナリ

應仁武鑑天保十五年栗原細川右馬頭持賢「阿波」忌部庄三百町「讚岐」小豆島二百五十町云々

居城一 阿波麻植城山京都ヨリ五十一里トアリ右城山ハ山崎村隣村種野山村人城ケ丸ト唱フニアレハ山崎種野村中村

別枝三ツ木木屋平川井八ヶ村ヲ忌部庄トイヒシナラン慶長五年山崎郡檢地帳ニ山崎種野村中村ニテ凡貳百餘アリ餘ノ四

ヶ村ニテ百町ト積ル等ハ町數合ハン持賢元安三年從五位上トアリ慶長九年百五十八年ナレハ大違ヒナカルヘシサスレハ

右八ヶ村ヲ忌部庄(麻植郷也)トイフトモ可ナラン

(朱書)

學ノ西山崎村境ヲ出目ト云フ山崎村ノ打出ニ可有之岩戸ノ池モ學ヘ及岩戸名其他山崎村ト同名ノ字アリ依テ此地ハ山

崎村ニ學ハ籠リタリ

(朱書)

野口先生忌部神社私斷ニ近シ應仁武鑑ヲ見得候ヘハ細川右馬頭持賢山崎村城ノ池ト申地御座候其上ノ種野山ニ城山ト

申地名又城ケ丸ト申處御座候由然ハ細川氏ノ居城ノ城山此地ニ而モ所有御座候忌部庄ト申モ則此地ニ而可有御座候其

故ハ他領ハ他所ニ可有之埋ハ無御座候云々トアリ元寬按種野山ヨリ西京マテ五十一里トノ傍例ハ細川讚岐守成之朝臣

居城勝浦(阿波)郡勝浦京都ヨリ卅七里細川淡路守成春居城淡路津名郡岩屋京都ヨリ廿七里トアリテ勝浦岩屋トノ比較ニ

テ種野山ヨリ西京マテ五十一里ト決定スルナリ

一射 立 瀬詰川田川田山邊ナラン瀬詰村ノ湯立名慶長七年檢地帳ニ湯立村トアレハナリ

右郷順川島忌部ハ和名鈔ト倒置ナレトモ阿波誌洛郷神名記卷物且忌部山湯立名目今ノ景況應仁武鑑等ニヨリ郷名右ノ順ニ定メシナリ

先右概略ヲ以演説可及申ト郡役所ト申談居不申所ヲ以西村氏ヘ應接ニ及候様園木郡書記打合ナリ貞光ノ申立ヲ辨駁スルコト出來ス彼ノ往復書ハ廳中ノ物ニテシラヌ躰ナリ暗ニ辨駁ノ意味ヲ含不申テハ難叶甚困リモノト存居候

元 宣 敬 白

明治十二年八月卅一日日曜發兌

開知新聞第三百卅二號

阿波國忌部神社再興

德 島 尊 基 晴 宣

當國ノ忌部神社再興ハ明治七年ナリ其頃我輩モ驥尾ニ付テ聊カ焦心セシ者ナルカ即チ其御所在ニ付テハ竊ニ異説ヲ聞コトアリ故ニ在官ノ節郷名ノ確證ヲ擧テ終ニ憤懣ノ逸氣ヲ寫シ置ク然ルニ今日猶種々黑燒スル人アリト聞キ忽チ憤鬱衝冠ノ固憊爰ニ起ル夫論ハ公論ニ決シ事物ノ判釋ハ適證ニ據ル然レハ對論比較ノ後ニシテ訴ル所モアルヘキニ川田トカ貞光トカ隱戮ヲ作ルニ均シキ行ヒアリトカヤ是共ニ可恥所ナレハ宜ク説破セント欲スレ共此ニ定メタル敵ノアルニアラサレハ宜シク陰雲ニ對シテ一矢ヲ送ル

忌 部 郷 證

和名鈔ニ吳島忌部川島射立ノ四郷順序ノ濫糅アル故ニ机上ノ論者忌部ノ神ノ御所在此處彼處ト疑惑ヲ生スル所小杉樞郵ナル人百憂千慮ヲ盡シテ其的證ヲ得明治七年ヲ以テ御所在御確定スル所トナル然ルニ獨犬月ニ吠ルノ徒アリテ無稽ノ浮説ヲ以テ御所在ヲ奪ハントスル有リト仄陋ニ傳聞スレトモ我一社ニ於テ言ヲ接クハ恰モ蠅ノ止マレルヲ怒テ劍ヲ拔クノ

譬ニ均ケレハ措テ論セサル所尙美馬三好二郡ノ郷名ナト彼此旋轉セシメ種々奸策ヲ廻スヨシ笑止ノ餘リ一二ノ大雷ヲ下シテ以テ聾耳ヲ開カントス

夫レ忌部ノ郷ハ即チ山崎村三ツ島村兒島村學村（學村半ハ川島ノ郷ニ屬シ半ハ忌部ノ郷ニ屬スルカトモ云ヘリ其同村三ツ森ト云所ニ川島ノ住人工藤伊賀守ト彫シ生姿ノ石アリ傍ニ一首ノ歌アリ

○自然ナル石ヲ見立テ、刻ミオク死テノ後ノカタミトモナレ

トアリ斯クテ慶長ノ人ナリ

種野山別枝山中村山三ツ木山井山木屋平村ナリ而シテ各村山崎村ニアル忌部山ト一ツ山脈ニシテ其山勢溫順ナルコト川島射立ノ兩郷ニ相接シテ而モ形勢ヲ異ニシ自ラ區分アルカ如シ加之押小路殿ヨリ出シトアル彼ノ阿淡兩國神社記トアル舊記ニ吳島川島忌部射立トアルコソ郷名ノ確證ヲ得タリト云フ可シ如何トナレハ應仁武鑑ニ細川右馬頭持賢阿波國忌部莊三百町トアリ而シテ居城阿波國麻植郡城山（京都ヨリ五十一里）トアリ此城跡忌部神社地ヲ去ルコト十五町ニシテ今城ケ丸ト云フ將タ里程ヲ尋ルニ京都ヨリ淡路岩屋ヘ廿七里（此レハ同武鑑ニ細川淡路守成春居城ヘノ里數）次ニ淡路ハ堅二十三里ノ國ナリ而シテ福良ヨリ撫養マテ海上三里撫養ヨリ山崎迄八里都合五十一里果シテ然リ此里數城蹟郷名等符節ヲ合スカ如シ恰モ浮雲卷盡シテ金丸ヲ流スカ如シ明鑑夫レ疊リナキヤヤ
貞光ノ村民ノ淨フ所ノモノタルヤ往昔麻植美馬兩郡ノ境界ノ沿革アリト云説ヲ根據トシテ何クレノ舊蹟舊記ト云フモノヲヒラメカシ其適證トスメレトモカノ異説古クハモノニ見ヘタルコトナク凡寶曆ノ頃ホヒニ起リテ寛成ノ頃ノ雜書ニ記載セル其明徵判然タルノミナラス苟クモ實地上ニ就テコレヲ臨マハ往古ヨリ分界ノ區域一目瞭然タレハナホカノ異説ヲ左右スルハ却テ無用ノ長物ナレトモ今ニ於テ其異説ヲ主張スルコト嚙昔ニ陪徒スル趣ナレハ我輩亦傍觀ニ堪ヘス未タ該境ヲ知ラサル人ノ爲ニ一ニ見認メシ所ノ實説ヲ掲テ尊基氏ノ説ニ蛇足セントス誠ヤ其郡境ニ沿革ナキ第一證ハ成務天皇記五年秋九月令諸國以國郡立造長糒邑置稻置並賜楯矛以爲表則隔山河而分國縣隨千百以定邑里云々ト見ヘタル方モカケ

今ナホ真正ニ遺リテ麻植美馬阿波三郡ノ區域カノ山河千百ノ脈絡景況恰カモ鼎足之如シト云ヘシ其二證ハ延喜神名式美馬郡内ニ收載セル所ノ建神社ニハカノ貞光村ノ西隣半田村ニ鎮座アリテ貞觀二年三好郡ヲ分置セラレシ以降モ美馬ノ半部ハ依然ト現今ノ美馬ナレハ延喜ノソノカミハタ思ヒ合サル、モノナリ（本社ノ所在既ニ寛保三年改神社帳ニ記載セラレテ舊誌ニ符合セルヲ近時證左ナキ他村ニ異説ヲ唱フルヨシナレトモ註妄ナルコト其證アリ）其三證ハ倭名鈔美馬郡ノ郷名第一ニ秦原ヲ配置セルカ今ナホ麻植阿波兩郡ノ境ニ接セル美馬郡第一次ノ村ヲ拜原ト云フコレイハユル秦原郷所在ノ遺存セルモノナリ又麻植郡内忌部郷亦沿革ナキ第一證ハ其所在ノ各村尊基氏ノ説ノ如シ若シ山崎ヨリ種野山ノ山崎ニシテイハユル忌部山アリコソ種野山即チ忌部郷ノ中央ナリ而カモ本郡内事務ノ濟否ヲ管理セル國衙アリシコト觀應正平應安等ノ古文書數紙ニ乘セテ歴然タリ（其頃ハ三ツ木屋平ナトミテ種野山内ノ支邑ナリキ）尋テ細川持賢モ此山内ニ居城シ三好氏一統セシ頃マテモ城壘ナホ存シ今ニ城墟アル所以ニシテ近クハ慶長七年九年十四年等ノ檢地帳ヲ參看シテモコソ郷ノ動モナキ景狀自ラ判然タリ其第二證ハカノ正慶元年十一月氏人十三人ノ契約狀ナリ其第三證ハ今ノ忌部本社祭神日鷲命ニ緣故マシマス式内天村雲神社ハ本社ヲ距ルコト西方三町許ニ在リ天岩戸神社モ東方三町許ニアリ其他所接ノ神社數社ナルカ内式内伊カ、志神社亦近村ニアリ其第四證ハ本郡ノ西隅瀬詰村ニユタテト云支邑アリ是亦倭名抄ニ射立トアル郷ノ所在ノ遺存セルモノナリ（コソ湯立慶長ノ檢地帳ニハ一村ニ立タリ）サテ此射立郷ノ所在ハ瀬詰東川田西川田川田山射立蠅村ナト過半山村ニシテ美馬ニ接シタル各村最モ廣シ凡此六七證徵ハ我輩他糒ノ者ナリトイヘトモ該國舊來ノ史誌ヲ檢閱シ其實蹟ヲ跋涉シ纔ニ閱月ノ奉職中説明セシ所ナリ況ンヤ固有ノ本國ニシテ漸々其今古ノ典籍ヲ歴覽シ徐々其舊趾現在等ヲ探訪セラハイカテカ不可拔ノ審斷ナカラシヤ夫レ山崎ノ其充當實蹟必セリト云フヘシ

第
四
附
錄

丈夫心事
青天白日

明治十三年四月十五日東京裁判所檢事局ヨリ指紙ヲ以テ明十六日午前第九時出頭可致之云々達セラレ依テ翌十六日出頭シテ其趣ヲ届出ツ無程第三號室ヘ廻ルヘキヨシ役仕ノ者告フルヲ以テ之ニ導カレテ該室ニ入ル檢事補何某口達シテ曰ク其方名東縣在勤中阿波國國幣中社麻植郡忌部神社取扱ノ事件ニ付訊問ノ筋有之ニ依テ向後公私共自然旅行ノ事有之時ハ前以テ當局ヘ申立何分ノ指揮ヲ請クヘシ右承知ナラハ其ヨシ請書指出スヘシト右ニ付前條ノ云々承知奉畏旨請書即下ニ指出ス又尋問シテ曰ク其方是迄ノ履歷入用ナレハ一通リ申渡ヘシト故ニ阿波國ノ産ニシテ舊德島藩士タリ又藩廳ニ從事ヒシカ廢藩置縣ニ際シ引續キ德島縣ニ奉職名東縣ニ勤續シタリシカ明治七年七月敎部省ニ轉任セン概略ヲ演フ檢事補其由書面ニシテ明リ使ヲ以テ拙者迄指出スヘシト云フ承知ノ旨返答ス今日ハ先ツ退クヘシトアルニ依テ退出翌十七日は迄奉職セン諸省ヘ提出セル履歷書ヲ寫シ阿部源吉ヲ以テ同局ヘ指出ス檢事補某請取ヨシヲ傳フ

(朱書)

曾テ傳聞スル所ニ據レハ十二年十二月内務省社寺局ヨリ高知縣ヘ照會シテ三木貞太郎自首書ノ主意取調ヲ依托シ又局長ヨリ縣令ヘ親展ノ往復度々アリキト是イハユル折目榮カノ三木所藏ノ古文書ハ專ラ贋造ナリト披露シ其證據タルヤ貞太郎自首ノ書アリトイヘリトナリ依之社寺局長之ヲ調理スル權ナキヲ以テ司法省ニ送付シ云々取亂ノ事ヲ應接ス司法之ヲ東京裁判所ニ送附センハ實ニ二月中旬頃ナリト云フ

同七月四日同裁判所糾問掛ヨリ指紙ヲ以テ訊問ノ儀有之候條明五日午前第八時出頭可有之但シ代人不相成事云々ヲ達セラレ依之翌五日出頭シテ如例届出ツ無程見座ト云役仕ノ者ニ導カレテ第五室ニ入ル糾問判事補加藤恒手掛ニテ演述シテ曰ク

先達テ檢事局ヨリ達シ置ケル如ク名東縣阿波國麻植郡忌部神社取扱一條ニ付巨細糾問セントス就テハ其方ハ先ツ同國出生ニテ名東縣ニ奉職セシヤ又如何ナル點ヨリ右神社ニ關係セシヤ具ニ申演フヘシト答云既ニ此日履歷書ヲ進呈セシ如ク阿波國出生ナリ蓋シ維新前マテハ舊士族中老席ナル西尾數馬一時志摩ト唱フ又者ナリシカ履歷ニ記載セル明治二年ヨリ徳島藩是ヲ拔擢シテ學校ニ附屬サセタリ

(朱書)

出身ノ事明瞭ニ陳述スルハカノ榮先年來榎邨ヲ讒謗シテ一時藩ニ於テ奸計ヲ廻ラシ事ナラス遂ニ捕縛サレテ入牢ノ身トナリ大赦ニ際遇シテ只ノ人トナレリ如此品行ナレハ其取扱ノ事件不正ナルコト推シテ知ルヘシト口ヲ極メテ内務及他官省ニテモ喋々スレハナリ

又忌部神社ニ關涉セルコト藩廳ニ從事セル頃ハ社寺ニ關セル事務則チ主任ノ一ツナレハ勿論ナリ引續キ置縣ノ在官ノ時モナホ同シ但シ拔擢ヲ請ケサル前暫時藩廳神社奉行ノ附屬小吏ニ雇ハレテ式社等ノ取調ニ關係アリキ抑此ノ如キ神社ニ關係アルハ幼少ノ節ヨリ國籍古典ヲ研究シテ我阿波國ノ地誌ヲ編纂センノ念願ナレハ國內同學ニ從事セル人ニハ之ヲ質問シナホ野口年長ト云古老ノ説ヲ信シテ朝夕ノ餘暇此人ニ口授サレ又主用ニテ上京ナトセル時モ三都ノ同學先生ノ門ヲ叩キナトシテ阿波國內ノ典故ニハ少シク見ル所モ出來テ古今ヲ討論シ延テ神社ノ事ニモ及ヘリシヲ以テナリトイヘハ一通リ分明モリ就テハカノ七年一月同社ヲ所在ノコトニ付徵據トヲ舉テ教部省ヘ建言ノ末同年十二月山崎村ニ御決定ノ一卷ハ内務省ヨリ送附セル書類ノ内ニ見エタレトモ其建言ニ及ヘリシ迄ノ概略ハ如何ト加藤尋問ス榎邨答テ事長ケレハ一言ニ盡シ難シ同クハ概略書取ヲ以テ陳白セントイヘハ如何ニモ尤ナリ然ラハ來ル八日迄ニ其書取指出すヘシ尤其方徵證ト見コム所ノモノハ其書名ハ云ニ及ハス其土地ノ口碑ナト委シク書アラハスヘシ素ヨリ拙者此考證學ハ夢ニモ知ラヌコトナレハ成タケシラウトノ判然合點ユキ安キ様ニ記載スヘシト云フ承知セル由ヲ返答シテ退出シ左ノ概略書ヲ携ヘ八日ノ午前十時出頭シテ如例應接シテ加藤氏ニ呈ス先ツ預リ置クイツレ熱覽シテ質問スヘシト口達アリ直ニ退出ス

阿波國式社麻植郡忌部神社所在古今ノ顛末及ヒ取扱概略書

第一條

阿波國麻植郡忌部神社ハ祭神天日鷲命ニシテ神典正史ニ散見スルコト燦然トシテ毛舉ニ違アララス尋テ延喜神名式ニモ忌部神社(名神大月次新嘗或號)ト記載シテ上古而下官祭意ヲサリシ大社ナリ蓋シ式ノ書例タ、郡名ノミ掲ケテ後世ノ如ク其郷村ニ(式ノ頃ハ此書ノミナラスミナ村)及ハサレトモ現ニ今ノ麻植郡忌部郷種野山ニ鎮座セリシコト古語拾遺ノ文(附ニ抄錄ス以下徵證トスル書名又ハ古文書等其)ト該境ノ口碑及ヒ古文書ノ文ニ參照シテ明亮ナリ(サレトモ其鎮座地ノ舊址時代及ヒ所持人名ノ如キモミナ別ニ附録ス)ト該境ノ口碑及ヒ古文書ノ文ニ參照シテ明亮ナリ(ハ今ニシテ判然シカタクシ)爾後今ノ山崎村ノ忌部山ノ尾筋ニ轉座アリキト云フ 其年歴ノ如キ亦詳ナラスサレトモ此山ヲ忌部山ト稱スルハイハ思フヘシ但山崎村ハ往昔種野山ノ部内ニシテ其種野ノ山岬ナルカ故ニ此ノ名アリ然ルニ中古一村落立シテ近ク天正慶長ノ頃ノ檢地帳ニ種野山崎兩立セリコハタ、山崎ノミナラス遠ク木屋平三ツ木中村ノ各山ノ如キモミナ種野ノ一部内ナリシコト正平、觀應、應安、至徳ナトノ古文書ヲ見テ知ルヘシサレハ十三人契約)應永年間ニ至リテ地震ノ災ニ罹リ其社境崩壊狀ニやまさきのいちトイヘル正慶ノ頃ハ種野部内ノ字ナリシナラン)應永年間ニ至リテ地震ノ災ニ罹リ其社境崩壊シ即今ノ社地ニ移轉ス 現今ノ社地ハ本村ノ平地ヨリ直)其震災以前ノ社境(上ニ忌部山ノ尾筋)舊址ハ即今社頭ヨリ直立一町許山上ニイマ猶保存セリ(應永ノ震災ニスリ落チシト云フモノ此社)然ルニ中古ハ措テ論セス細川氏本國守護タリシ前後三好氏ニ至リテモ此地方ハ積歲ノ亂離ヲ經シ頃ホヒ社殿神領ハ更ナリ境内トモニ大ニ頽廢シテ天正十三年蜂須賀氏賜封ノ時ナホ益々衰微ヲ極メシ物ト見エテ殆無キカ如ク書シテ其記事ニ及ヘルモノ絶テアルコトヲシラス爰ニ享保十三年幕命ヲ以テ阿波淡路兩國ノ神社調査ノ舉アルニ乘シ該社ノ本宮ナリト主張セシ者麻植郡中ニ三所(イハユル山崎村天

越權現官ノ島村)美馬郡ニ一所(貞光村)就中山崎貞光其争ヒヲ募ル者四五ケ年加フルニ麻植郡川田村棚保神社祠官中川八幡宮ナリト云)式部ト云モノ神祇伯家白川殿ニ出入スル回ニアレハ自家ノ忌部氏人ナルヲ以テ日鷲神ニ縁故ナキ棚保社(祭神伊弉諾)ヲ忌部本宮ナリト云ヒ争ヒ以上三祠官終ニ阿波國廳(蜂須賀氏)ニ其本社タルコトヲ上告シ裁決ヲ仰クニ至ル然レトモ貞光村一社ノ祠官宮内左近上告スル所ノ者ハ第一郡違ヒトイヒ微證トスヘキ者更ニアラサル故ヲ以テ破毀サル、而已ナラス輕忽ニ國務ヲ煩セリシ罪科ニ處セラレ居住郡内ヲ放逐サル又山崎村日鷲神社ノ祠官村雲莊太夫ハ右事件吟味中隨意ニ上京セシ罪科ヲ以テ是亦海部郡へ放逐サレ特リ中川式部ハカノ忌部氏人上古荒妙ヲ織進スル故事ニ擬シ元文三年 櫻町院天皇大嘗祭ヲ行ハル、トキ白川家マテ麻穀ヲ備進セシト云フ嘗典ニ預リテ奉祀スル所ノ棚保社ヲ以テ姑ク忌部本宮ト見做サレ多那保忌部神社ト復稱シ剩サヘ村雲カ奉祀セシ日鷲神社ヲ始メ山崎村ノ數社殘ル所ナク配祀スヘキ云々ノ命アリテ是裁決結了セシハ實ニ元文六年也(即寛保元年ナリ以上公事處分ノ概略ハ國廳ノ秘書ナレトモ温郵德島藩在勤中)其後又幕命ヲ以テ寛保二年村内神社調査ノ舉アリ同三年ノ帳簿清記ニ始テ東川田村種穂忌部神社(始メ棚保トカキシヲ多那保ニカキ改メ)ト注進セシ以來寛政九年ノ改ニモ同シク本宮ノ如ク記上シテ故障ナク明治三年ニ至ル却說山崎村民氏子等彼ノ忌部公事處分後村雲ノ男某へ奉祀復舊ノ哀願スルコト數十年國廳之ヲ許可セス村民等又配祀中川ノ不體裁數事件ヲ出訴スルコト再三度ニ及ヒテ漸ク寛政十三年村雲ノ孫某ニ奉祀復舊許可アリト雖トモ既ニ忌部ノ稱號ハ種穂社復稱ナカラム所有トナレル後ナレハ單ニ天日鷲神社(又日王)ト號シテ明治三年ニ至ル又美馬郡貞光村ノ一社ハ公事處分後寶曆四年カノ左近カ男兵庫ト云フ者種々ノ計策ヲ以テ忌部ノ神寶ト云物及ヒ天日鷲命四國一宮云々永錄四年辛酉十一月廿四日トアル棟札

ナト出現ト披露シ皆彼ノ一社ノ物ナリトテ再興ノ催シアリケレトモ是亦本宮ハ姑ク種穂社ニ決セシカ如クナル勢ナレハ終ニ其策ヲ施シ得ス漸ニ廢祀ス其證白ハ寛政五年君命ヲ以テ阿波國ノ儒臣佐野少進カ阿波志編輯ノ料ヲ各郡村ニ蒐集セシ時美馬郡端山ノ書上ケニ忌部大神宮ノ社床ト申傳ス古社跡ト記載セシヲ見ルヘシ然ルニ近時又イツホトニカ其社床ト云所ニ三尺四方ハカリノ小祠ヲ假造シテ明治三年ニ至ル

右舊國主蜂須賀氏天正十三年賜封國政ヲ執リテ維新ニ際スル前後忌部神社形勢ノ大略ナリ實ニ享保元文ノ間カノ公事處分ノ如キ之ヲ公平ト云ヘカラス其記録中ノ隱微ヲ一閱シ至情ニ於テ云ニ忍ヒサレトモ當時執政國老某郡奉行某々等大ニ私謁ノ風評アリシト云フコトヒソカニ故老ノ口ニ傳ヘテ今ニ私語スル談柄トナリ當時其事件ノ左右ヲ非議シ或ハ之ヲ道路ニ説キシ者ミナ不相當ノ譴責ヲ得タリトテイハユル連坐ノ多ク波及スル者ノタトヘニ忌部公事ナリト名目スルニ至ルノ以テモ實ニ其處決裁斷ノ不理ヨリシテサラニカノ御所在ヲ得失スル者ナリ自然其本社モ湮滅ニ等シキ情勢ニ立至ラシム嗚呼今ノ盛時ニシテ之ヲ如何慷慨ソモソモ禁スル能ハサルナリ然ルニ寛政五年君命ヲ奉シ修撰精覆漸ク文化十二年ニ成功セシ佐野少進藤原之憲カ阿波志第七卷麻植郡ノ部ニ該社ヲ山崎村忌部山ニ鎮座セルヨシ斷決シテ之ヲ書ケリ當時勢忌部公事ヲ去ルコト未タ遠カラサルノミナラス而カモ寛保元年來幕府へ注進カノ神社帳ニモ種穂社ニ姑ク裁決シテ朝野他ヲ問ハサル頃ホヒ況ンヤ君側ニ侍坐シテ公撰セリト云モノナルヲ聊カ憚ル所ナキハ何如凡テ本文已下ノ作文ニシテ事忌部社ニ及フモノハツトメテ其所在ニ曖昧シ一地ニ決セサル如クカケルモ災ヲ彼ノ連坐ヲ懼レ避ケン筆勢ノ外ナラス、此阿波志ノミ然ラサルハ實ニ大書特筆ト云フヘシ之ヲ以テ之ヲ觀レハ其時代確信スヘキ者有テ必ヤ然ルナルヘケレトモ其之ヲ裁セシ何者ニ據リシヤ今ニシテ容易ニ窺ヒ知ヘカラスコノ卷ヲ緝ク毎ニ追慕切ニ止マサルナリ温郵曾テ神社方奉行附屬小吏タリシ時持論スル所ノ本社正蹟ハ此山崎村ノ神社タルコト其阿波志ニ據ルノミナラスマツ麻植郡中ニシテ忌部郷ハ山崎ヨリ瀨詰ニ連ナレル山ヲ忌部山ト云ヲ以テ之ヲ按スレハ既ニ明和、安永ノ間ニカケル藩士赤堀良亮カ私撰ノ阿府志ニモ云ヘル如ク兒島、三ツ島、山崎ヨリ種野山ニ入り別枝、中村、三ツ木、木屋平ノ邊山中一園ニシテ山下ハ狹ク山上ハ奥深ク廣キ位置ナリシ

ナルヘシ

(宋書)

忌部郷ノ配置倭名鈔ニ記載スル所ハ誤リナリ其順序吳島、河島、忌部、射立ナルコト徴據一二ニアラス此事コ、ニアツカラサレハ委シクカノ誤ヲ辨セス又近時折目榮カ唱フル所ノ美馬郡中ニ忌部郷アルヨシハ實ニ無稽ノ虛唱ニシテ大カタ考證ノ一端ヲモウカ、ワントスル學者ミナヨク知ル所ノ故造言ナリ迷フヘカラス

就中種野ハ當郷ノ中位トイヒ殊ニ本郡内ノ濟否ヲ管理セリシ國衙ノ種野ニアリシコト正平、觀應、應安ノ古文書ニ燦然タリ凡ソ大社ノ近傍ニ國司廳又ハ國衙アル者我阿波國三大社ニ比例シテ之ヲ證スルニ名東郡(往古名方郡今東西トナル)府中村ニ國司廳アリテ(今國司ヤシキト云フ)近村一宮村ニ式大社天石門別八倉比咩神社アリ又板野郡光富保(今東中富西中富ト云フ)ニ國衙アリテ近村板東村ニ式大社大麻比古神社アルヲ見ルヘシ之レ徃古祭政一致ノ制度ナレハ國司其祀典ヲ嚴重ニシテ如此設置アリキサレハ此國衙モ一證ナリ加フル本社ヲ距ルコト一町許忌部山下ノ雲宮ト云所ニ神緣坐ス式内天村雲神社アリ又遠カラサル隣邑桑村ニ式内伊加々志神社アルナトミナ動スヘカラサル的證ナリト思ヘトモ今少シ確乎タル徴據ヲ探リ得サル限リハ張皇スルニナホ心ニ慊ラサレハ益々思惟尊重シテ敢テ彼ノ舊社域ノ四至ノ立石ト云モノナトニ於テ其信ヲ探ルニ及ハス況ンヤ先輩野口年長モ此山崎ニ憾ヲ遺シテ歸泉セシカ其天保ノ頃カキシ雜錄中ニ三ツ木山三木家ノ戸主山崎ノ神社ニ參拜スル故事アリト聞ク能ク尋ヌヘシ(探意)トアルハ見捨難ク居常思ヒテ深メテ其明徴ヲ求ムト論說セリキ

第二條

明治四年五月太政官公達シテ管内忌部神社國幣中社列ニ祭典被仰出云々ト然レトモ德島藩ニ於テ該社ハ第一條ノ如キ形勢ノミナラス加フルニ麻植郡中數所(イハユル川田村高越社宮ノ島八幡宮西麻植村廣堂川田村種穗社牛島村大宮ナリ就中高越及ヒ宮ノ島ハ古シ種穗ハ上文ニ述ルカ如シ西麻植牛ノ島等ハ近キ頃ノ傳説トルニタ

ラ)申立アレトモミナ其舊蹟或ハ傳説ト云モノ只口碑ノ説ノミニシテ之ヲ採用スルニ足ラス於是彼ノ阿波志ノ説ヲ主議スル者アリ或ハ永祿ノ棟札ニ據リテ貞光村ヲ主議スル者アレトモ到底阿波志ノ斷決ハ第一條ニ云カ如ク今ニシテ其適證判然タラス又永祿四年ノ棟札果シテ貞光一社ノ物ニアラサル證ハ既ニ彼ノ忌部公事ノ時未タ棟札ヲ上告セス實曆ニ至リテ他ヨリ求メ得シ物タルコトカノ寶曆四年自家ノ書取ニテ判然タルノミナラス異本阿波志ニモ東山十二社棟札アリ貞光村郷鐵砲村田信藏預リト明文アルハ探ルニ足ラス況ンヤ彼ノ地方ニ主張セル麻植美馬境徃古混淆セシト云フモノハ古書ニ據ルヘキ證ナク無稽ノ臆説ナレハイヨク破毀ニ斷決シ又實保度藩命ヲ以テ復稱セシ種穗忌部神社ノ如キハ實ニ一時姑息ノ處置ニシテ其不都合論スルニ及ハス不得已此體タラク注進シテ朝命ニ遵ハント決議ス依テ西出張所(阿波淡路兩國ノ細事進退ヲ分掌シテ東西南北ノ四出張所ヲ設置シ少參事一人此出張所ヲ主任ス其西出張處)有姿ノ取調書ヲ藩廳ニ進達ス楹帖時ニ藩廳詰ノ權少屬タリ見ル所アハ阿波麻植美馬三好ノ四郡ヲ擔當セル藩制ナリキ

命ヲ以テ又數十日間三郡ヲ巡回シ麻植郡跋涉セシハ八月ナリ曾テ注意スル所ノ該社ニ關スル舊蹟（安政年間私ニ實見シ又探索セシカトモ實ニ幽邃ノ深山ナル三）所々ヲモ點檢シ又カノ三木氏所藏ノ古文書ヲ借出シテ四十五篇親シク之ヲ披閱スツ木木屋平邊ハ本書ニ至テ初テ跋涉ス）

果シテ山サキノ文アル正慶元年十一月十三人連署契約狀ト云物ヲ得タリ其神明ノ冥助アリテ如此ナラント嬉シキ喩ヲ取ルニ物ナシ此時同行巡回ノ命ヲ奉セシ者權少屬加川純一ナリ地理案内及ヒ人民接近諸事周旋セシ者本郡長安倍省三郎ナリ依テ省三郎ニ説テ從來意中ニ蓄藏スル所ノ苦思ヲ據ヘ彼ノ先年西出張所ニ於テ該社取調ノ時此文書探索ニ及ハサリシヤ如何ヲ問フ省三郎及ヒ三木貞太郎答テ云其頃ノ説ニ三木氏祖先ニ關スル書類ニシテ敢テ該社ニ及フモノナシトテ委シク御取調ナカリシト云ヘリ何ソ思ハサルノ甚シキト云ヘシ然レハ七年一月ノ建言ニ説ク所ノ如ク山崎村ニ決定シテ之ヲ按スレハ先年來考證スル所ノ口碑傳説田地ノ小字ミチ以テ信用スルニ足ル云々第一條ニ演フル所ノ持論ヲ懇々吐露シ貞太郎ニ親シク問答シテ其古文書ヲ借用シ數日ノ後歸廳シテ權令林茂平參事久保斷三ニ稟議シ同年十月カノ新造スルニ及ハス且祭典中絶スルニアラサレハ依然官祭ト心得度云々ノ伺書ヲ又教部省ニ進達ス同廿日付ヲ以テ本社所在不分明ニ付未タ官祭被仰出無之但同社官祭無之ニ付而ハ更ニ大麻比古神社ヲ以テ國幣中社ニ被例候儀ト心得ヘシ云々御指令アリ（是ヨリ先キ大麻比古ラル、ノ公達ハ六月ニア）於是權令久保斷三ニ稟議シ預シメ上京建言云々ノコトヲ命セラレ同十一月東京出張所詰ヲ申付リキ林氏ニ既ニ免官ス）

ラル十二月月上旬上京シ教部省ニ出頭シテ彼ノ古文書寫ヲ披露シ其掛リ官員大錄小中村清矩九等出仕栗田寛等ニ應接數々計議スルニ持論ヲ以テシ其證白ヲ披綴セシメ終ニ七年一月縣廳副書ヲ以テ建言ニ及ヒシナリ

第三條

建言ノ後三木古文書原本爲參考可指出ヨシ達アリテ之ヲ教部省ヘ指出ス省ニ於テ衆議スラク忌部一條ニ關係セル稀世ノ文書ナレハ考證借用トシテ影寫サセ度不苦ヤ云々ヲ應接アルヲ以テ不苦ヨシヲ答テ指出シ置ク五月五日ニ至リテ省ヨリ呼出シアリ口達シテ云ク建言ノ趣尤ニ相聞ユルニ付今般檢査トシテ當省權大錄大澤清臣權少錄清水重華出張申付候條此旨中間クト云々而シテ教部大丞ヨリ名東縣令參事充申入有テ榎郵本務差支無之候ハハ歸縣之上立會致候様御申付有之度トナリ依テ歸縣申付ラレ五月中旬歸縣ス其後實地檢覈使兩名ト共ニ所々巡回シ六月ニ至リ兩使歸京ス又同六月下旬教部省ヨリ榎郵採用致度云々懸合アルヲ以テ出京被申付依テ七月ニ至リ出京シ同三十日同省十一等出仕拜命其後三木古文書寫濟ノ趣ヲ以テ還附サレ直チニ名東縣出張所ヘ依頼シ同所ヨリ本廳ヘ送致シ同年中（月日）本人ヘ完壁セリトノ報ヲ得タリ

附 錄

實地ニ關スル證文類

第一條ニ係ル所

古語拾遺 一冊 （大同二年二月十三日從五位下齋部宿禰廣成撰）

天日鷲命孫造木綿及麻織織布（古語阿良多倍）仍令天富命率日鷲命之孫求肥饒地遣阿波國麻織種其裔今在彼國當大嘗之年貢木綿麻布及種々物所以郡名爲麻殖之緣也

右書ハ世間流行ノ者ナリ

種野山ノ口碑ニ神代ニ忌部神カチアサノ種ヲマキ給ハントテ此山ヲヒラキタマヒシ故ニタネノ山ト云々種野山部内廣カリシコト

三木氏所藏文書ノ中正平、觀應、應安、至德ノ四紙ニ見ユ又木屋半村松家氏所藏文書應安ノ二紙モ同シ

山崎村忌部社記（又名忌部緣起）一冊

ヘル所ノモノハ古人野口年長ノ藏本ニ就テ之ヲ得タリ其後阿波志編輯御用草稿書類入小櫃ノ中ニテモ之ヲ披閱ス但シ此
記雅俗二部アリ又寫一册教部省ヘモ指出シ置ク

忌部公事一卷書類(享保ヨリ元文六年ニ至ル)十三册

此書類舊藩執政手許ノ秘書ナリ徳島城内大鼓櫓入秘書長持數十個ノ内ニ收ム

山崎村祠官村雲氏ヘ奉祀復舊云々村民ヨリ連署哀願及ヒ中川氏ノ不體裁ヲ上告スル箱訴等ノ手扣書九通

右麻植郡山崎村麻生秀俊所藏(寫ハ楳郷モ藏セリ)

美馬郡貞光村祠官宮内兵庫寶曆四年忌部神寶及棟札等出現披露書取一紙

右同郡端山飛雲義直所藏寫ハ野口年長筆記ノ内ニモ有リテ名東縣地誌掛備用書トス轉寫シテ楳郷モ藏セリ

阿波志編輯御用草稿書類 一櫃

右佐野少進編輯ノ料ヲ各郡村ニ蒐集シテ注進セシムル所ノ書類ナリ名東縣地誌掛備用書トス(楳郷入用ノ部種ハ抄録シテ藏セリ)

阿波志 十二册(寛政五年起筆文化十二年序アリ)
(儒臣佐野少進藤原之憲奉君命撰)

右阿波志ハ往年城内不出ノ書ナレハ徳島ニ於テモ類本ナシ明治二三年間藩ノ地誌編集掛ヘ下附シ其掛リニ從事セル者始
テ是ヲ縱覽スルコトヲ得タリ故ニ楳郷モ一部傳寫シ其本ヲ以テ教部省ニモ之ヲ轉寫ス

元本蜂須賀氏藏書ナリ姑ク名東縣地誌掛ニ借用セシコトアリキ

阿府志 廿五本(阿波國士族赤堀良亮私撰明和安永間起筆)

右阿府志蜂須賀家藏書ノ外徳島ニ於テモ今所藏主甚稀ナリ士族早雲眞澄古物町市原久三郎等モ少々所藏スト聞ク楳郷モ

入用ノ部種二三册抄録セリ

所々ニ國衙アリシト云コト

三木氏所藏文書中觀應、應安、ノ二紙松家氏所藏文書中應安二紙美馬郡祖谷山菅生氏所藏文書正平三紙等ニ見エタリ寫
ハ楳郷モ藏セリ

三木氏戸主山崎村日鷲神社ニ參詣スル故事アリト云フコト

野口年長天保ノ頃ノ雜錄ニ記載セリ此書名東縣地誌掛備用書ノ中ニ收ム楳郷モ寫シテ藏ス

第二條ニ係ル所

異本阿波誌 凡五部ノ書ヲ集メテ阿波誌ト名ツク佐野氏ノ公撰阿波誌ニ紛ル、ヲ以テ異本阿波誌ノ名アリ寶曆ノ頃ホヒノ
起筆アリ明和安永間或ハ寛政ノ頃ノ記録等アリ蓋シ時代ノ書入ナキ者モ寛政前後ニ係レルコト其人名又ハ記事ノ趣ヲ以
テ著明ナリ

名東郡早淵村後藤豊尚徳島古物町市原久三郎等所藏ス楳郷モ後藤ノ元本ヲ以テ傳寫セリ
右概略書取添書

忌部神社古今ノ願末及取扱ノ儀ニ付建言以前概略別紙ニ綴指出候也

明治十二年七月八日

徳島縣士族 小 杉 楳 郷

東京 裁判 所 糾 問 掛 御 中

同九月三日糾問係ヨリ如何指紙ヲ以明四日呼出アリ依テ出頭ス時ニ折目榮モ同時呼出ト見エテ糾問掛第三號室内ヘ共ニ呼
入ラル糾問判事補加藤氏先ツ折目ト呼テ此程ノ書面ヲト云フ榮進ミツ、答テ彼ノ贖物ノ方ナルヤト問フ加藤唯々ト命スル

ニ依テ榮即下折タル書一紙ヲ指出ス加藤請取テ小杉ト呼フ隨テ進ミ出ル所加藤云其方過日書面ニテモ申出タル如ク山崎ノ
 徵證トスルニハカノ山崎ノ市ト云文アル十三人ノ連署文書カ第一ノ證憑カト問フ榎郵答テ他ニモ徵據アルコトハ先日申出
 タル通りナレトモ山崎ノ明文アリカタニ十三人ノ契約狀頗ル精神ナリト云加藤又云然ニ於テハ其古文書ト云者ハ是カトテ
 一紙ヲ披キテ之ヲ示ス榎郵答ヘテイカニモ夫ナルヘケレトモ果シテ本書カ寫カ手許ニテ熟覽セサレハ極メ難シト云加藤云
 サラハ能ク見ルヘシトテ一寸榎郵ニ渡ス榎郵手ニ取テ之ヲ觀ルニ則本書タルコト疑ヒナケレハイヨク是ニ相違コサラヌ
 ト云テ返却ス加藤又榮ニ命令シテカノ守住ノ手紙ヲト云榮又即下ニ指出ス其時加藤手紙ノ名アル所ノミヲ榎郵ニ示シテ此
 者ハ知レリヤト云榎郵答テ云守住貫魚ハ從來ノ懇意家ナリト加藤何故懇意ニスルヤト問フ答テ貫魚ハ舊藩ノ繪師ニシテ倭
 書家住吉ノ門下ナレハ吾好ム所ノ學事ニ關係屢アリ殊ニ同人ハ故實上ニモ心得顔ナレハ毎度互ニ其功ヲ取換テ相樂ムト云
 年齢ハ如何ト問フ本年七十二餘レリト答フ在縣カ當地カト問フ

(朱書)

コ、ニ貫魚ノコトヲ訊問スルハ是モ社會局員ノ傳聞スル説ニ據ニ折目社寺局へ上告スルニカノ質書ノ筆者ハ主任貫魚
 ナリ其郡村ニ奔走セシハ安倍省三郎ナリ此兩人ミナ榎郵カ意ヲ助ケテ此事件成レリト云ヘリトハ果シテ此訊問アルナ
 ランサレト此ノ云々自首書面ニハ記載ナシ折目タクロ頭ヲ以テ註妄セルナルヘシ

今ハ在縣ナリトイヘハ居住所ハト問フ德島縣名東郡富田浦町字掃除町ト云所ナレト委シク番號ハ知ラスト答フレハ其云々
 ヲ加藤記載セシ様子ニ見ユサテ又加藤問フテ其守住ハ戸主カ隱居カト云フ今ハ隱居シテ郷社富田八幡宮祠官ナリ戸主ハ即
 同人ノ長男ニシテ勇魚ト稱ストイヘハ又其由ヲ記載セシ様子ナリ其後又問テ此貫魚ハカノ古文書ニ關係セサルヤ如何ト問
 フ榎郵答テ決シテ三木文書ニ關係アルヲナシト答フ今モ交際スルヤト問フ固ヨリ先年來不相替交際シテ時々學事邊ノ入用
 ノ節ニハ文通ノ取カハセモスル也ト加藤又詞ヲ改メテ云ニハ兼テ其方ニ訊問スル本旨ト云ハ三木貞太郎ナル者自首書ヲ縣
 廳ニ指出シ其書面ヲ内務省へ進達セルヨリ内務司法へ照會アリテ當裁判所ノ手掛トナルニ起ルナリ其自首書ノ主意覺へア

ラント云フ榎郵答テ案外至極毫モ覺ヘコサラヌ其本旨ト云ハイカナル主意ナリヤ伺ヒタシト問ヘハ加藤答テカノ山崎ノ第
 一ニ引用スル先刻ノ書面ハ主意贋造シテ貞太郎古來傳襲スル者ナリト取ナシタル主意ナリト答フ榎郵襟ヲ正シテ只恐愕ノ
 外詞ナシ抑自首スレハトテ其贋造セント云フニハ手續ノ委シキ御調ヘモアリイツレノ席何人ニ計リテカヤウノノ次第ト
 云フコト明白ニ御見認モアルナルヘシ突然自首書面ノミヲ以テ御糺ニ相成ルコトヤトナシル加藤大ニ怒リテ何モ其方其シ
 ラヘハイラヌ覺ヘカナケレハ其證憑ヲ出スヘシモトヨリ其正邪ヲ取糺スハ此方ノ職掌ナリ甚不都合ノ至ナリト呵ル依テ榎
 郵其自首書御示シ下サレ度ト願ヘハ加藤ヨク聽クヘシト云テヨミ上ル(先時來此應接折目モ傍ニ在テ榎郵ト肩ヲ比テ加藤ノ床下ニ立ツ)之ヲ聽クニ其主意

(朱書) 峻院
 (朱書) 中山助
 (朱書) 左衛門
 (朱書) 森國之
 (朱書) 助吉井
 (朱書) 永藏

タルヤ不慮ノ誣言實ニ切實振腕不堪次第ナリ(自首書ノ寫シ)故ニ榎郵其自首書面ヲ徐々ト答辯スラク御讀聞ケノ次第誠ニ
 不實ノ故造言ナリ先其古文書明治五六年ニ際シテ故造セサル證ハ第一貞太郎自家ノ記錄ハ云ニ及ハス他家ノ著述ニモ新古
 種々見ヘタルコト論スルマテモナシ其自家ノ記錄ト云ハ即チ累祖連綿記ト表題シテ貞太郎祖父ナル者恒太自筆ヲ以テ文政
 頃ニ記錄セシ者也其体裁ハ彼ノ古文書ニ記載セル先祖ノ年曆ヲ追フテ編年シ其年曆ノ下ニ文政十年マテ何百年ト計算ヲ書
 入テ累祖ノ連綿ヲザツト表セルニ似タル物ナレハ實ハ其四十五六通ノ古文書取調ノ目錄ト云ヘキホドノモノ也此書先年貞
 太郎ヨリ他家へ典物ニ指入レシテ近來仔細アリテ名東郡佐古村牛島繁齋ト云者アリ置ル由ヲ曾テ聞ケルヲ以テ昨年來手許
 ニカリ置ク御用ナラハ御覽ニ呈スヘシ又前條古文書ノ事地誌雜誌ニ記載枚舉ニ違アラサル外ニ天保度舊國主上四位上左近
 衛權少將松平阿波守齊昌朝昌朝臣侍從ヲシテ之ヲ内見ニ入レサシム(表面上覽ト云時ハ手數カ)其事ニ預リシ者今ナホ存在
 セルナリコレヲ手近キ證憑ナラスヤトイヘハ加藤云其自家ノ記錄持參ナラハ見スヘシト即取出シテ一閱ニ供ス加藤前後熟
 覽シテコノ書三木家ニアルヘキ筈何ノ故ヲ以テ他家ニ預レルヤ其他家ハ何人ソト問フ榎郵其傳説ニハ川田村種野神官中川
 某へ貞太郎典物ニ入置シト云ヘリ蓋シ其虛實ハ如何シラザレト其の中川家ヨリ生島借用セルヲ昨年來榎郵又カリウケシナ

リ何様榎部ハ生島ヨリ直接シテ借り置ケレトモ其傳來ノ如キ用ナケレハ委シク聞取ラス御用ナラハ地方へ御照會アラハ判然スヘシト云ヘハ加藤又聞フ此書其方何故ニカリシヤ榎部忌部神社考證ノ一端ナレハナリトイヘハ加藤又云ソレハ不審ナリ抑七年其方建言ノ如ク山崎村御決定ノ今日ナルニアラスヤサラハ最早證據ナト取集ルニ及ハヌ筈ナリトワザト變ニ出テ榎部ヲ試ム依テ榎部答テイカニモ御決定後ナレハ今更證據々々トテ取纏ルニ及ハヌ理ノ當然ナルヲ其御決定アリシ七年ヨリ二三年ノ後カノ確乎不拔ト感戴セル御廟議ヲ手ヲカヘ足ヲメクラセ奸策ヲ施シテ紛々異議スル者アリ既ニ己ニコ、ニ比肩セル折目モ其壹人ニシテ剩ヘ今日如此情勢切迫ニ立至リ實ニ丹心斷腸ノ苦思日夕天ヲ仰キテ歎息ノ極何トゾ公平明瞭ノ地位ヲトソカノ七年ノ御決定聊御動議無之様誓テ其時ヲ奉待愚衷ナレハ其證據ノ一端トナルヘキ者ハ新舊ヲ論セス今ナホ取纏メ罷在ナリ然ルニ本日三木家傳來古文書之一節彼ノ貞太郎カ自首ノ如キ近年贋造ニアラスシテ果シテカノ家古襲スル所ノ證據ニ供スルモノトナリシ也トイヘハ加藤云然ラハ其三木家古文書ハ近年贋造ニアラサル證據トシテ累綿指出ス云々添書シテ指出スヘシト命令ス依テ即下左ノ添書ヲ以テ連綿記ヲ指出ス

三木氏累祖連綿記指出添書

德島縣下阿波國麻植郡三ツ木山三木貞太郎所藏古文書ノ儀ニ付彼者自首書面ヲ以テ御糾問之條々承知仕候該家古文書之儀ハ舊來秘藏ノモノナルコト同國ニ於テ新舊地誌類ヲ始雜錄ニモ陸續發見ノ次第就中累祖連綿記ハ貞太郎祖父恒太自筆ヲ以テ文政年中取調置候處傳聞ニ據ルニ近來貞太郎儀同國同郡川田村種穂神社神官中川某儀他品ヲ併セテ典物ニ入金子借用依之右連綿記中川方ニ引取置有之處親類之間柄ヲ以テ同國名東郡佐古村生島繁高借用罷在候由曾テ聞込居候ニ付忌部神社關涉シ證據一端ニ供スヘク昨年十月懸合之上繁高ヨリ手許へ借請有之候處幸ニ貞太郎自首書面ニ背馳シ該家ニ於テ右古文書舊襲スル所ノ者ニ無異論爲證據本日供御檢閱候也

明治十三年九月四日

東京裁判所

糾問掛御中

先本日ハ可引取云々指揮ニ付正午十二時過衛ス

十月六日指紙ヲ以明七日出頭云々達ニ付如例出頭第五室ニ呼入ラル加藤云此自首書暫時下付候條即下ニ答辯書ヲ作スヘシトテ下ケ渡ス手ニ取テ始テ之ヲ熟覽スルニ

明治六年元教部省官員小杉榎部儀麻植山崎村、忌部神社御造營之儀申立度候處山崎村ニテハ一切確證無之ニ付別紙之通相認候偽書參仕右偽書ハ私先祖ヨリ傳候古文書也ト申立吳度且又山崎村日吉谷ノ山上幸少シノ凹地有之候ニ付往古忌部神社ノ跡ニ候趣申立吳候様被相頼候處忌部神社之義ハ神代ヨリ忌部郷吉良御處平ニ御鎮座之儀ハ兼テ私先祖ヨリ申傳候而巴ナラス於朝廷大嘗會之節奉獻荒妙御衣ヲ織歷代古文書ノ確證有之候ニ付右小杉榎部偽書ノ儀ハ斷然相計候へ共小杉榎部重而申聞候ハ於此儀ハ

(未書)

コ、ニ忌部郷吉良御所平ト云フ者美馬郡端山ナリ曾テ貞太郎山崎忌部社主典タリシ片榎部ニ屢々媚ヲ呈シテ説ヘタリシ事モ又其御所在云々ノ如キモ此書面トハ審懐ノ如シ素ヨリ貞太郎ノ痴愚論スルニモ及ハサレトモ此自首書タルヤ一時籠絡サ、ル子細アリテ他人ノ言ヲ我物トシテ訴ヘ出シコト疑ヒナシ必竟忌部氏ノ敗凶ヲ來セル妖言ニ候ニ悲ムヘシ近時辛クシテ此姓氏ヲ世上ニ挽回セシモノヲ實ニ惜ムニ餘リアリ何ノ顔バセアリテ後日榎部ニ邂逅セントスルニカ憫ムヘシ

天朝之御爲ハ素ヨリ神社ノ御爲ニモ相成候間是非前顯之通り申立吳候様申ニ付果シテ天朝ノ御爲神社ノ御爲ニモ可相成トノ事ニ候得共無據次第ニ有之候間任依頼其筋へ可申立旨小杉榎部ニ返答仕候依之右偽書並日吉谷ノ山上ニ往古忌部神社

有之候旨取扱申立候所ニテ此申立ニ依リ明治七年山崎村ニ忌部神社御造營被仰出候然處此度高知縣ヨリ前頼之謀書露顯可致在候得者奉對 天朝重々奉恐入候次第ト心得候間今更前非後悔仕此致速ニ自首仕候間可然御處置被成下度候以上

明治十二年九月廿三日

阿波國麻植郡三ツ木山七十三番邸平民

三 木 貞 太 郎 印

高知縣令 北 垣 國 道 殿

依テ答辯書ヲ直ニ室内ニテ作ル左ノ如シ

楯 邸 儀

舊徳島藩權少屬在勤中明治四年阿波國麻植郡忌部神社國幣中社ニ列セラレ候云々大政官ヨリ御達有之候處該社ハ中古以來類廢似タルノ景況及ヒ徳島藩ニ於テモ享保元文間姑息之取扱ニ相成居候段ハ先日申上置候次第ニハ候へ共楯邸擔當ノ職掌ト申之ヲ不問ニ不指置取調方專注意罷在候處同六年名東縣權中屬在勤中麻植郡巡回ノ舉アリ八月下旬同郡川田村明王院旅宿之節兼テ聞保ヲタル同郡三ツ木山平民三木貞太郎古來處秘藏古文書四十六通借寄熟覽致候處古文書中正慶元年十一月日忌部氏入十三人契約狀ノ紙中ニ山崎ノ市ニ會合云々ノ文アルヲ發見シ彼ノ持論スル所ノ古書ノ徵證地方ノ口碑先輩ノ考證等イヨリ確信スヘキ典故ヲ得同行區長安倍省三郎ニ紹介爲致貞太郎ヲ面會該家ノ傳説及楯邸先輩ヨリ聞傳ル處ノ古實等懇々應接ノ末兩ハニ對シ先年西出張所該社取調之節如此文書何故取調殘ニ相成候哉又此明文山崎ト有之ヲ貞太郎申立ハ不致哉如何ト相尋候所貞太郎答ニ其頃役筋へ先へ咄ニ致候得共私所藏文書ハ只家筋ノ事ニ關係アレトモ神社ニハ各別用ナントノ評ヲ以テ判然御取調ニ不相成候云々トノ事ニテ右古文書不殘借請巡回川濟歸廳之上名東縣權令故林茂平參事故久保斷三等ニ稟議古文書何レモ熟覽被致確定スルニ足ル趣ヲ以不取權令ヨリ云々伺書進達候處十月廿日御指令之次第モ有之候

旁到底楯邸出京教部省へ應接速ニ御決定之地位ニ到ラセ度故久保權令示談有之同年十一月ニ至リ前件貞太郎處藏古文書不殘相携上京右文書ヲ第一證トシテ其他ノ徵證ヲ併セテ教部省官員ニ應接ノ末楯邸建言進呈可然云々該省官員示談有之則該縣廳添書ヲ以同七年一月建言仕候處同五月ニ至リ建言ノ趣尤ニ相聞候ニ付實地檢査使兩官員派出被命楯邸モ本務指支無之候ハ、立合爲致度云々同省懸合有之直ニ歸縣被申付兩官員ト於縣地出會山崎村御舊蹟ヲ始麻植郡中數ヶ所(川田村高越山宮西麻植荒廢地牛島村大字麻植塚等)申立地相俱ニ巡回視聽相濟兩官員歸京其後七月三十日楯邸教部省十一等出仕ニ被轉兩官員ハ復命之後於同省精細典故ニ照會ヲ遂ケ上申ニ相成同年同年十二月ニ至リ彌山崎村ノ神社ヲ以テ國幣中社ニ御決定御祭典被爲興候云々御達ニ相成候儀ニ御座候然處十二年九月廿三日三木貞太郎ヨリ高知縣令北垣國道へ充自首書進呈右十三人契約狀ハ謀書ニシテ明治六年楯邸右偽書持參致此書貞太郎先祖ヨリ持傳候古文書也ト申立且山崎村日吉谷ノ神社ハ往古忌部神社ノ蹟ト申立吳候様重々相頼候趣ヲ以無據任依頼古文書及山崎村日吉谷ノ御實地等取扱云々申立候所ヨリ果シテ山崎村ニ御決定之義ニハ候へ共前條今般露顯可致前非後悔之廉ヲ以可然御處置被下度トノ文面誠ニ以不實之誣告尤恐愕至極ニ奉存候仰該家舊製スル所ノ古文書四十六通之儀者阿波國ニ於テ隨分著明ノ聞エ有之ノミナラス天保度正四位上左近衛權少將阿波守齊嗣朝臣内々城中へ借寄披覽候事モ有之侍臣之内取扱候者今尙存在之者モ有之殊ニ此日入御檢閱候貞太郎祖父恒太自記ノ目錄是ハ累祖連綿記ニモ判然記載有之コレヲ手近キ證憑ニシテ其他彼ノ古文書ヲ收載セル地誌雜錄等新舊枚舉ニ違アラズ皆彼ノ四年ノ國幣社列公達以前ニ係ルモノナリ何ソ六年ニ際シ楯邸故造スヘキヤ又山崎神社ノ儀貞太郎申立ニ依テ御決定セシニ毛頭アラサル云々ハ前書ノ次第ノミナラス先日顯末書ニ記載仕候通ニ御座候依之貞太郎自首書面之儀ハ眞ニ不實ノ誣告無相違御座候間急度同人御糾明相成度此段申立候也

明治十三年十月七日

糾問掛御中

右ノ書面指出候處比日披閱トシテ出シ置タル累祖連綿記還付サレ本日退出可致申聞ニ付退衛ス
同十二日如列呼出サレ出頭ス先日差出シタル答辯書ノ注意口供ニ調成シ熟讀ノ上無異見ハ調印可致加藤判事被申渡ニ付熟
讀スルニ適意ナレハ直ニ調印シテ指戻ス本日ハ先引取ルヘント云ニ付テ十二時退衛ス
同月廿五日如例呼出サレノ上左ノ通宣告セララル

豫審言渡書

東京麹町區富士見町二丁目卅七番地寄留
徳島縣士族
小杉 楨 郎

其方義正慶元年十一月付ノ古文書一件遂糾問處犯罪ノ證憑無之ニ付釋放ス

明治十三年十月廿五日

東京裁判所

糾問掛

東京裁判所
糾問掛印

かのし禮ものらかたうときを
ものするあま梨のか那しさよ

(朱書)

麻穀

あさかちの□さしも

しらぬ人くさよ

神の

無かしをはかむさすなり

(朱書)

明治十四年十月八日寫終之此書原小杉氏自筆也尊基晴宣借得之又再借之而寫置之云爾

伊月高齋

昭和五年六月二十五日印刷
昭和五年七月一日發行

(非賣品)

町代表者 重本榮助
德島縣麻植郡山瀬町役場

印刷人 宮本儀市
德島縣麻植郡山瀬町大字
山崎字西久保五〇ノ一

印刷所 宮本印刷所
德島縣麻植郡山瀬町大字
山崎字西久保五〇ノ一

印刷所 中山印刷所
德島市二軒屋町本町
西四十二番地

終

